
巫女と依巫

若宮 不二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巫女と依巫

【Nコード】

N0703L

【作者名】

若宮 不二

【あらすじ】

卒業間近の中学3年生、永山雪羽　ながやま　ゆきは　は追い詰められていた。校舎の屋上から落ちた瞬間、異世界に召喚された。神の器である依巫　よりまし　にされるはずが失格とされ……「今すぐに帰らないと、就職がつ！」雪羽は元の世界に帰れるのか？本人の意思とは関係なく、巻き込まれて……

注1）作者にとって初めての小説です。　注2）拙い文章だと思われます。　注3）試験的かつ思いつきで書いています。読んで書いてみたくなりました。　それでも読んで下さる方のみ、お進み

下さい。ヒマ潰しになれば幸いです。

1話 不幸な幸運（前書き）

その内『R15』『残酷な描写あり』のシーンが出てくると
思います。

1話 不幸な幸運

その時、私は諦めた。

(もう、いいや……)

結局、自分には生きる場所などなかった。
あの日から。

(もう少しで逃げられると思ったんだけどな……)

この地獄から。

あと、3日耐えればよかったはずなのに。
やっぱり上手くない。

でも、それも
もうすぐ終わる。

校舎の屋上から落ちたんじゃ、さすがに無事ではられないでし
よ。

死ぬかな？

死ななくても大怪我は確定。

痛い、イヤだな。

すごく、痛いんだろうな。

目を硬く閉じて歯を食いしばる。

グシャッ！

ものすごい衝撃がした。

頭が痺れる。

クラクラする。

周りがピカーッと白くて強い光に包まれた気がした。

ああ、天使のお迎えだね……

ネロのように、犬は迎えにこないけど、光に包まれて召されるっていいな……

その後、ものすごい落下感とエレベーターが止まった時の感じがした。

（？ え？ 落ちた？ 地獄行きってこと？）

……………。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！

死んでないわ。

体中、痛い。

あたし、
生きてる。

でもっ！

あああああ！ 無事じゃな~~~~い!!!
なんか、どうか
折れてる？

っていうか

全部痛い。

痛すぎて

息、できない！

全身骨折とかしてる？

なにっ！これっ！

死んじゃう？

やっぱり、あたし死んじゃうの？

死ぬならせめて、即死にしてっ！

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

うつうつうつうつうつ~~~~

あたしが、それでも、必死で息をしてたら

なんか、でつかい手で

髪の毛を驚掴みわしづかされて

ぐつと頭を持ち上げられて

そのまま 吊り上げられて

あたしは、宙ぶらりんになった。

頭の皮が破けそうで……

視界は真っ赤でよく見えなくて……

体中が痛くって……

息ができなくて……

意識が朦朧もうろうとしていた。

「+++++?+++++?+++++。」「

なんか、わけ わかんないこえ?が
きこえるよ……

「+++++。」「

ベシヤッ。

て

はなされた？

(きゅうきゅうたいいん にとっては あらうぽすねる……じうく
けってい ってこと?)

あたしのあたまのなかは
きゅうに くらくなつた。

1話 不幸な幸運（後書き）

初めまして。若宮不二です。

どこまで、自分の思うように書けるか不安ですが、がんばってみます。

すぐに挫ける脆弱な心なので、温かく見守って頂けると有難いです。

2話 召喚したものの 1 side シード

召喚は成功するはずだった。

奴が巫女を召喚し、俺が依座よりましを召喚する。

ただ、それだけの事。

150年ぶりの召喚で、前回の事を直接知る者はおらず、口伝と書物の知識での術式だが そんなこと、関係ない。

確かに召喚術は高度な術だし失敗する確率も高い。
だからこそ、出来うる準備は、万端整えた。

はずだった……

「ソレ」が魔方陣の中に現れるまでは！

先に術を発動させたのは、奴。

大神殿の地下にある召喚の間に 2つ並べて敷かれた魔方陣。
その片側が光を帯びる。

光が強くなり、光がはじける。

眩んだ目が元に戻り、魔方陣を確認すると

14・5歳の少女が、目を見開きながら
立っていた。

周りからは

「おおお……」とか

「素晴らしい！」とか

「書物の通りだ！」とか

感嘆の声が上がる。

忌々しいが

成功したようだ。

まっすぐな黒髪は腰まで豊かに流れ

艶やかに波打っている。

怯えたように見開かれた瞳は

漆黒の闇をたたえ

神秘の神の世界へ誘うよう

ふつくらとした 紅い唇は

濡れたように輝き

熟れた果実を連想させた

これが「巫女」か……

少女の姿に神官のジジイ共はご満悦だな。

奴は自分の仕事に満足気で、俺の方を見て親指立ててやがる。

エールでも送ってるつもりか……親友気取りのおうじ様。

さて。

俺も完璧に呼び出してみせる。

俺は出来る。

詠唱に入って
魔方陣が光る

光が収まって現れたのは……

？

赤と
白と
黒と……

ぼろぎれ？

いや、
違う。

「ソレ」は、かすかに動いている。

「なんですか？これは？シーワールド殿」

耳障りな声^{おとし}がした。
奴の取り巻きの大貴族の息子、（俺が心の中で
呼んでる）ロイスが、癪に障るほど丁寧^とに尋ねる。
そして魔方陣のソレを引きずり上げた。

！

子供だ！

召喚したのは女性なのだから、人間だと驚く方が間違いである。

しかし、その少女は

鼻や口からも血を流し

ぐったりと

まるで狩られた兎のように

男の手でぶら下げられていた。

「失敗ですな」

嘲りを口角に貼り付けて

男が言い、少女を投げ捨てた。

確かに、神の器としての依巫よりましのイメージからは程遠い。

それにこの状態では、使い物にならないと言いたいのだろう。

しかし、それは 神の器として召喚されし乙女にする行為なのか？

涌いた怒りをかみ殺す。

その後も、最悪だった。

「ジジイ共は薄ら笑いを浮かべながら

「まだ若かったから無理だった」とか

「高度な術だから、仕方がないさ」とか

「運が悪かったんだよ」とか

口々に慰めとも嘲笑ともとれる言葉を、俺に放った。

（貴様らも、同じ考えか……）

眼鏡に適った巫女を喚べた、奴を讃え
見目麗しい、巫女を讃え

大神殿にある 迎賓館へゾロゾロと上がって行った。

3話 幸福な誤解 ｝side雪羽

（ うーん ）

なんだか、ポカポカする……
あったかい。

ふしぎだなあ……
背中が柔らかい。

ふかふかの、おふとん？

じゃあ、ここは保健室かあ……

でも、いままで、こんなに フカフカだったかなあ？
それに、すごく、いい匂い。
洗濯洗剤の匂いじゃないね。

……………。

目を開くと、それは、知らない天井だった。

真っ白い 漆喰みたいなのが
天井と壁にも塗られている。

部屋を見渡す。

広さは6畳程。

窓、1つ。

石の壁が窓の形にくりぬかれてて、細かく区切られ少し歪んだガラスが嵌め込まれたステンドグラスみたいな窓がついてる。

木の机と椅子が1つ。

床はフローリング。

そして、あたしが今居るのは

木のしっかりした造りのベッドで

フカフカのお布団の中。

なんだか、テレビで見たヨーロッパの古城ホテルみたい……

石づくりの建物みたいだし……

ここ、どこ？

なんで、あたし

ここにいます？

思い出そう。

ええ……と。

あたしは学校の屋上で殴られてた。
いつものように。

で、3日後が卒業式で
すぐ住み込みの仕事に就くから、髪の毛をそろえたんだけど
それが、どうもあれらの気に入らなかったらしく

ジャキジャキと刈られ

卒業記念に犯^やっちゃえ

とか言つて

制服脱がされ…… ってか破られたっ！
擦り切れた下着を見て嘲^{わら}われ

その隙に逃げて、

（それは、イヤ！イヤ！イヤ！！ 絶対絶対絶対絶対！イヤ！）

（最初の人は、好きな人！無理やり、集団でなんてありえない！し
考えたくない！）

（冗談じゃない！ やだ！！ やだやだやだやだやだ！）

屋上の柵超えたら

生意気！

とか言われてモップの柄で突かれた。

絶えてたんだけど

誰も屋上見てくれる人もいなくて……

あいつらもだんだん興奮してきて

鼻にクリーンヒット。

目の前に火花も飛ぶよ。

思わず、

反射的に、

のけぞった。

で、

落ちて大怪我したはず。

病院じゃないよね？ ココ。

(……………。)

そういえば、体、痛くない。

すっごい！

あんなに痛かったのに！

直ってるよ？

昨日殴られた青タンとかも消えてるし！

ありえないし……

(死んだな。)

これは、もう、決定？

でも地獄の感じじゃないよね？

じゃあ、ここは天国ですか？ 洋風だし……

いやゝはははははは

イイ！！

良いです！！！！

死後の世界、最高！！

傷のない世界！

今までどっか痛いところあったからね。

そして

布団で寝れるなんてえゝ

気っ持ちいいゝ！

ごろん、とふかふかの布団に寝そべったら、
なんだか眠くなった……

（あ 眠ってもいいんだよね。だって死んでるんだもん。）

あの女に蹴り付けられないんだよね……
ははは

（なんか、大事なことを忘れてる気がするけど……）

（思い出せない…… 眠い）

あたしは再び眠りに落ちた。

4話 小さな決意 ｝sideライア

ドアを軽くノックする
返事は無い。

まだ眠っているのかしら？

そつとドアを開け、中に入る。
ベッドを覗くと、小さく丸まってよく眠っている。

良かった。

うなされてもいないし、痛そうでもないわ。

2日前、シーワールドが召喚に成功した依座様を見た時は 驚いたわ。

まさか依座様が、こんな子だなんて……

まだ小さい子供。

傷だらけで、汚れて、瀕死の状態で……

治療法師の サリエスに呼び出されて、集中治療室で治療をする
際に裸を見た時、

昔の記憶が呼び起こされて、心臓を握り潰された様に 締め付け
られた。

わたくし
私の中の消えない記憶。

忘れてしまいたい、でも忘れられない愛しく悲しい思い出と、目の前の痛々しい少女が、つい重なってしまう……

いいえ、これは、依座様。

私の可愛かった、あの子じゃあない。

そう自分に言い聞かせて、サリエスを手伝った。

依巫様は

何処か高い所から落ちたみたいに骨が数ヶ所折れていた。鼻も折れていた。

それと、打撲。

しかも、それだけじゃなく

身体中痣だらけで酷かった。

明らかに殴られた跡だわ。

小さい火傷の跡も沢山あった。

昨日今日でできた傷じゃない……

一体、どうしたらこんな非道い事になるのかしら。どんな暮らしをしていたのかしら？

奴隷の焼き印は無かった……

親に捨てられた

浮浪児かしら？

分らない。

分らないけど

私^{わたくし}がお世話する以上、もう酷い目には遭わせませんわ。

サリエスが治癒魔法を施しましたもの。

傷はすっかり癒えたでしょう？

起きたら美味しい食事にしましょうね。

栄養を取ってゆっくり休めば

カサカサの肌も、艶のない髪も、痩せこけた体も 良くなるわ。

だから、今はゆっくり

おやすみなさい。

5話 ころは?? side 雪羽

(うーん)

よく寝た。

こんなに、ゆっくり寝たの初めて？
目を開けても なんかボヤける……

目をゴシゴシこすって しばしばすると
ピントが合ってきた。

天国のままだ。

よかった。夢じゃなかったんだ。

うーんと伸びをする。

(気持ちいいなあ)

お布団でたっぷり寝たのって何年ぶりだろ？

お父さんに女が出来て出てっからだから5年？6年？
目覚めて何処も痛くないなんて！

天国万歳！

ぐぐぐぐぐ

お腹、鳴った。

お腹が鳴ったよ！

へえー

死んでも お腹、空くんだ……
っていうか

すっごいペコペコなんだけどっ！

空っぽだと胃が壊れちゃうよ？

死後の世界で胃潰瘍 気にするって変だけど。

なんか、なんか、なんか食べたい！

天国なんだから、食べ物あるでしょ？

少なくともリングゴはあるよね？

自信ないけど。

とりあえず、起きよう。

この部屋に食べ物は無さそうだし……

どっかに食堂とかあるんじゃない？

天国なんだから無料だといいなあ。

ベッドから降りて 部屋を出ようとしたら
ペシヤリ。

あつれ？

足が立たない。

ベッドに掴まって立ち上がろうとしたけど
足に力が入らない！

なんで？

ってバタバタもがいていたら ベッドカバーやら布団やらが絡ま
って

床の上に 山が出来た……

うつうつうつ。

なぜだ？

コンコンコン

ドアがノックされた。

びっくりして凍りつく。

解らない言葉がして、ドアが開く。

入ってきたのは、男の人。

そう、例えるなら……

スター○オーズのジェ○イの騎士な人だ。ちっこい緑のお爺ちゃ
んじゃないよ！

年齢は30歳位かな？

くるぶし位まである丈の長いフードつきのマント？みたいなのを
羽織って、

厚手の黒い布マントの裾とかふちには銀糸で刺繍がされていて、
映画より上等の感じがする。

騎士？魔法使い？

長身180cm超えるよね190位あるのかな？ スラッとして
いても、でっかいなあ。

ここが天国なら、この人は天使？神様？

どっちにしても、そのイメージからは外れるような……

なんて事を固まりながら考えていると
向こうもあたしの状態に気付いて、ぎょっとしたみたいだった。
そして、つかつかとあたしに近寄ると

「+++++。」

解らない言葉を一言かけて、あたしの手首をつかんだ。

ビクツと体が震える。

あたし、人に触れられるのやなんだけど！

（何すんの？あたしいけないことした？この男の^{かお}人表情が怖いよっ
！）
ジェ○イのちょっと怒ったような顔に、じわりと恐怖心が持ち上
がる。

（放してっ！）

手を振り放そうと、もがくけど放してくれない！

（うつうつゝやだようっ！怖いよう！）

「+++++、+++++……」

（言葉わかんないよっ！もう！放せよっ！）
必死で手を振るが、動きが緩慢な気がする……

（あれっ？ 手に力入んない？ そっいえば立てなかったし……）

自分の体の状態と、人に触れられるという最も苦手な状況にフリーズしかけていたら、手を開かされ、指に何かをはめられた。

（指輪だ）

何？ 何だ？ なぜ指輪？

「これで言葉が通じるはず。俺の言っていることが解る？」
低いけれども、涼しげなよく通る声でその人は言った。

（……あ。日本語。）

覗き込まれるように、じっと見つめられて恐怖とは別の緊張感が込み上げてくる。

「……はい」

なんとか一言搾り出せた。
手も放してくれた。

「よかった。言葉違うから……その指輪が通訳してくれる」
ジェーイがフツと軽く微笑む。

う。

この人、かつこいい！

恐怖と緊張で気が付かなかったけど、かなりの美形ですよ。
真顔はキツイ感じで心底怖く感じるけど、笑うと印象変わるなあ、
他人に微笑まれることなんか無い人生だったから、こんな男前さ
んに笑いかけられるだけで、赤面してしまう……

笑ってなかったら、ちょっと、いや、かなりとっつき難い雰囲気
なんだけど、笑うと目つきの鋭さがフツと緩む。ギャップが凄し！
瞳の色が 薄めのオリーブグリーンで

髪の毛の色は……

暗い金髪？黒に近い茶？端っこのほうは金にみえるよなあ

何色って言うんだろ？色抜けていくのかな？

なんて、つい まじまじと見ていたら

ぐくぐくくく

またもや

腹が！

はっ！はずかしいいいいい！

人生初、男前に微笑まれておいて

なぜに

鳴るよ？あたしの腹。

お約束ともいえるが、あたしは超絶美少女でも最強でもないぞ……

案の定、ジェ〇イはプツと噴出すと、表情をかなり柔らかくして
「元気になった証拠だな。俺の名は、シーワールド・レスコス。よ
うこそ、アースリンドへ」

そう言うつと握手した。スツと握ってパツ放す軽いもので、気づけ
ば離れてた。

立ち上がれない、あたしを支えて立たせてくれて
テーブルまで連れてきてくれた。

人に触れられるのは苦手なんだけど、なんだか すごくそつと支

えてくれてる感じがして

不思議なことに、もう恐怖感は無くなってた。

「少し待っていて。何か持ってください」

と、さわやかに出て行った。

声出せなかった…… ありがとうとか…… 人としてダメだろ、あかし。

そしてシーウェルド・レスコス、親切すぎ。こんなに親切にされて逆に居心地悪いよ……

親切馴れしていない あたしは不安になる。

待てと言われたので、椅子に腰掛けて待つが ふと疑問に思う。

（アースリンドって何？ 場所？ 天国にも地名あるとか？ まさか……？）

そう、死んだにしてみれば やけに感覚が生々しいのだ。

腹は減るし

自分の手をつねってみても、痛いし

息、してるし

止めると苦しいし……

やだな……

あたしは、やな展開の予感に暗くなってきた……

そういえば、あたし下着だったはずなんだけど、長袖でゆったりしたワンピースを着せられていた。

白で、厚手のたぶん木綿地、所謂天使服？

お笑いコントの天使が着ている服のまんま。

生地は滑らかで、上等そう。

寝巻きなんだろうか？

ブラははずされていたけど、元から胸は無いから問題ないけど……
悲しいかな ブラをしてないと、丸っきりの子供だ。

ドアがノックされた。

はいと答えると

さっきのレスコスさんと、小太りの小母さんが入ってきた。

ちよっと前はすごい美人だったっぽい、その小母さん女がトレ
ーにのせた食事を出してくれた。

「おまたせしました。

私はお世話係りのライア・パーキンスでございます。ライアとお
呼び下さいまし。

姫様。 さ。冷めない内にどうぞ召し上げれ」

元美人小母さんが言う。

（姫様って！何？！）

「あ、わたし 永山 雪羽と申します」

あわてて名乗り、お辞儀をする。

（姫じゃないですっつ）

それにしても、すごい顔一杯笑顔だ！ライアさん！

満面の笑みってまさにコレ！

こんなに笑顔で話しかけられたのも、親切にされたのはじめてです！

はい。

ましてや見ず知らずのお方に……

目一杯微笑まれて、相手が小母さんでもドキドキしてしまいます。

「ナーガ・ヤーマ・ユキ八様。……ナーガ様とお呼びしてもよろしいですか？」

発音しにくそうにライアさんは言った。

（しまった。外国っぽく 逆に言わなきゃ）

「永山が姓で、雪羽が名前です。ユキハ・ナガヤマです。ユキ八でいいです」

「失礼いたしました。では、ユキ八様とお呼びしても？」

ユキ八様はここに召されて2日間、何も口にされてないので、今はこんな食事で申し訳ございません……

あまりしっかりした物だと体が受け付けませんので。お許し下さいませ」

ライアさんが、すごくすまなさそうに言った。

（そそそそ、そんな丁寧な言葉遣いであやまらないで下さい）

「いえ。様なんで付けなくて下さい。おいしそうです。いただきます」

もう、どう対応していいのかわかんないので
とにかく、食べる、いただきます。

メニューはポタージュみたいな具のないスープと、皮の柔らかいパン、コップに入ったミルク。

お腹が減っていたってのもあると思う。でも

五臓六腑にしみわたるうゝゝって、こういうことなんだって分かった。

スープはきつといろんな材料が溶けて入ってるんだろかなと思わせる、栄養ありそうな味がした。

パンは 白パン？ 皮も柔らかくって まだ ほんのり温かった。

ミルクは……牛乳じゃないと思うんだけど、濃厚で美味しかった。

あんまり美味しくて、もくもくと食べてしまった……

最後のミルクを ふはつと 飲み終わると、なんだか気恥ずかしくなった。

二人とも、ほんわかしただ目で見てくれていた。

「ごちそうさまでした。 美味しかったです。ありがとうございます」

照れてしまって、うつむたまま お礼をどうにか言えた。

お口にあって良かったと、またまた笑顔で対応されて

どうやら迷惑に思われてないようなので、ちよつと安心して

思い切って、自分から聞いてみた。

「あのう。ここは何処ですか？ なんで私は此処に居るんでしょう？」

返ってきた答えに驚いた……

あたしは死んだわけじゃなくて、召喚されたい。

召喚って！ 何よつつつ???

あんまり突飛な内容で現実味が無い。

（わぁ）。 小説にありがちな異世界召喚物じゃ～ん。
なんか、すっごい最強になってたりするの？あたし！ 魔王やつ
つけちゃう？勇者？逆ハー？王子様？）

とか、ちょっと期待したんだけど……
微妙な立ち位置であるような……

とにかく

レスコスさんが説明してくれた内容を整理してみる。

まず

ここは魔法のある世界で、大陸全土を巻き込む大戦争がおこり
うで、

この国（アースリンドって国名らしい）は負けそうである。

で、神の力を借りて攻めてくる敵を追い払おうと

昔から伝わる方法で

神の声を聞き、伝える、巫女みこと

神の器いれものれ物になり戦神と成る、依巫よりましを
魔法で召喚することにしたらしい。

この世界の人間なら、みんな持っている魔力が邪魔をして
巫女や依巫になれないそうで、仕方なく他の世界から召喚するの
である。

ところが、巫女は普通に召喚されたが
依巫はボロボロのあたしが召喚されてしまい
新たに召喚するかどうか検討中だそうな。

あたしが嵌^はめている指輪は依巫用の物で新しい人が来るまでは貸
してくれて

衣食住も保障してくれる。

レスコスさんの職業は上級魔道師。この人があたしを召喚した。
ライアさんは女官長であたしの世話係もしてくれる。

とりあえず、今聞いた情報はこれ位。
ゴメン、一氣にいろいろ説明されても無理だから……

あまり展開についていけないあたしに
「心配しなくて大丈夫。今は体を治すことだけ考えて」と ライア
さんは氣遣ってくれた。

（やさしい人だなあ）
あたしってお人好しだろうか？
怒ったりするところなんだろうか？
でも、怪我治してくれたしなあ……

そして、ライアさんは ひまわりみたいな明るい笑顔を振りまいて
「疲れたでしょう、ゆっくり休んで下さいね」と、
レスコスさんをそのふくよかな体で押し出すようにして出て行っ
た。

……疲れた。

実は、まだ治りきってないんだろうか……

体がだるい。

考えること、いっぱいできたのに、頭がぼおとする。

とりあえず、すぐにどうこうするわけじゃないみたいなので、寝てから考えることにした。

（あたし、寝てばかりだなあ）

まあ、眠れる内に寝とくのは悪くないと思う。

体力回復と、頭の中を整理するために、あたしはとっとと寝た。

5話 izzは?? ～side雪羽(後書き)

眠れる時に眠っておき、食べれる時に食べておくのが雪羽の基本です

6話 召喚したものの 2 \ side シード (前書き)

2話の続きの話です。

6話 召喚したものの 2 side シード

取り巻きA　ことロイス・エツカートに、その子供を投げ棄てられた時、俺は頭が沸騰するかと思った。

まず、この子供を粗雑よりましに扱った事に、ものすごく腹が立った。ジジイ共の言っていることにも腹が立った。

（俺の召喚した娘は、依巫よりましで、尊ばれて当然の希まれなる存在のはずだ！）

（巫女と比べても、決して劣る存在ではない！）

そう心の中で叫んでいた。

早く駆け寄って、助け起こしたかったが、俺が頭で考えているのとは別に、俺の心は　今の状況に少なからずショックを受けていたようで

不覚にも固まってしまい　動けずに、ただ突っ立っていた。

皆がぞろぞろと出て行って、呪縛が解けたように　俺はあわてて少女に駆け寄った。

よかった。

まだ息がある……

応急処置で治療魔法をかける。

得意の分野ではないが、一刻を争いそうな状態だった。見た目より、容態は悪いのかもしれない。

念話で治療法師のサリエスに助けを求める。

転移ですぐ来てくれた。

院に移して集中治療してくれることになり、彼女を抱えた。

あまりの軽さに怖くなる。

体の冷たさに背筋が凍りそうだった。

なぜ？

今、初めて会ったのに。

なのに、この命が消えるのが恐ろしい。

助かって欲しい。

俺の召喚魔法が不完全で、彼女をこんなに傷つけたのだろうか？

自分が呼ばなければ、死の淵をさまようことも無かった？

俺のせい？

俺のせいなのか？

なぜ、こんなに心が乱れるのだろうか？

自分が召喚した少女が、瀕死の状態だから……

只、それだけなのだろうか？

サリエスはチームを組んでくれて、彼女は集中治療室の中。

サリエスはこの国で最も優秀な治療法師だ。大丈夫。

きっと助かる。

祈ることしか出来なかった。

（どうか、助かってくれ……）

あのサリエスをして、治療には数時間を要した。

だが、幸い命に別状は無く、骨折や内臓の破裂なども粗方治した

そうだ。

あとは。2・3日治療を続ければ完治することと、安心した。個室に移したところで、依巫よりましである。この少女の看病と世話は、女官長のライアが受け持つてくれることになった。

ライアなら大丈夫。

安心して任せられる。

サリエスが手配してくれたのだろう。

（感謝しないといけないな。）

そして、俺は召喚と応急治療で魔力をはば使い切り、フラフラになりながら、報告の為に執務室しやくしつへと向かった。

魔道府まどう ラズモント執務長官に今日の報告をしようと執務室に入ると、長官は既に帰宅していて、副長官に明日報告するよう言われた。

サリエスの治療中に念話で報告はしていたので、召喚の結果は皆に知らされているようだ。

俺からの報告以外の筋書きが、執務室内に飛び交っているらしく「大変だな。頑張れよ。」などと執務室の面々から励まされた。

（どんな話になってるんだろう……）

頭をかかえながら、部屋に戻って今日はもう寝ようと居住棟へ向かいかけたが

ふと あの子がちゃんと眠れているか気になった。

（ライアが付いているんだから、大丈夫に決まっているのは判っている……）

でも、一度気になった事は頭から離れない。
疲れているのに、こんなことで悩むのもバカバカしい。

（そう。 ちょっと、気になったから容態を聞きによっただけ……）

病室に向かう廊下で、ライアに出くわした。
容態を聞きに寄ったと言うと、生温かい目で微笑まれ

「安定してるわ。 今は、よく眠ってらっしゃいます。 でも、折角来たんだから、お顔だけでもご覧なさいな」
と半ば強引に部屋に連れ込まれた。

少女は、よく眠っていて規則正しい寝息が聞こえた。
丸くなって眠る姿は、まるで猫だ。

ライアに、よろしくと頼んで、俺は疲れた足を引きずるように自室に戻り、ベッドに倒れこむと そのまま深い眠りに落ちた。

濁っていく意識の中で、少女が目を開けたらどんな顔になるのか
と ぼんやり考えていた。

7話 初めての会話 〈sideシード〉(前書き)

5話のシーワールド視点です。

7話 初めての会話 ｾ ｓ ｉ ｄ ｅ シ ｰ ｾ

召喚から2日後、俺が少女の部屋に入ると、彼女はシーツの山に埋もれていた。

少女と目が合う。

濃い茶色の瞳を潤ませて、びっくりしたように俺を見ている。

黒目がちでこぼれそうな大きい目を、長い睫毛まつげがくつきりと縁取り、影を落としている。

不揃いに刈られた黒髪と、痩せてこけた頬。

唇だけがふつくらとして 赤いサクランボが付いているようで、可愛いのに かえってそれが ひどく不釣り合いな印象を醸かもし出している。

ここで双方固まっても、埒があかない。

長官から預かった通訳の指輪を嵌はめなければ、たぶん言葉は通じない。

「ちょっとゴメン」

理解できないだろうが、一応声をかけて シーツから出ている手首を掴つかむ。

少女はビクンと体を震わせて、手を振りほどこうとする。

でも、その抵抗は あまりにも弱々しく、少女の体が衰弱していることが見て取れた。

「怖がらないで、指輪を嵌はめるだけだから……」

なおももぎ、逃れようとする その手を開き指輪を嵌はめた。

「これで言葉が通じるはず。俺の言っていることが解る？」
少女に尋ねてみる。

少女は答えない。

（あれ？解らないのか？ それともしやべれないとか？）

「……はい」

少女が少し掠れた声で返事をした。

その声が耳に入った瞬間、ゾロリと背骨を這い上がる何かを感じた気がした。

今まで感じたことのない奇妙な感覚をごまかすように

「……よかった。言葉違うから…… その指輪が通訳してくれる」
と、つつかえながらも言って、滅多にしない愛想笑いを貼り付ける。

（……………。）

少女は無言だ。

そして、俺を凝視している。

痩せて小さい顔に目だけが異様に目立つ顔で、外を伺う猫の様に目を光らせて、じっと俺を観察しているようだ……

（何か言わなくてはっ！ ええっと……何を言うか、考えてきたのに！）

いつも冷静沈着なはずの俺の心臓の音が煩い。
背中が、変な汗で湿ってきた。

今まで誰に、どれだけ見られようが、焦ることなどなかったのに

……

（そもそも なぜ、俺が焦らないといけないんだ？）

突然、

「ぐぐぐぐうう」

少女の腹が鳴った。

俺は呪縛じゅばくが解けたように感じた。

そんな自分に呆れるのと、少女の顔が一瞬で朱あかく茹で上がるのを見て、思わず噴出ふきだした。

気が楽になつて

「元気になった証拠だな。俺の名は、シーワールド・レスコス。よ
うこそ、アースリンドへ」

練習していた通りに言つて、握手した。

少女の手は小さくて、細くて、荒れていた。

力を入れると折れてしまいそうで、すぐに手を離れた。

シャツに絡まって床にうずくまってしまった少女を立たせると、
どうやら足が立たないらしい。

あれだけの怪我をおつていたんだ、魔法で治療されたとはいえ、
まだ完治してないんだろう。

椅子まで抱えるようにして連れて行く。

最初も思つたが、すごく軽い。壊れそうだ。

頬が何故か熱くなっている気がして

「少し待っていて。何か持ってこよう」
言い捨てるように、慌てて部屋から出た。

ライアと共に少女に食事を運び、自己紹介とこの世界の話を少しした。

少女は永山ながやま雪羽ゆきはと名乗った。

まだ小さいのに、受け答えはしっかりしていて、言葉少ないながら礼儀正しかった。

そして、物を食べる仕草が、とてつもなく可愛らしい……

ちいさいサ克蘭ボの口に、パクパクと食べ物が消えていくさまは、まるで仔リスのように可愛くて、ずっと眺めていたかった。

話を聞いている時も、時々眉間に皺しわを寄せるのが可愛くて、もつと居たかったのに……

ユキハが疲れたろうからと、ライアに追い出されてしまった。

8話 お引越し 1 side雪羽

あたしがアースリンドに召喚されて3日目。

意識もはつきり戻ったし、体力面ではまだただけど 怪我は治ったようだった。

確かに体に痛むところは無いけれど、ものすごくだるい。

朝ご飯もまだだし、着る服もないので ベッドでゴロゴロしていろと

朝一番から部屋を移された。

前の部屋は病室だったそうで、普通の部屋に引っ越しをするのだそうだ。

別に荷物はないので、自分だけの移動。

昨日は天使服だったけど、やっぱり寝巻きだったみたいで ライアさんは着替えを用意してくれていた。

ピンクとオフホワイトで、スカートの部分がふわっと膨らんでいる（内側に何層もレースみたいなのが付いている）ワンピース。

さらに

せんさい
繊細なレースが

フリフリっと付いていて

とっても

とっても

可愛い、乙女なデザインで……

着る前は、ちょっと嬉しかったりしたんだけど

鏡に映ったのは……

「ホラー……入りましたあ……」

思わず何処かの大衆居酒屋（行った事ないけど）のセリフを真似てしまいたくなる程の　恐ろしい物体で……

一言で言えば

『お嬢様のミイラ』

お父様に愛されすぎたお嬢様が、不慮ふりょの事故で命を落とした後も、娘の死を受け入れられないお父様に毎日世話をやかれ、彼女が生前好きだったドレスを着せ替えられたりしてる……

そんな、イメージ。

我ながら、悲しい。

でも　それくらい、恐怖を感じる程に似合わなかった。

だって……

髪の毛は屋上で切られたままで、不揃ふぞろいかつ歪いびつなショートカットだし、

顔はげっそりしてるし……（こっちの世界に来てさらに頬ほほはこけてしまった）

何より、肌がかさかさで　色が黒いので、乙女なピンクと合わないのだ。

もつと地味なのをライアさんをお願いしたら、ライアさんも似合わないと思ったのか、用意しますと言ってくれた。　取り合えず、新しいのが用意できるまでは、この服で過ごさないといけないんだけど……

（誰にも遭いたくないです。）

あたしが気にしていると、

ライアさんが大判のスクーフみたいな布を

ライアさんが着ているドレスの前に付いてる襞ひだの中から　するりと取り出して、

あたしの頭に被かぶせた。

（どこに隠してたの???）

あたしが、びっくりしていると

「女官の制服には、『隠かくし』があるのですわ。」

とペロっと襞ひだをめくって、見せてくれた。

そこにはポケットが沢山あって、いろんな物が入っていた。

プロの、七つ道具ってやつですか！

女官の服はデザインが決まっていて、見習い以外は　比較的自由に生地が選べるそうです。

役職とかは胸のブローチの花の数で分かるようになっていて　ゼ口から女官長の5つままで……

ライアさんは当然　花5つです。

ライアさんのドレスは臙脂色えんじでしっかりした生地だけど光沢は抑えた感じ。

ライアさんの濃い色の金髪によく似合っています。

ドレスの裾すそが床に付きそうな長さなのに、全然動きに支障がない。

踏んだりしないし、ひっかけたりしない。（単に、着慣れているから？）

『隠し』に道具なんかが いっぱい入ってたのにドレスがふんわりしているだけにしか見えない……

恐るべし、女官服！

あたしが感心していると

「男性には『隠し』のことは秘密ですよ」と口止めされた。

なんでも、

「せっかく澄^すましてても、ドレスの中が道具だらけだと思われるのは、興^きざめだから」 なんだそうだ。

そういうものなんだろうか？

まあ、顔はスカーフで見えないようになったんだから、一安心でしよと、

車椅子に乘せられて部屋を出た。

部屋の外に男の人が2人立っていた。

「移動します。宜しく願います」

ライアさんが2人に頭を下げた。

いかにも、警備員みたいな がっしりとした体型の人たちは、無言で軽く敬礼して

あたしとライアさんの前後に付いた。

ライアさんがあたしに、

「警護^{えいへい}の衛兵ですわ」

と教えてくれた。

薄い布ごしに見える範囲でだけど　なるほど、そんな格好です。
剣？下げてるし、服も軍服っぽい。　甲冑かっちゅうとかは着てないんですね。

（この人たち、ドアの外にずっといたのかな？　SPみたいにな？）

自分はそんなに危険なのだろうか、ちょっとドキドキしながらエレベーターホールみたいな所に押して行かれた。

衛兵さんが壁の操作盤を押すと、床の模様が光って、ヒュッ軽い浮遊感と落下感を感じたら　同じような場所にいた。

車椅子なんて大げさだと思ったけど、乗っておいて良かったかも

……

ちよつとクラつときた。

廊下へ出ると、入った時の廊下とは全く違ってて……

空間移動？したってことかな？

上下移動だけじゃなさそうで

ほら、光の方向とか違う

し。

どこまで移動したんだろ？

これも魔法？？

魔法って便利……！

廊下の中央には青い絨毯が敷かれていて、壁の装飾とかもホテルっぽくなっていた。

壁に絵とか掛けてあるし……

宿泊料高そうなんですけど。

その廊下の一番奥の部屋まで、あたしは連れて行かれた。

9話 お引越し 2 side雪羽

廊下の一番奥の部屋は、広がった。

前の部屋でもあたしには十分広がったんだけど、
この客室ゲストルーム（中クラスだそうです）は すごく豪華だ！

他の国から来た使節や官僚に使う部屋らしい。

部屋は2つあって、手前の部屋が居室で、奥の部屋が寝室になっている。

居室にはミニキッチンも附ついていて、簡単な料理なら出来そうだし、冷蔵庫にたいなのも組み込まれている。

何も音がしないので、これも魔法で冷えてるとか？

部屋には勉強机やダイニング、応接セットもあって、ほんと暮らせるね。

トイレはシンプル。

タイルは地模様があってちょっと高価そうだけど、機能重視で無駄な装飾は無い。

便器は洋式。（和式だったら驚くよね）

使い方も基本的には変わらない。

ウォシュレットの洗浄と乾燥のスゴいやつ。（紙いらない位完璧）
前の部屋は病室だから着いていると思ってたんだけど、標準装備なのか……

お風呂は洋画に出てくる猫足のバスタブだった。

シャワーもある。

このお風呂、使い難にくいんだよね。

使い方分からなくて、初めての時はライアさんが付いてくれたん

だけど

周りに飛び散るし、

お湯がもつたいないし……

その内、慣れるのかな……？

物珍しげに、部屋を覗き廻っていた あたしに

『こくひんクラス本当なら国賓級のお部屋で、おもてなしするべきところを……』
ってライアさんは謝ってくれてたけど、
そんな居心地の悪そうな部屋は、やです。

朝食が済んだ後 ライアさんが小箱と
新しい服を持って部屋に来た。

「ユキハ様、今日は傷跡を取らせて頂こうと思うのですが、よろしいですか？」

ライアさんが遠慮がちに聞いた。

「え？ あ……私の傷跡……」

あたしは言葉を失う。

（見られてたっ！）

恥ずかしさで頬が熱くなった。

（着てた服、着替えさせたんなら当然だよねっ！）

（気付いておけよっ！ あたし！）

何も考えずに、ぼおつと気楽に過ごしていた自分に舌打ちしたい

気分だった。

体に付けられた沢山の傷は、
自分が母親から愛されなかった証だと思っている。

その傷を見られたことは、
自分が愛される価値の無い人間だと知られてしまったようで、心が重くなってしまう。

「怪我の治療の際、やむを得ず見てしまいました。申し訳ございません」

ライアさんが深く頭を下げた。

女官長という、たぶん重要な職に着いている人の真摯な態度に、
拗^すねてる訳にもいなくなってる

「あ…… いえ…… こちらこそ、傷を治して頂いたのに…… ごめんなさい」

謝ってみた。

複雑な気持ちなんだけど、
それより何より、

さっきライアさんが言ってた事の方が気になる。

「あの…… でも、傷跡なんて取れるんですか？」

（無くせるものなら、無くしてほしいです。）

「ええ。サリエスに治療具を 借りてきたので、簡単に治りますわ」
ライアさんは、そう言って にっこりと微笑んだ。

驚いた。

（そんな事が出来るのっ！！ しかも、簡単に？）

「お願いしても、いいですか？」

思わず齧^{かぶ}り付く勢いで、ライアさんを見上げて あたしは言ってしまった。

「もちろんですわ。では、始めましょうか。 服を脱いで、ベッドに横になって下さい」

笑顔でライアさんに言われ、
手伝ってもらってヒラヒラお嬢様服を脱ぎ
下着姿でベッドに上がる。

このベッド、ふかふかで、天蓋^{てんがい}も着いてるお姫様なベッドだ。

仰向けに寝そべった。

ライアさんはお腹の上にバスタオルをかけてくれて

「すこし熱く感じるかも知れません。熱すぎたら言って下さいね」と、やさしく言われて ずっと昔、パーマをあてる母親について行った美容院の会話を思い出した。

（美容師さんみたい……）

少しおかしくなった。

傷跡の治療は、特に熱くも痛くもなかった。

先端がガラスの様な物で光る棒状の治療器具を当てられた部分が、じんわりと暖かく、ちよつと痒^{かゆ}かった。

ライアさんは作業に集中してるみたいだし、邪魔したくないので会話がなくて暇だったけど、

今度の服は地味なのがいいなあとか じつとして考えていたら

いつの間にか あたしは うとうとしていた様だ。

「ユキ八様、今日はこれくらいに致しましょう」

ライアさんの声で目が覚めた。

心持、体がだるい。

うつそりと起き上がろうとすると

「しばらく、このままでお休み下さい。

休むのが一番ですから。

少し落ち着いたら、昼食をお持ちしますね」

と、ライアさんに止められた。

曖昧に返事をして、そのままベッドに寝転がった。

（ヤバイ すごい ダルイ……）

そして 下着姿のまま すぐに、眠ってしまった。

9話 お引越し 2 \ side 雪羽（後書き）

勉強机〃ライティングデスクです。雪羽の中では勉強机でしかないですが……

雪羽、相変わらず眠ってばかりです。

心身が優れない時は、眠るのが一番だと雪羽は考えています。

10話 呼び方 ｝side雪羽(前書き)

甘くなりました。

10話 呼び方 〈side雪羽〉

軽めの昼食を取って お茶を飲んでいると、レスコスさんが来た。昼休みに、顔を見に寄ってくれたらしい。

あのホラーな格好を見られなくて良かった。

今は、青色と白の細かいストライプの生地（うすい水色に見える）の

さっぱりした飾り気のないワンピースを着ている。

これが似合うかどうかは別にして、人に恐怖を与える事は無いだろう。

（ライアさん、ナイスなセレクトです！）

着替えるときに傷跡を見たけど、すごく薄くなっていた！

何回かしないと、本当には消えないそうだけど、これでも十分ましになったよ！

（もお！感謝だよ〜！）

純粹に、嬉しい。

コレに関しては、心底、こっち来て良かったと思える。

「ありがとうございます」ってライアさんに言ったら、

「当然の事ですわ。完全に消えるまででしょうね」と微笑まれた。

（当然なのかあ。あたしにとっては、すごい事なんだけどな）

アースリンドの基準は分からないから、お言葉に甘えさせてもら

います。

部屋に来たレスコスさんは、今日は昨日と違う格好をしていた。フード付きマントは無しで、黒いガクラン？みたいな詰襟っぽいを着ていた。

神父さんの服の方が近いかも・・・

ズボンも黒、黒の皮ブーツを履いてる。聞いてみると、こっちが普通なんだそうだ。

昨日はたまたま仕事の都合で着ていたらしい。

あっちが正装？

こっちはサラリーマンのスーツみたいなもんかなと、勝手に解釈した。

レスコスさんは、お茶を飲みながら この世界の色々なことをあたしに話してくれた。

この世界も1年365日で同じペースで時間が流れているらしいとか

巫女も依巫よりましも、元の世界に還おくり帰せるとか

（浦島太郎には、ならないって訳ね）

（ちゃんと、帰れるんだ・・・）

昔にいった女の人を召喚されて、この国が気に入って この世界で暮らしてたこと。

その子孫しか、この世界にはいない事。

レスコスさんは話してみると、中々気さくで、いい人だった。話し易かったし。

（美形で、性格もいいから モテるだろうな）
などと、なんとなく考えていたら

「堅苦しいから、名前で呼んでくれないか？」
などと難易度の高い事を 言われてしまった……

ファーストネーム呼び捨てはちょっと……
刺激が強すぎます。

（ええっと……なんて名前だっけ？ 記憶力は良い方なんだけども
……長いし覚え難いんだよね）

「シ……シー……ウエルド……さん？」
（長い。舌噛みそう。合ってるのか？）

「シーウエルド」
（合ってたか。）

「じゃ、シードさん」
（ちょっと略してもいい？ でも、年上なのでさん付けをお願いします
ます……）

「え？」

（ちょっと びっくりしてる？ やっぱ、失礼か……）

（そういえば、機関車トースの鉄道会社オーナーもいちいち『ト
ップハム○ット卿』って呼ばれてたな）

（アメリカ人以外は愛称で呼ばないのか？ハリウッド物しか良く知らないから、会ってすぐにも略すと思ってたけど違うのか？）

（英語の教科書では、ジョンとかマイクとかボブとか 短かったよ？）

「長いし、呼びにくいので……」

（言い訳してみた。）

ああ、判った。って顔をする。

（こっちでは やっぱり長いまま呼ぶんですか？）

微妙な間が開いて

レルコスさんが、にっこり笑って

「さんは無しで。シードって呼んで？」

「俺もユキ八って呼んでるから」

（殺人的笑顔を浮かべて言った！ 悩殺されます！ まぶしいデス…… 美形の笑顔は眩しくて耐えられません！）

（うつうつ……ごめんなさい、抵抗なんてできません。 呼びます、呼ばせて頂きます。 目がやられるので、そんな笑顔を向けないで下さい……）

（ええ、そりゃもう、あたしなんて、勿論呼び捨てで結構です。）

「……ハイ。 では……シード……」

「よろしく、ユキハ」

（何の挨拶だよ。コレ……）

そして、シードはご機嫌で帰って行った。意味不明。
あたしは、なんだか疲れて 午後を丸々昼寝に 使ってしまった。

10話 呼び方 〈side雪羽(後書き)〉

前回に引き続き、眠り落ちです。すみません。

雪羽も、他にすることもないですし、今まで好きに眠ってもいい環境に無かったもので『寝たいときに眠る』を ただいま満喫中です。

11話 考えてみれば \ side 雪羽 (前書き)

雪羽の ひつりじつ

11話 考えてみれば side 雪羽

.....ヒマである。

あああああ~~~~ヒマだあ！

未だかつて味わったことのない、この暇さ！

何もすることがない！！！！

午後をほぼ丸々眠ってしまったお陰で
全然。眠くない！！

だるいのも、ずいぶんましになって気にならない。

することが無いって、こんなに苦痛だって事はじめて知りました

.....

テレビもラジオも無いみたいだし！
ゲームなんて勿論ない。

（あたしは、したこと無いけど.....）

娯楽がないよね

あたしが知らないだけだろうけどね.....

窓から外見ても、夜だし真っ暗で何も見えないし。

真夜中に、知らない建物（しかも中世の城っぽい所）をうろつく
度胸はない。

なぜか？

答え、何か出てきそうだから。

（どっちみち部屋の外には、出られないんだけど……）

廊下に衛兵さんが、2人も立ってるんだよね。

護衛ってライアさんは言うけど、見張りにしか見えない。

別の人を召喚するかを検討中で、あたしは身柄拘束されてるみたい。

俗に言う監禁中？

国家機密で極秘人物だそうな。

なもんで、出歩けない。

（あたしなのに……）

しかし、こんな小娘に24時間見張りつけるなんて……

依巫って何者？

何、するんだろ？

そもそも、あたしに出来ることなのか？

精霊とか見えてないし、神様も見えないし、声とかも聞こえないよ？

……静かである。

壁が厚いせいなのか、建物の上層階だから…… 物音がほとんどしない。

やる事が無くて暇で…… ついつい、いろいろな事に思いを馳せてしまう。

今まで生きること**に**必死すぎて、
碌々考えることなんてしてこなかった。

（明日の事より、今日を自分が生き抜くことを第一にしてたもんなあ。）

あたし、

戦争に行かされるのかな？

敵を追い払うって 言ってたな。

いや、無理だから。

出来る気もしない。

人を殺したりするのかな？

やだよ！ 人を殺すなんて怖い。

そもそも、戦争になったら、沢山の人を殺した方がいいなんて変。

いやでも、やらされたりして……

だんだん、不安になってきた。

……帰りたい

元の世界に……帰りたい

じわじわと、その思いが持ち上がってくる。

あの非道い世界に戻りたいなんて、どうかしていると自分でも思うんだけど、

されているのと 自分がするのでは全く違う事だと思う。

今まで自分の意思で人を傷つけたことはない。

自分が気付かない内にしてしまっているかも知れないけど……

それでも、自分から進んで傷つけに行ったことは無い。

それを強要されるかもしれない。

いくら親切にされても、理^{ルル}が分からない世界は、やっぱり居たくない。

どうしたら、いいのかな？

……………。

此処と自分の世界では、時間の流れが同じだと聞いた。

（じゃあ、今日は卒業式だったんだ）

何も無ければ、今頃は卒業式も終わり 明日就職先の寮へ引っ越して、

明後日は初出勤のはずだった。

あの家から出られて、新しい世界で頑張ろうとしていたのに……

（まあ、此処も新しい世界には違いないけど……ね）

自分はとことん運に見放されているのだろうか？

いやいや、違う違う。

自分は校舎から落ちたのだった。

大怪我も負っていた。

あのままだったら救急車で運ばれても、危なかったかもしれないし、助かっても病院のベッドの上だ。

（むしろラッキーだったのかも？）

明日帰れたら、まだ間に合う。

最悪、明後日までに帰れたら……言い訳とか大変だろうけどなんとかなるんじゃないかな？

やつと見つけた、寮のある就職先なのだ。簡単に諦められない。この職場を逃したら、中卒で雇ってくれる所なんて無い。

（しかも、この容姿だし……）

そう、自分で言うのも落ち込むんだけど、とても中3には見えない。

小学4・5年生といったところにしか見えないのだ。

まず背が低い。 140cmしかないのだ。

そして体重も…… 25kg。

小学生並に小さくて、鶏ガラの様な酷い体。

（よく生きてこられたよね。 中学校で給食なかったら餓死してたかも。）

なんせ家で、あたしの食事は無い。

新聞配達とかちょっとしたアルバイトが あたしの生活費だった。

なるべく家に居ないようにして、寝るときは物入れの中だった。

父親によく似た あたしの顔を見るのもウザらしい。

そんな母親あのおひとから逃げ出せるチャンスだったのに。

給料は少ないけど、寮があつて食事もついてて、自分の金が貰えて……

服買つたり、お菓子も買えるって 夢見てたのに……

(……なんだ？ あたし帰らなきゃマズイじゃん！)

急に、焦ってきたよ？

のんびりしてる場合じゃないよね。

よし。

シードに言おう。

元の世界に帰してって。

ちゃんと説明して。

自分の事だから……

いい人かもしれないけど、協力できませんって はっきり言おう。

でないと、取り返しがつかなくなるから。

11話 考えてみれば ｾｻｲｾ 雪羽(後書き)

巫女が出てこなくて すみません。

ええーっと

まだまだ出てきません。

誤字、脱字、ご指摘頂けたらありがたいです。

ご感想なども頂けると励みになります。

12話 呼び方 〈side シード〉(前書き)

話が前に進まないのは解っているんです！
でも、どうしても書きたかったんです。

12話 呼び方
く side シード

真夜中、ユキハを警護する衛兵からの使いに起こされた。ユキハが俺に話があるらしい。

（一体、何だろう？ 余程 重要な事なのか？）

ユキハが俺の名前を覚えてくれたのが、嬉しかった。

「……シー……ウェルド……さん？」

ユキハが、とまどいながら俺の名前を呼んだ時は、他の者に呼ばれるのとは 違う感じがして……胸が熱くなった気がした。

（この感じは何だろう？ もっと、ちゃんと呼んで欲しい。）

「シーウェルド」

（ユキハ、呼んでみて？）

「じゃ、シードさん」

ユキハから思わぬ言葉を聞いて

「え？」

つい、出てしまった。

「長いし、呼びにくいので」
ユキハが、ダメかな？って顔をしている。

シーウエルド……長いかな？
略称で呼びたいってこと？

俺は他人に略称で呼ばれるのは好きでない。
むしろ、馴れ馴れしい感じがして、イヤだ。

家族は、俺をウィルと呼ぶが、それは親父が息子たち全員に
『シー』と、名づけたからだ。
単純に ややこしいから。
仕方なく、我慢している。

ユキハにもウィルって呼ばそうか？

(……………)

いや。

シードがいい。

これは、名前を略したんじゃない、
ユキハが俺に付けてくれた名前。
愛称だ。

妙に くすぐったくて、嬉しい。
ユキハだけが呼んでいい、特別な俺の名前にしよう。

でも『さん』は余計だな。

「さんは無しで。 シードって呼んで？ 俺もユキハって呼んでるから」

俺の顔が、つい自然と笑顔になる。

シード……いいんじゃないか？ うん。

さあ、ユキハ。

呼んで。

ユキハは赤くなって、モジモジしながら

「……ハイ。では……シード……」

と言つて、さらに耳まで真っ赤になった。

(かわいい……)

「よろしく、ユキハ」

俺は、満足だった。

呼び方一つで、こんなに心が浮き立つなんて。

「こんな子供に愛称よばれて喜ぶなんて、俺は変態か？」と、
思わないでもなかったが、

嬉しいものはうれしいし、可愛いものはかわいいのだ！

そう開き直つて、部屋を後にした。

午後の仕事は、はかどりそうだ。

部屋に着くとライアも来たところの様だ。

ユキハの部屋で動きがあったのを、敏感に察したらしい。

「こんな遅い時間に 急に来てもらって……ごめんなさい」

ユキハが青ざめた顔で、頭を深く下げる。
ただ 只ならぬ様子……何があった？

「いいえ、いいんですよユキハ様。どうなさいました？」

ライアがユキハを安心させるように、やさしく言い椅子に座らせた。

「すいません。レスコスさんにお問い合わせがあつて……」

その……急ぐので、早い方がいいかなと思って……非常識な時間だと分かつてるんですが……

……どうしても聞いて欲しくて……」

消え入りそうに、でも必死で何かを伝えようとしている。

（『レスコスさん』に戻ってる。シードって呼ぶって決めたろ？）
と、まず言いたくなつたが ぐっと飲み込んで

「どんな事でも 気にせず言つて。ちゃんと聞くから」
俺は、ユキハを励ますように言った。

13話 焦り side シード

「怪我、治してもらって ありがとうございます。
とても感謝しています。」

自分の世界だったら、こんなに早く治りませんでした。死んでいたかも知れません。

でも、私、自分の世界に帰りたいんです。 帰らなきゃいけないんです。

明日、遅くても明後日には、帰りたいんです。 お願いします。
早く、早く私を元の世界に帰して下さい」

目に涙をいっぱい溜めて、ユキハが一息に言った。

（やっぱり……元の世界が恋しいんだ。）

当たり前の事を言われて、びっくりしている自分に驚いた。
年端もいかない子どもなのだ。両親を恋しがらない訳が無い。
いまさらながら、小さい子を泣かせている、自分に腹が立つ。

（シードとか愛称で呼ばれて、浮かれている場合ではなかった！）

ユキハは目覚めてから、特に泣く事も無く
どちらかというと淡々と今の状況を受け入れている気がしていた。
体の傷跡から鑑みて ^{かんが} きつと酷い環境に置かれていた子だと考えていた。

だから、ユキハは元の世界に帰ろうとは思わないだろうと高を括 ^{たか} つていたのだ。

しかし、

なぜ明日か明後日なんだ？

なぜ、そんなに急ぐ？

理由がありそうだ。

どう聞こうかと迷っていると

「ひょっとして、帰ることできないんですか？ 帰れるんですよ
？」

と、聞くのが怖いように ユキハは恐る恐る尋ねてきた。

「帰れます！ 帰れますわっ！ ユキハ様！ ね。シーウエルドっ」
ライアが慌てて言い、『帰れると言え！』とばかりに俺を睨み付
けている。

「帰れるのは帰れるんだけど……ごめん。
明日や明後日には無理かも知れない」

俺は、正直に言った。

評議会の決定がまだ出ていない。

「何か、早く帰らないといけない 理由があるの？」

ユキハが抱えているものを、知りたかった。

「…………… 無理なんですかつ？！」

先の言葉にシヨックを受けたようで、ユキハの大きな目がさら
に大きく見開かれた。

「あたし、明日には引越するはずなんです。
就職が決まって、その会社の寮に入るんです。

明後日から仕事をするんです。

やっと家から出て、一人で生きれるんです！

明後日に間に合わなかったら何処にもいく所がなくなるんです。
もう家には帰りたくないんです！

それに、依巫^{よりまし}なんて出来ません。

戦争なんて怖いし、敵を追い払うなんて出来ません。
人を殺したくありません。殺せません！！！」

最後の方は搾り出すように、ユキハが叫んだ。
握り締めた拳^{こぶし}が白くなっていた。

ユキハの切羽詰った様子に、俺は咄嗟^{とっさ}に返答できなかった。

「依巫殿の答えは 私の方からさせて貰うよ」
突然ドアが開き、ラズモント執務長官が入ってきた。
驚く間もなく、長官が続けた。

「悪いが話は聞かせて貰ったよ。
依巫殿には、大変な時期に喚んでしまったようで申し訳ない」
魔道師の黒いローブを纏^{まと}い、無表情の長官は、威圧的で
謝罪も儀礼的なものに感じられてしまう。

長官は間を置かず

「しかし、我々も国民の命が掛かっていて、どうしても召喚しなければならなかったのだよ。

戦争が起これば、敵味方含めて多くの命が失われる。

それを回避する為の、召喚だったんだ。

いかな列強も『神の声を聞く巫女』と『神の器となる依巫』の居る国に、おいそれと手は出せない。

君たちの存在が、戦争の抑止力になるのだ。

君が多く命を救うのだよ」

ラズモント執務長官の、よど澱みの無い弁舌が冷たい水のように俺達を凍らせる。

凍った空気の中、ユキハがきじょう気丈に切り出す。

「私は、依巫として使えないのでしょうか？ だったら、今すぐ、帰して欲しいんです」

「検討中でまだ決定してない事だよ。

しかし、もう1度、依巫を召喚することになってね。

それが25日後だ。その召喚で大人が来れば、子供の君は帰してあげれると思う。

それまで、我慢して貰いたい。 以上だ」

先ほどと比べて、少し和らいだ。しかし有無を言わさぬ口調と、高圧的な長官の態度に、

ユキハの目から涙がこぼ零れ落ちた。

長身でがっちりした体格で、強面の長官に、ユキハが例え口でも敵かなうはうがない。

声も立てずに涙を流すユキハにライアが寄り添い、そっと抱きしめた。

「では、失礼させて貰うよ」

長官は自分の用は済んだと、鷹揚^{おつよう}に出て行った。
俺は堪^{たま}らず長官を追った。

「……長官！　今の言い方は、あんまりではありませんか？！」

「レスコス君。　あんまりとは、どういうことかね？」

私は簡潔に事実を告げたまでの事。　なにも、いじわるを言った訳じゃない」

振り向いた長官が、冷ややかに答えた。

「しかしっ！　子供にあんな言い方ないでしょう！？」

もう少し配慮があっても……「その『配慮』をするのは君の仕事だろう？　レスコス君」

俺の言葉を遮って、長官が不機嫌に声を荒げる。

「そもそも、君がちゃんとした説明をしていれば、私が出向くこともなく静かに事が進んだはずだが？」

私とて、子供の依巫が召喚されてしまうという、やっかいな事に苦慮してるんだ。

今回の様に、騒がしくするようなことは極力避けて欲しいんだよ。

「

長官は軽く溜息をついて、中指で眼鏡のフレームを軽く押し上げ、そのまま暗いグレーの前髪を撫で上げた。

「とにかく、次の依巫が来るまで彼女には居てもらおう。これは評議会
の決定だ。」

きつぱりと言い放たれた。

「！！！！」

「判ったな？」

「……………はい」

念を押されて、苦々しく了承する。

この人が、こんな態度の時は 何を言っても覆くつがえらない。
長官の下に就いて 何度も経験してきた事だ。

返事を聞いた長官は、もう振り返らずに術場エレベーターに消えた。

俺は溜息をつく、ユキハの部屋に取って返した。

ユキハはライアによって、ベッドに寝かされて枕に顔を押し付けて泣いていた。

声を立てない泣き方は、見ているこっちの胸が締め付けられるようだ。

ライアはやさしく頭を撫でて「大丈夫」と繰り返している。

何か声を掛けたかったが、何も言葉を思いつかず立ち尽くす俺に、
ライアは「あっち行って」と手を振った。

何も出来ない自分に、居いた堪たまれなくなつて、部屋を出た。

その日の昼、ユキハに会いに行ったがライアに会わして貰えなかった。

まだ泣いているそうだ。

次の日は熱が出ていると言われた……

大丈夫だろうか？

俺は大変な事をしてしまったのだろうか？

俺は、どうしたらいい？

答えが見つからない。

それに、俺のこの気持ちはなんだろう？

ユキハの涙を見てから、おかしい。

心がザワザワして。落ち着かない……

考えがまとまらない。

こんなのは、知らない。

この初めて抱く感情と、出せない答えへの助言を求め、「甘えて
いる」と自嘲しつつ

俺は師の元を訪ねた。

14話 老師（前書き）

シードの師匠登場です。

14話 老師

「お師様、起きておられますか？」

誰かが、遠慮がちに部屋のノッカーを打つ。

「シーウェルドか。珍しい」

部屋の主であるザンバルデアは、小声で呟いた。

「起きておる。入りなさい」

今度はシーウェルドに聞こえる声を出し、指先を軽く動かした。
遠隔魔法で扉の鍵を開錠したのだ。

シーウェルドは自分の師匠であり、王立魔道府の最古参である上級魔道師ザンバルデアの研究室兼居室のドアを開けた。

ザンバルデアの部屋は古い本が所狭しと積まれていて、入ってすぐの魔方陣用のスペースを除いては本に侵食されている感じた。

こんなに本があるのに、ザンバルデアはどこに何があるかを完璧に把握している。

部屋は一見雑然としているが、本人だけに解る一定の法則があるらしい。

ザンバルデアは 左奥の中二階の巨大な机で書き物をしている手を止めた。

「こんな遅くに……申し訳ありません」

シーウェルドが頭を下げる。

「よいよい。今、茶にしようと思っと思ったんじゃ」
ザンバルデアは、そう言って書き物を軽く片付けると、席を立った。

シーウェルドに 掛けるよう椅子を指差し、ザンバルデアは自ら茶の用意をして

大き目のカップに注ぎ、彼に差し出した。

そして自分は、愛用のカップにソーサー、砂糖漬けのジャスミンを添えて

机に戻ると、長年使い込んでザンバルデアの体に馴染んだ これまた大きな椅子に、どっかりと座った。

ジャスミンをカップに入れてかき混ぜながら

「召喚のことはサリエスから聞いておる。お前にとっては不本意な結果だったじやろう」

いたわるような言葉に、ザンバルデアのやさしさが見える。

「いえ。それより、お師様、私はこれからどうしたらいいのですよう……」

「何をじゃ？」

「よりまし依巫の事です。」

「今、泣かせてしまいました。」

ゲストルーム
客室は長官に張られているんでしたね。彼女との話は筒抜けでした。

長官の言葉に、俺は反論も何も出来なかった……

情けないです。

はあ……

俺は、依巫よりましを召喚すること理解したつもりで 全然わかってなかったようです。

術式の事ばかり考えていて……後の事とか、ましてや依巫よりましの気持ちなんて考えてなかった。

召喚の儀の前、お師様はこれから先の俺の人生を依巫に捧げる覚悟はあるかと尋ねられました。

召喚の魔方陣を使うことは、その身に呪いを受けるに等しいことだ、今までの自分ではいられぬとも。そして、己の気持ちと、国家の命令とに心引き裂かれるかもと言われました。

その本当の意味が少し解ったような気がします」

シーワールドは湯気の上がる飴色の茶を見つめながら言った。

ザンバルデアは 冬の海のような暗く淀んだ色の蒼い瞳に、ちらりと好奇心の光を横切らせて口を開いた。

「依巫に逢あって、己の心境に 変化でもあったかの？」

「はい。とても。

なぜ、自分中にこのような感情が湧くのか理解できませんが……出逢って数日の、しかも年端もいかぬ少女にです。

依巫の何かがそうさせているのでしょうか？」

「説明は以前にしたはずじゃが？」

神話・魔方陣・詠唱する呪文、全ての意味を理解するようにも。たとえ出世の欲に目が眩んでおったとしても、もうちょっと理解と覚悟を決めておるかと思つとつたが……

やはり、心の部分は理解出来ておらんかったか……

当たり前かもしれないがの。

恋もしたことのない者に、恋に墜ち、心を奪われる感覚を説明したところで理解などできんもんじゃ」

（もうちょっと自分の頭でどうにかすると思つとつたが、早々に音を上げおつて）

ザンバルデアは軽く溜息をつく、ジャスミンの香りのする茶を一口飲んで、フツと口元をゆるめた。

「じゃが、儂は嬉しくもある。

やつとお前の運命の相手に会えたことと、その女にちゃんと惚れる心を持つておつたことにな」

と言い、微笑んだ。

やはり弟子はかわいいのだ。

シーウェルドは上級魔道師になるために、日々勉強と訓練を重ね、またなつてからも、術の研鑽に血の滲むような努力を重ねていた。

大多数には天才だと誤解されているが、実は努力の人だった。

まあ、シーワールド本人が、あえて誤解を解く風でもなかったの
で、それを知るのは、ごく僅かな人間だけなのだが……

年頃の魔道師達が恋愛に花を咲かせていても、26になるこの年
まで恋愛に興味を示さず、ひたすら己の為、貧しい実家を養うため
に出世を目指す。

（聞くところによると、修羅場もあつた様だが、本人は我関せずで
何時も通り過ごしていた）

ザンバルデアは、そんなシーワールドに、もっと人生を楽しんで
欲しかった。

愛し愛される喜びを味わって欲しかった。
たとえ大きな戦禍の影がアースリンドを覆っても……いや、そんな時代だからこそか。

しかし、依巫召喚の話が持ち上がり、召喚する魔道師候補筆頭に
シーワールドの名が挙がったときには反対した。

その愛は過酷過ぎると……

しかし、出世を望むシーワールドに押し切られる形で決定してしま
った。

その結果、思わぬ事態になったのだが、シーワールドにとっては
喜ぶべきことだと、サンバルデアは思う。

シーワールドの出世は遠のくが、愛するものが出来れば、それは
シーワールドの人生にとって大きな恵みをもたらすだろう。

新たな依巫と召喚者の問題は別にして、だが。

ザンバルデアはもう一口、茶で口を潤すと

「では、不肖の弟子にもう一度、最初からとっくりと説明してやる
う」

と、長い説明を始めた。

14話 老師（後書き）

シード君、いろんな人に溜息つかれていますね・・・

15話 神話（前書き）

世界の設定の話です。
退屈かもしれませんが。
飛ばしてもらっても、さして支障はないかと思います。

15話 神話

「まず神話からじゃ。」

大昔、女だけが掛かる熱病が流行り、大陸全土でたくさんの女たちが死んだ。

特に子供は罹りやすく女児はほとんど育たなかった。女は数を減らし、当然男共は女を巡って争うようになった。

事態は悪化の一途をたどり、戦争が起き、国土は荒れた。そして、女はすべて死んでしまった。

女がいなければ、子は生まれず男は死を待つだけになった。

男たちは神に祈り、この世界の創造の神は願いを聞き入れた。

他の世界から女を召喚出来るよう、魔方阵を授けたのじゃ。

創造の神と他の世界の神との約束で、召喚できるのは魔道師1人につき、女1人だけ。

そして魔道師は召喚した女性を命果てるまで大切にし、慈しみ、愛し続けること。

また、召喚される女の方も魔道師とは惹かれあう運命にあるらしい。運命のの相手同士が呼ばれるのじゃ。

魔道師の数だけ召喚が行われ、運命の相手とすでに死別したと思われる者以外、女は召喚され、大多数の魔道師は伴侶を得ることができた。

そして、異世界の女は熱病に罹らず、その子供たちも健康に成人

した。こうして、女の数はいくつかに増えていき、召喚無しで暮らせるようになった。

創造の神は力を使い果たし、5柱の神に世界を託し眠りについた」

「次は、巫女と依巫を召喚する魔方陣について。
シーワールド、召喚の2大系統はなんじゃ？」

「えっ？ ああ、戦争時に敵陣に魔獣などを送り込むための『災厄の召喚』と、創造の神から授かった『福音の召喚』です」

「そうじゃ。そして、巫女と依巫の召喚魔方陣は当然『福音の召喚』がベースになっておる。

『災厄の召喚』じゃと害なす者が召喚されるからの。

しかし、当時天才と呼ばれ数多くの魔法書や魔方陣の傑作を残した大魔道師ゲルガーダの考えは、召喚した巫女達の力で戦況を優勢に覆そうとする王とは違った。

彼は 戦に女性を使うことにも、ましてや他の世界から無理やり連れて来て、否応無しに巻き込むことなど許されない事だという考えだった。

相当抵抗したらしいが王の命令には逆らえず、ついには魔方陣を組みざるをえなくなった。

そこで大魔道師ゲルガーダは、魔方陣に仕掛けをした。

『福音の召喚』を丸々、一見しては判らないように組み込んだのだ。

ゲルガーダの日記によると（死後に発見された）彼の技量なら、

条件に適した者を、神との約束の部分抜きで召喚できる陣を組めらしい。

しかし彼は、国が召喚することを止められないのならば、せめて召喚した魔道師本人は相手に対して、真摯に誠実に真実の愛情を持つて接するべきだと、

喚よばれる人間に条件をつけて組んだ。

『巫女か依巫である』かつ『召喚する魔道師の運命の女である』

アースリンドに数多くいる魔道師の中でも、この条件をクリアできる者は少ない。

運よく喚び出せた魔道師も

自分の愛する者を贄に捧げて平静でいられる男など、今までおらんかった。

王は戦神の器として依巫を使う。

当然、戦況如何で、依巫の身体は酷い状態になってしまう。それを解つていても差し出さなければならぬのが召喚者じゃ。

また、訳あって依巫を元の世界に送り返した者も、喪失感を一生拭ぬぐい去ることは出来なかったと伝わるとる。

そこまで魂ごと深く繋がった女しか喚び出されない。

まさに、身勝手な男なんぞ呪のろわれろという、大魔道師ゲルガーダの呪詛のろじゃな」

「送り返された女性がいたことは知っています。どんな事情があつ

たかは、資料に書いてなかったので、知りませんが……

その女性も召喚者と別れて、心は傷ついたのでしょうか？自分の世界に戻ったら忘れてしまえるのでしょうか？」

「さあな。

しかし、喚ばれた女は、喚ばれた時点で呪われ、傷ついておる。

お前も、もう分かるじやろう？

ある日突然、理由も解らずに無理やり連れて来られ、見ず知らずの者たちの為に戦に駆り出され命を落とすものも多く、心身を壊す者はさらに多い。

人生を奪われとる。

いくら元の世界に送り返されようが 戦争に巻き込まれれば、傷つかぬはずはない」

どこか遠くを見つめて、ザンバルデアは最後の方はつぶやくように言った。

「自分か呼び出した少女を、送り返すつもりか？」

ザンバルデアは、静かに問いかける。

沈黙が降りる。

シーウェルドは、一口も飲まれないまま冷めてしまったカップを両手で包むように持ち、

濃い琥珀色の茶に視線を落として、ぽつり、ぽつり、ザンバルデアに話し始めた。

「理解しているつもりでした」

ザンバルデアの問いには答えずに、シーウェルドが続ける

「少なくとも、頭では……」

「でも、心は全く理解出来てなかったようです。お師様は、あんなに反対なさってたのに……」

「愚かな自分に腹が立ちます。国や自分たちの勝手で彼女達の人生を壊すなんて……どうかして

すぐに送り返したいのに……次の召喚の日が決まったそうです。それまではユキハを帰せないと、長官に言われました。

その日の内にユキハを送り還せれば、あの子は元の生活に戻れたかもしれません。

でも、もう遅いそうです。

送り還しても、元の世界の彼女の居場所は無くなったらしいです。でも、此処に居たら戦争に巻き込まれます。

まだ子供なのに……

なのに……

それなのに、俺はユキ八を帰したくないと思ってしまっんです。

……………俺は一体どうすればいいんですか？」

（おいおいおいおい。初めての気持ちに混乱おって！まあ、初心^{うぶ}と
いうか、なんというか……）

「ひとつ言っておくと、依巫に使われぬのなら『福音の召喚』で喚
ばれてた神話の女達と同じじゃからな。ユキ八はこっちの世界で生
きる方が幸せと異界の神が認めた、お前の伴侶じゃ。」

「なつつつ／＼／＼／＼！ 伴侶って！ まだ、子供なんですよ？
！」

「子供はな、育つんじゃ。儂^{わし}にとっては、お前も十分ガキじゃわい。
まあ、戻る場所がないと言っのなら、お前の元がその娘の居る場
所になればいい。」

戻る気も失せるほど、幸せにしてやれば問題無かるう？

神話に出てくる魔道師達は、それはそれは努力したそうじゃから
な！ お前も頑張れ！

大戦については、長官^{ラスモント}の言うように、抑止力として効果はあるじ
やろう。

今すぐに開戦する事は、まず無いと見ておる。

儂^{わし}をはじめ、情勢を見ている上の者は 開戦せぬよう動いておる
しの」

ザンバルデアは机の上にある、封蝋で刻を押された数通の密書を見せながら、茶目つ気たつぷりにウィンクしてみせた。

「じゃからして、お前も現を抜かしておらんと戦を避ける手立ての手伝いをせねばならん。ユキハや、次に召喚される依巫「いまね」の娘の幸せを望むのなら、ぼくつと手を拱「こまね」いておれんぞ。

時代が変わってきておるのじゃ。

魔法の世は過ぎ、剣の時代になろうとしておる。

『神のお膝元』だの『魔道の殿堂』だのの権威など齒牙にもかけない奴ら来る。

魔法だの神頼みだのに胡坐あぐらをかいておるジジイ共に任せておって
は あつという間に 我が国は取り込まれるぞ」

「は、はいつつ！お師様つつ！」

大戦を回避する・・・途方も無い話である。

しかし、それが成されなければ巫女や依巫が巻き込まれるのは必至なのである。

シーワールドにとっては非常に個人的な理由だったが、火種を消しに奔走ほんそうする日々が始まった。

16話 遠い日の記憶 〈side 雪羽〉(前書き)

記憶の中のお兄ちゃんは、いつもやさしくて……

16話 遠い日の記憶 〈side 雪羽〉

あたしは泣きながら昔のことを思い出していた。

ずっと昔。

まだ、父さんが家にいた頃。

あの頃、よく泣いてた。

学校で同じクラスの男子に

「でっかい目。気持ち悪い。ギョロ目って言おうぜ。」って変なあだ名を付けられて……

みんな面白がって、はやし立てられて……

学校の帰り道、神社の境内にあるブランコで泣いてたっけ。
裏手に隠すように木に吊られていて、
誰から見られないから、そこで泣くようにしていた。

あのとき、慰めてくれたお兄ちゃん……

名前なんだったっけ？

思い出せないなあ……

あたしのこと『ゆき』って呼んだ。

「ゆきは強い子だから、大丈夫。辛い目にあうほど、ゆきはもっと強くなれるんだよ。」

変な慰め方…… その時もそう思ったけど、下手な同情より、本当の様な気がしてた。

顔、よく思い出せない。

いつも夕方で暗かったし、ブランコで背中を押しててくれてたから、顔はあまり見なかったかなあ。

会えば分かるんだろうか……？

覚えているのは、声。

お兄ちゃんの声。

安心するの。

大丈夫って言われると、本当に大丈夫になるの。

何度も慰めて貰ったけど、

ある日から、お兄ちゃんは来なくなつて、

何年也会つてない。

お兄ちゃん もう忘れちゃったかな？

あたしなんかと居ても、楽しくなかったんだろうね。

お兄ちゃんが来なくなつて、あたしも神社へ行くことを止めた。
お父さんが出て行って、泣いている暇もない位、追い詰められたから。

なんで、今 思い出したんだろう？

ああ、泣いてるからだった……

大丈夫って聞きたかったからかな？

ああ……もうそろそろ、泣き止まないと。

でも、もうちょっとだけ泣きたい。

今まで、なんとかやってきたんだけど、少し疲れちゃった。

大丈夫、泣き止んだら 元の雪羽に戻る。
そして あたしは強くなる。

だから、もう少しだけ……

16話 遠い日の記憶 〈side雪羽〉(後書き)

やっと、新しい登場人物が？

17話 依巫の資質（前書き）

やっと、らしい話が出てきました。

17話 依巫の資質

昼、シーワールドがユキハに、会いに来た。

ライアがユキハにその旨を伝えると

「ごめんなさい。もう少し 一人で考えたい」と細い声で答えがあった。

彼は何か言いたそうだったが、口を真一文字に引き締めると
「ユキハのこと、宜しく願います」と頭を下げて帰って行った。
おそらく、どうしても気になって 昼休みに様子を見に来たんだ
ろう……

ライアは、彼が身内以外で こんな風に感情を表に出すのを初めて見た。

（やはり、召喚した者としての責任かしら？）
（それとも、やっぱりユキハ様は彼にとっての、特別な人なのかしら？）

そんな事を考えながら、ライアは部屋にユキハの昼食を運び入れた。

昼遅く。

昼食の食器を下げに部屋に入ると、テーブルには空になった食器

が置かれていた。

（よかった。 食べれたのね。 食事が取れたら、一安心だわ）

ベッドのユキ八様を覗くと、よく眠っているようだった。
その痛々しくも、安らかな寝顔に ライアは微笑みかけて
食器を下げようと、背を向けた瞬間……

ゾクリ

背中に悪寒が走り、全身に鳥肌が立っていく。
息が白くなるほど、気温が下がる。

感じるのは禍々しいほどの靈気。
いや、この神々しさは神気と言った方が的確だろうか……

（何？コレ……）

（畏ろしくて振り返れない！）

しかし、その神気の出所は唯一つなのである。
目を逸らしていても埒があかない。

ライアは 意を決して振り返る。

ベッドに横たわるユキハの目が、ゆっくり開いた。

(!! 金色の瞳!!)

薄暗い室内でも、ユキハの瞳の色の变化は明確に見て取れた。金色というだけでなく、ほの灰かに輝きを放っているようだった。

その美しくも畏ろおそしい目が、つと ライアを見つめた。

目が合った瞬間、

ライアは全身をピンで留められた標本の蝶のようにピクリとも動けなくなった。

無理に動けば、引き裂かれるような……

そんなピリピリと張り詰めた緊張の中

ユキハの姿を借りた『何か』が、声を発した。

『戦神の本柱を、いくさがみほんばしら呼び出してはならない。』

一言だった。

ユキハの口から少年の様な声が発せられ、ユキハの目が閉じられると、ライアの金縛りは解け、空気も元に戻った。

ライアはその場に崩れ落ち、しばらく呆然としていたが、はつと気が付きユキハの様子を確かめた。

その目は閉じられ、ユキハは何事も無かったように、寝息を立てている。

ライアは無言で部屋のドアを開け、外で警備をしている衛兵に尋ねた。

「何か、変わったことを感じませんでしたか？」

衛兵の答えは、「普段通りで何も無い」ということで。逆に不審がられた。

（一体、どういう事かしら？）

ライアにも図りかねる問題である。
どうしたものかと思案していると

「……………んん。」

ユキハの声がかすかにした。

ベッドに駆け寄ると、様子がおかしい。
額に手を当てると、焼けるように熱い。

（神気に当てられたんだわ！）

次元の違う存在を、身体の中に入れたのだ。
しかも、かなり高位の神のようだった。

ライアの見たところ、ユキハの魂はなかなか清らかだと感じていたが、精進潔斎しょうじんけっさいもせずいきなり降りるのは、身体に負担が掛かる。魂と体は繋がっているからだ。

150年前でも、依巫よりましは7日〜3日の精進潔斎しょうじんけっさいを行い、その後、神を降ろしたとされる。

神の降臨は、簡単に行うべきものではないのだ。

たとえ一時でも中身が神になれば、体の穢れけがは体内に留まれずに顕在化けんざいかする。

人としては問題の無い日々のささいな穢れけがも、神には許されないものだからだ。

その穢れけがが熱となって現れたのだとライアは思った。
さすがに専門外なので、急ぎサリエスを呼びに行かせ、取りあえずは 部屋に備え付けの冷蔵庫の氷で体を冷やす。

（こんな形で依巫であることが証明されるなんて……）

この事が評議会の耳に入れば、新たな召喚は中止されるかもしれない。
体力の無いユキハに戦神いくさがみを降ろすなど……体が耐もたない。

王は、依巫よりましの体の事など意に介さない。

国益の前では異世界人の一人や二人壊れようと些細な事柄である。
150年前も、現在も。

巧妙に隠蔽されているが150年前の大戦では依巫が多数使われた。

ライアの夫が歴史の研究者で、大戦の記録をまとめようとしていたため、偶然にも彼女の知るところとなったのだが……

その夫　ギルバートも事故で亡くなった。

それが果たして事故だったのか、そうでないのかを知る手立てを彼女は持たない。

ただ、ギルバートはずっと

「召喚した女性を戦争の道具にしてはいけない。この世界は、いつか痛いしつぺ返しに遭うことになる。事実を隠さず後世に伝えなくては……」とライアに言っていた。

ライアは、夫の遺志を継ぎたいと思った。

自分なりの方法ではあるが……

それに、歴史や難しい事は解らなくても

（異世界の人間だからといって……　女を何だと思っているの?!）

（男の道具じゃないのよ?）

と、ライアは純粹に思う。

この思いがあったから、女官長という立場であるにも関わらず、ユキハの世話係に半ば強引になったのだが……

（よくよく考えて動かなければ……）

ライアは、いつになく慎重に行動しようと心に決めた。

18話 決心 ｝side雪羽（前書き）

雪羽の気持ち。

18話 決心 ｝side 雪羽

人前で、

泣いてしまった。

ものすごく、久しぶりに……

はずかしい。

その上、熱まで出してしまったようです。

普段考えない頭を使った所^{せい}為？

（知恵熱ってやつかな……）

ホント、恥ずかしい。

あの時、

偉そうな男の人に、希望をバツサリ切り捨てられて、つい取り乱してしまいました……

シードとライアさんが、あんまり優しいから お願いしたら帰れるかな？なんて事を考えてた あたしが甘かったんです。

自分の立場を、今更ながら認識させられました。

あたしには、決定権も自由もないってこと。

この国の人にとって、あたしは道具でしかなく、役に立つか立たないかだけ。

そうだね、そういえば最初に聞いたね。器だって。

中身は関係ないんだよね。

泣いてる間、ずっとライアさんが頭を撫でていてくれて……
すごく慰められた。

熱でうなされてる時は（あんまり覚えてないんだけど）おでこを
タオルで冷やしてくれてた。

アレって、ホント気持ちいいね！

普通お母さんって、きつとこんな感じなんだろうな……って、う
っとりしちゃったよ。

ライアさん、きつと家では 優しいお母さんなんだろうな……
愛情をたっぷり注いで子育てしてそう。

あたしに付きつきりは困っただろうか？

ライアさんの顔を そうつと見てみる。

初めて見るライアさんの深刻な顔……

目の下にクマまであるよ……

ひよつとして、寝てない？

世話係って言ってたし、あたしが泣いたり、熱出したりしたらず
っと付いておかないといけない規則とか？

それで、帰れてない？

あたしって、こんないい人に酷いことしちゃってる？

お仕事の規則とかでも、あたしの為に ごめんなさい。 申し訳
ないです……

あたしが、マイナスオーラ全開で、どう声を掛けようかと迷って
様子を伺^{うかが}っていると、考え込んでたライアさんが、フツと視線を下
ろしたので、目が合ってしまった。

咄嗟^{とつさ}に

「ライアさん……ごめん……なさい……それ……と……ありが
……と……う。」

熱で喉^かが哽^かれてしまって、無様な声しか出なかった。

慌てて上半身を起こすと

ムギユ~~~~~

ふくよかなライアさんの胸に 思い切り抱き埋められた。

「ごめんなさい。 ごめんなさい……私^{わたくし}達は間違っています。
何も知らない貴方を、私達の国の都合で有無を言わさず連れ出し
て、用が済むまで帰さないなんて……勝手過ぎますわ……」

ライアさんが泣いている。

会って間なしで、しかも他人の あたしに同情して泣くなんて……
なんて優しい人なんだろう……

あたしの召喚も、別にライアさんが決めた事でもないだろうに……

（ありがとう。 ライアさん。）

いっぱい泣いたら、すっきりしたし、もう泣かない。

もう、心配しないで、ライアさん。

あたしは強い。

泣いたから、もっと強くなったはず！

泣いてても、誰かが助けてくれる訳でもないし。

これからの身の振りを考えたよ。

あたしは、ここで暮らす。

まだ、あたしを抱きしめて謝っているライアさんの腕から逃げ出して、真っ赤意に充血している　ライアさんの目を見て、今度はしっかりした声で言った。

「ライアさん、ご迷惑かけました。　ありがとうございます。

泣いてすっきりしました。

今から元の世界に帰っても、あたしの居場所は無いので、此処に置いて下さい。

あたし、ここで暮らします。」

18話 決心 ｾｻｲｾ 雪羽(後書き)

アクセス・お気に入り登録ありがとうございます。
今回は、雪羽の気持ちを書きました。
次回からは、シード側で進みます。

19話 慣れない事をすると 1 \ side シード (前書き)

シーワールドの過去

19話 慣れない事をすると 1 side シード

終業時間の少し前、

ライアからユキハの熱が下がったと連絡を受けた。

（遠方に出向いている時でなくて よかった）

すぐにでも遭いに行きたかったが、別れた時の泣き顔が目には焼きついて離れない。

何か、ユキハが笑顔になる事をしたかった。

女の子が喜ぶ事なんて、今までは考えたこと無かったんだが……兄弟は多いが男ばかりで、参考にならない。

一番身近な女の子といえは従妹いとこのフロリアになるだろうか……しかし

（あいつは、何をやっても喜ぶからな。やはり、参考にならん。）

なにせ、ろくろく話してない、しかも異世界の女の子供が 好むものなど想像出来ない。

（そうだな、まだ子供だから菓子くらい食べるだろう。）

庁舎の売店で菓子を買って持って行くことにした。

シーウェルドは子供の頃からよくモテた。

アースリンドの美的基準からいっても かなり美形の部類に入る顔と、魔術の才能に加え勉強も出来たせいだ。

（魔術と勉強に関しては、本人の努力に寄るところが大きいということとは、恋する乙女の眼には映らないらしい）

この年になるまで、自分から言い寄ったりする必要も無く、相手から告白されて なんとなく付き合うパターンを繰り返していた。

しかしそれも「私の事が好きなら○○してくれても いいじゃない！」とか

「私と勉強、どっちが大事なの？！」だとか

「私の体が目的だったのね？ 非道い男！」などひとひとと女の方で

どんどん話が展開されていていつて、いつの間にもやら、冷たい人の烙印を押されて別れるのが、常となってしまった。

健康な男子だから所謂大人な雰囲気になると反応するし、行為そのものはむしろ好きなので、彼女からの誘いは拒んでいなかった。

だからだろうか？

シーウェルドにしてみれば、無理やりなんてことはしなかったし、合意の上でのコトならば何の問題もないと考えたのだが……イヤだったのか？と悩むところである。

王立魔道師養錬所アカデミーでは魔術の勉強や、技の習得に時間を掛けたかったので、デートといわれる外出も、頻繁にはしなかった。

シーウェルドは冷たい男などと元彼女達もとかのが吼ほえたために、一旦はモテなくなったものの、
「クールでそっけない所も素敵！きつと、私だけには優しくしてくれるはず！」

などと妄想を抱く一部、いや 割と多数の者に却かえって人気が出てしまった。

しかしその当人としては そのそも、恋愛に執着や興味など 大して無かった。

というか、何故自分勝手な理論を振りかざして 盛り上げられるのか、理解できなかった。

シーウェルドが魔道府の登用試験に合格出来てからは、執務室の激務のお陰で、くだらない事に付き合わされて時間を無駄にするのが すっかり嫌になり、割り切った大人の遊びができる女ひととの関係だけに留めていた。

その付けが回ってきたというべきか、シーウェルドは女の子を振り向かせるテクニクなど持ち合わせていない。

試験をすれば、さしずめ 筆記も実技も落第というところだろうか。

ユキハを見舞う為に、いったん執務室に戻って机を軽く片付けていると

突然、何者かに後ろから羽交い絞めにされた。

「ウィールちゃん……こんなに早く帰り支度なんて、どうしたの？」

好奇心とひやかに満ち溢れたこの声の主に

「ロニー。耳に息を吹きかけるのは、やめてくれ。」

俺は冷たく言い放った。

ロニーことロナルド・ベックフォードは執務室の同僚であり、王立魔道師養錬所からの友人である。

茶色のくせ毛を短く刈り込んでいるが、最近は散髪する暇がなくて伸び気味だ。

背はシーウエルドと殆ど変わらない位なので、羽交い絞めにする
と自然と口が耳の位置にきてしまうのだが、ふざけるのが大好きな
ロニーは、毎回俺の耳元で囁く事になっているらしい。

「えーダメえ？ だって面白いんだもん。それより、ねえねえ、あの娘んトコ行くの？」

熱下がったんだってねえ。よかったねー ウイル！

俺が何度注意しても、ロニーの甘ったるいしゃべりかたは直らず、
ウイルと呼ぶなどいくら言っても聞いたためしがない。

はちみつ色の目を楽しそうに細めて、無邪気な笑顔を見せられる
と、しかめっ面の自分がバカバカしくなって、結局いつも流してしま
うのだ……

執務室に在籍する時点で、無邪気であるはずもないのに。

「情報、早いな。」

「情報は命。常識でしょ。しかも、話題の依巫様の情報は網張あみつて当然でしょ？」

ああ、僕も顔見たいな。いつ会わせてくれるの？」

「熱、下がったばかりなんだよ。怪我けがしてたし。お前みたいに騒がしいの、連れて行けるか。」

「ええ、騒がしくないよう。でも、まあ熱々なところをお邪魔してもいけないし、また今度にしてやるよ！」

ロニーはそう言うと、ニヤニヤ笑いながら さつさと自分の机に向かおうとしたので 俺は慌あわてて

「ちょっと待て、ロニー。あの子は まだ子供だぞ！ 俺を変態みたいに言っな！」

俺が喚よんだ以上責任があると思うから、気にしているだけだ。今日も、ちょっと見舞いに菓子を持って行くだけだし！」

誤解は解いておかなければ！ とばかりに訂正を入れる。

ロニーは首だけ振り向いて

「あゝはいはい。お見舞いに行くだけねえ」
人の悪い笑みを浮かべている。

「君は、その子供相手に右往左往してるんだけどねえ」
完璧に面白がっている風だ。

「で、お菓子、何処^{どこ}のにした？」
当然のこと様に ロニーに聞かれた。

「ん？ 何処^{どこ}つて、1階の売店 「！！ はない？！ おい！ あ
りえないし！」

ロニーに叫^{さけ}ばれた。
執務室に残っている全員の視線が俺たちに集まる。

「ロニー！ 声^{こゑ}つ 大きい！」
ロニーの口を塞^{ふさ}いだ。

それなのに

「ウイル。 それはないよ。 可哀想だよ。

好きな女の子の見舞いの品が売店の菓子^{かし}つて！ ありえないし！
小腹が空いて、自分で買うのとは違うんだよ！ も少しマシな店
で買わないと！」

ロニーはすごい勢いで まくし立てた。

好きな女の子^{おんなこ}つてなんだ。

売店は、ちゃんとした店だぞ、割と。

と、俺が反論する前に

「はいはいはい。 どうせ、店知らないでしょ？

コレは今、女の子^{おんなこ}たちで流行^{はや}ってる店だからね！

何買^{なに}つていいか、判^はんなかったら 店員^{てんいん}におすめのを聞くんだ
よ！」

そう畳^{たた}み掛けて、ロニーはメモにいくつかの店の名前と、地図を
サラサラっと書いて、俺に手渡した。

（子供じゃないんだから、菓子ぐらい自分で選べるさ）
と思ったが、口に出さず

「詳しいな。よく行くのか？」
とだけ言った。

「ウィルと違って、僕はモテないから努力しないとね。」

口を尖^{とが}らせてそう言うが、ロニーもなかなか整った顔をしている
と思う。

ぱっちりとした目と大きめの口が印象的で、笑うときに出来る笑^え
窪^{くぼ}が可愛いと 以前付き合ってた女が褒^ほめていた。

「はい。はい。早く行った行った！ 人気だからね。遅くなる
と、売り切れちゃうよ！」

言い返せないまま ロニーに執務室から追い出された。
しかし、ユキハの喜ぶ顔が見たいわけだし、折角教えてもらった
菓子が売り切れるのも困るので、俺はメモの店に急いだ。

19話 慣れない事をする 1 side シード (後書き)

基本的にシーウェルドは 他人の気持ちに無頓着ですね。

20話 慣れない事をする 2 side シード

俺は、女子を甘く見ていたのかも知れない……

ロニーに教えてもらった店は、ことごとく 仕事帰りの女子で溢あふれ返っていた。

しかも

（選べない……）

色とりどりの菓子は、どれも綺麗なのだが、普段から甘いものをあまり食べない俺には 見た目からの味の予想は、全く不可能だった。

しかも、残り少ない菓子に対する彼女達の情熱は凄まじく、俺は店員に選んでもらって ようやく1箱手に入れることが出来た。

美しい包装紙で包まれたソレは（菓子の名前など忘れてしまった）

ピンクで光沢のあるリボンが掛けられ、ご丁寧に小さな造花まで添えられている。

よくもまあ、食べる前に捨ててしまうような物に凝るものだ、とあきれる反面、

こんな綺麗でおいしそうな物を渡されれば、女の子が つい嬉しくなる気持ちも解る気がした。

（ユキハも喜んでくれるかな？ とりあえずはロニーに感謝だな。）

喜んでくれるといい。

前回泣かせたつきり4日会っていない。

ユキハは俺が知っている女達とは、まるでタイプが違うので
ういう態度で接すればいいのか、いまひとつ自信が持てない。

ユキハの泣き顔は、なぜか俺に痛烈な打撃を残していた。

今日もまた、泣かれたら……

（いやいや。泣くような材料はないぞ。）

4日経てば、気持ちも落ち着いてて いい頃だろうし……

（今日は、大事な話もしないといけないし！）

気を取り直す。

店を梯子^{はし}して、すっかり時間を食^くってしまった。

俺はあまり遅くなる前に、ユキハの元へ着こうと道を急いだ。

その時。

「ウィル？ ウィルじゃない？」

呼ばれた方を 振り向くと
声をかけてきたのは、従妹いとこのフロリアだった。
四つ角の中央にある噴水のそばで、数人の女友達と一緒にようだ。

「……ああ、フロリア。 久しぶりだね。」

急いでいたが、無視もできず挨拶あいさつを交かわす。

「ええ。こんなに会わないのって、初めてじゃないかしら？ もう
3ヶ月よ！」

フロリアは両手に花束を抱えて、満面の笑みを浮かべた。
まるで花がほころぶ様だ。

美人で華やかな雰囲気きふくのフロリアに、自然と周囲の男達おとこの目が集
まる。

「フロリア、すごい花束だね。」

何かあるのだろうか？ すごく機嫌きげんがいい。
俺も彼女の笑顔に釣つられて 少し笑顔になる。

「そうでしょう？ ねえ。ウィル……おば様から何も聞いてない？」

フロリアが上目遣うめづきいに、チロリと俺を見上げる。
ピンクの可愛いドレスの胸元が少し広くて、目の遣やり場に困る。

（何だろう？ 何かあったかな？……記憶にない）

俺が何も言えないまま 突っ立っていると

「わたし、魔道府の研修生に選ばれたの！　すごいでしょ？」

“えっへん”と聞こえてきそうな得意げな顔で　誇らしげにフロリアが言い、形のいい胸を張る。

（ああ。そんな事、母さんが言ってた気がするなあ。）

召喚者に決定してから、いろいろ忙しくて家族の事なんて　気にする暇がなかった。

花束はお祝いで貰ったのか？

頭の中で、完全にスルーしてた……悪い事をしたな。

「おめでとう！　すごいな！　フロリアがんばったんだね。」

お祝いを贈れなかった俺は、言葉だけでもと、心から祝福した。

魔道府の研修生は狭き門だ。

フロリアが研修生に選ばれる程、優秀だとは知らなかった。

あの小さかったフロリアは、王立魔道師養錬所^{アカデミー}で、よほど頑張ったんだろう。

「ありがとう、ウィル。　ウィルにそう言って貰うのが、一番嬉しい！！」

フロリアが、頬を紅潮^{じかほ}させて叫ぶ

「執務室に配属されたらいいのになあ。　そうしたら、一緒に仕事

できるのに……」

うつとり、夢見るように言うので

「ははは、執務室は忙しいよ？」

現実も見るように言っておく。

実際、過酷と言ってしまったても いいだろう。

だから、今 若い女は執務室にはいない。

「ごめん……フロリア、そろそろ……」

フロリアの友人が申し訳なさそうに声をかける。

「あつ！ もう時間？ ウイルごめんなさい、わたし行かなきゃ。
教授が祝賀会をしてくださるの！」

「こっちこそ、悪かったね。 もう俺も行くよ。」

（俺も、ユキハの元へ急いでいるんだ。）

そう言って、俺は なにげなく手に持った菓子箱を振ってしまった。

フロリアの視線が箱に集中する。

「ウイルス！ ひよっとして、それっ！」

（しまった！）

獲物を見つけたフロリアは、まるで女豹だ。

しなやかに、確実に獲物えものを狙うねら……

俺を含め、俺の兄弟達は『小さくて可愛い従妹』という この女豹に連戦連敗し続けている。

俺は嫌な流れに つい言葉がにぐる。

「ああ、そう、これは……（ユキハに持って行くお菓子なんだ）」

大事な祝い事を忘れていた罪悪感もあって、ズバツと本当の事が
言えない……

フロリアのエメラルド色をした綺麗な目に、ブワッと急に 涙が
浮かぶ。

（何？ どうした？）

「ウィル、ありがとう！ とっても嬉しい！ わたしがそこのお店
のお菓子が好きって知ってたんだ……」

「え？」

（何？ この展開……っ！ フロリア、ちょっと待ってくれっ！）

気が付けば、ユキハの菓子はフロリアの手にあって……

フロリアの、感激でうるうるした瞳を見てしまったのは、違うとは
言えず……

結局、俺の手の中は空で

フロリアは自慢の金髪巻き毛を優雅に揺らして、
俺に「またね！」と満足げな笑顔で手を振ると、友達と会場へ行
ってしまった。

一体、何が起こったのだろう……

呆然とする俺に、夜を告げる神殿の鐘の音が虚しく響いた。

21話 慣れない事をすると 3 side シード

通行人にぶつかられて、俺は正気に戻った。

（俺は、何をしてるんだろう？）

あんなに苦勞して手に入れた菓子なのに……

ユキハの事は、部外秘だからフロリアに話すわけにはいかない
だけど

どうにか言つて……

……………。

でもまあ、

フロリアのおねだりに逆らえた事など、一度もなかったんだから

……………

いつも、あの潤^{うる}んだエメラルドの瞳で訴^{うった}えられると、それが我俣^{わがまま}
であつても ついつい きいてしまうのだ。

自分にとって、フロリアは我俣^{わがまま}で可愛^{いもうと}い従妹なのだから。

本格的に夜の帳^{じやう}が降りてきて、俺は急いで庁舎1階の売店へ向か
つた。

ロニーが教えてくれた店は、とっくに品切れしているだろうし、

知らない店に入って悩むより　いつも利用する売店の方が　手っ取り早い。

（まあ、最初は売店で買う予定だったし……元に戻っただけだ）

とにかく、ユキハの顔を見に行くのが第一目的だから、と自分に言い訳をした。

胸がチリツと痛んだが、気のせいだと自分を誤魔化し、売店で菓子を適当に選び　ユキハの部屋に急いだ。

ユキハの部屋にはライアも居て、丁度ユキハの早い夕食が終わったところだった。

皿が空になっている所を見れば、食欲もありそうだ。

泣いてすつきりしたのだろうか？

元気そうなユキハを見て、俺は少し心が軽くなった。

「シードさん。ご心配かけました。なんか　熱まで出しちゃって……すみませんでした。」

ユキハがペコリと頭を下げる。

「ああああ。もう大丈夫なのか？」

頭を下げた仕草が、小鳥に似ていて　思わず見とれてた……

「はい。ライアさんが　ずっと看病してくれたので　すっかり良くなりました。」

「そうか、それは良かった。」

「これ、大した物じゃないけど食べて。」

俺はユキハにさっき売店で買った菓子の紙袋を渡した。

「私にですか？　ありがとうございます……　開けてみても？」

俺がうなずくと、ユキハは　がさこそ音をたてて袋を開けた。

「わあ！　お菓子ですか？　こんなに沢山貰っていいの？　ああ……いろいろある！」

ユキハが目を輝かせて菓子を並べる。

「シードさん！　ありがとうございます！　すごくうれしいです！　おいしそう！」

ユキハは、菓子を机の上に　全部きれいに並べて眺^{なが}めている。
にこにこして、包み紙の絵を見て、ちょっとニオイを嗅^かいだりして嬉しそうだ。

小さな花が揺れているみたいだと思った。

ユキハのはしゃぐ姿を見るのは、ものすごく楽しいことだと、俺は知った。

ニコニコしている俺と

お菓子にはしゃぐユキハを見ていたライアが

渋い顔で言ってきた。

「シーウェルド。　これ……　ユキハ様へのお見舞い？」
言外に

『お見舞いに売店の菓子なんて！　沢山あればいいってもんでもないでしょー！』

と言っている……気がする……

「……いや、まあ……食べるかな？と思って……」

ロニーに菓子店を聞くまでなら、堂々と見舞いと言えただろう。

（俺は、ちゃんと買ったんだよ。持ってこられなかったただけなんだ）
と言ってしまいたい。

「ありがとうございます。ますます元気になりました！ 全部食べます！ 楽しみです！」

ユキハが笑顔で言ってくれる。

（ああ、ユキハはいい子だな。次は絶対、ちゃんとしたお菓子にするからな！）

と、俺は心に誓った。

ライアは、ユキハの喜ぶ姿に苦笑しながら

「ユキハ様、もう夜ですからね、一つだけにしましょうね。後で、歯を磨きましょうね。」

そう言っつて、菓子の中から一つを選んでユキハに手渡した。

まるで母親のようだ。

すまないね。虫歯になりそうな物で。

「ライアさん。これ何ですか？ 豆の絵が描いてあるけど……」
手渡された袋を見て、ユキハが無邪気に尋ねる。

ユキハは、こっちの字が読めない。

チヨコの外装には確かに茶色い豆の絵が描かれている。

「ユキハ様。これは『豆チヨコ』です。

豆のサヤがチヨコで、中に豆の形のクッキーが入っています。

豆、ユキハ様の世界にもあります？

極まれにクッキーの代わりに飴が入っている『当たり』があります。

それに当たったら、その日1日幸せに過ごると

子供達に人気の菓子ですよ。」

ライアがにつこり説明する。

「俺は当たったことないけど。」

子供の頃、兄弟には当たるのに、俺には当たらなかった。

ユキハは面白そうに「へ〜〜」と言いながら、豆チヨコを食べ始めた。

「チヨコって、名前もだけど味も、あたしの世界とっしょだ〜。

不思議〜。おいしー！」

などに関心している。

昔に召喚された女達は、故郷の味を懐かしんで、色々なお菓子や料理を再現したそうだ。

子供は母親の味を受け継ぐ。

母親の影響は大きい。

だから、この世界は食生活のみならず、全ての事に於いてユキハ

の世界と似て当然なのだ。

豆チヨコを喜んで食べるユキハに、ライアはあたた温めたミルクを出し
自分と俺には、コーヒーを入れた。

和やかな時間が流れる。

これからの事を、ちゃんとユキハに言わないといけない。

手土産の菓子に時間を取られたが、俺は本来の目的である
今後のユキハの身の振りを伝えようと

「ユキハ。」

と声を掛けた。

21話 慣れない事をすると 3 \ side シード (後書き)

お気に入り登録 ありがとうございます！
テンション上がります。

22話 これからのこと ～sideシード

ユキハは、ひとしきり豆チョコを堪能^{たんのう}していた手を止め、不意に居住^{いす}まいを正して、俺の方を見た。

「シードさん。長官さんの話を聞いて、いろいろ考えました。」

ユキハの方が、先に話し出してしまった。

「あたしは、1ヶ月後に元の世界に帰っても、居場所がありません。だから、私がもう少し大人になるまで、ここに置いてもらえませんか？」

もちろん、こんな豪華な部屋じゃなくて

もっともっと小さくて、ボロい部屋でいいですし、

できる仕事を見つけて働いて、自分で食べていきますので……

それとも、こっちの世界では私みたいなのは、働き口ありませんか？」

そこまで一気に言って、真剣な顔でユキハが口を噤^{つぶ}む。

俺は、彼女の勢いに押され気味に

「働くって……ユキハはまだ子供だろ？ 子供はまだ働かなくていいんだよ。」
と答える。

あれから副長官と相談して話を詰めたが、結局、新しい依巫よりましの召喚が済んでから

俺の実家で引き取るという事になった。

両親にだけは話をして、了解も得てある。

（大喜びの、大はしゃぎ、熱烈歓迎だった……なぜだか）

「ユキ八位の年なら、アースリンドでは

アカデミー

魔法の才能のある子は王立魔道師養錬所に入学するし、

ギルト

それ以外は各職業組合で修行や教育を受けている。

よっぽどの事情がないと、子供は働かせないんだ。

だから……」

「あの……あたし、いくつくらいに見えます？」

「？ 10歳くらいかな？ それより下なのか？」

「……すみません。あたし、背が低い上に痩やせているので幼く見えますが、15歳です。」

「「……えええええっ！！」」

ライアと同時に叫んでしまった！

見えない。

全く15歳には見えない。

せいぜい8歳か、いって12歳。

どこをどう見ても15歳は無理。

「あの……ユキ八様の国では、皆様15歳でそのようなお姿なので
すか？」

ライアがどう質問したらいいのか苦慮くじょしながら、でも好奇心には
勝てず、ユキ八に尋ねた。

「いいえ。私が特別小さいんです。

栄養不足ですかね？ 私の国でも10歳位にしか見てもらえませ
んでしたよ。」

悲しそうに笑う。

「だから、働き口を見つけるのは大変でした。

見つからなくて、

最後には校長先生の知り合いの会社が雇ってくれて……

それなのに、多分、あたしが逃げたって事になってるんでしょう
ね。

突然、居なくなっただんですから……」

豆チヨコの袋のシワを伸ばしながら、肩を落とす。

小さいユキ八が、さらに小さく頼りなく見える……

だから、あんなに あの日に帰ることにこだわってたのか。

後で帰ったところで、居場所がないと泣いたのは、

そういう事情があったからなんだな。

家にも居れない理由があるんだろう。

胸が締め付けられるように、痛んだ。

どんな理由あるんだろう？

ユキハの事は、何でも知りたい。

出来ることなら、慰^{なぐさ}めて……

でも、俺の方から、特に今すぐ 聞きだす様なことは したくない。

ユキハが、自然に自分から 話してくれるのを待つつもりだ。

彼女の目につつすらと涙が浮かんでいる。

声もかすかに震えているようだ。

不安なんだろうな……

思っていたより年が大きかったとはいえ、まだ15歳だ。

思わず抱きしめてしまいたくなる衝動にかられたが、

グツと堪^{こら}え、俺はユキハを安心させるように、

できるだけ優しい声で語りかける

「ユキハ。

ユキハが居たいだけ、

俺はユキハに、この国に居てほしいと思ってるよ。」

ユキハの顔がパッと明るくなる。

ユキハの小さい手に、俺の手を添^そえる。
少し冷たい……
暖めるように、両手で包み込む。

（言うぞ。本題。）

「ユキハが良ければ、俺の両親の家で、暮らさないか？」

（言つた！）

「え？」

ユキハが驚いた顔をする。

（そんなに驚かないで欲しいんだけど……予想は していたけど）

「ユキハには、俺の両親の家で、暮らして欲しいと思っているんだ。
本当は、喚^よんだ俺の所へ来るのがいいんだろうけど
仕事で家には、殆^{ほとん}ど帰らないから……
家って言っても、居住棟の一室なんだしね。

何かあっても、常には居てあげられないし

実家なら、両親や弟の誰かがいるし、一人きりになる心配も無い。
それに、いろいろ教わる事も出来ると思う。

俺も兄貴も出てしまってるから、部屋も空いてるんだ。だから…

…」

「……………」
黙っていたユキハの口が開く。

「でも……シードさんのお世話になる理由が、わかりません。
一緒に住むなんて……そんな……召喚者？の義務とかですか？
義務にしても、お世話になった分を あたし、何も返せません。
どこか、働き口を紹介してもらえれば 嬉しいんですけど……
3年。 できたら、18歳になるまで 帰りたくないんです。
そんなに長い間、シードさんにも、シードさんのご両親にも お
世話になんて なれません。」
以外にも、きっぱりとユキハが言い切る。

ああ……ユキハ、遠慮しすぎだ。

ユキハは、俺に無理やり呼び出されたんじゃないか。
もっと、いい待遇を求めてもいいはずなのに……

遠慮するユキハに、なんとか実家に住むことを承知してもらおう
と……

こんなこと言うのは自分でも、ちょっと姑息かと思ったんだけど

「ユキハ、15歳はアースリンドでも まだ子供になるんだ。
みんな、どこかの組合ギルドか王立養錬所アカデミーで勉強している。

ただ、ユキハは、たとえ依巫から外れたとしても、依巫の素質が
ある事には 変わり無いから
普通の子供と同じように組合ギルドに入れるというのは 魔道府として
は、ちよつと無理で……

街で何かの職に就くのは、難しいと思うんだ。
……だから、遠慮しないで……」

「……すみません。 シードさんに迷惑かけてますよね。 ごめんなさい。」

「すぐく、中途半端な存在で扱いに困りますよね……あたし。」

そう言っで、しゅんとなつてしまつたユキハに

俺の心は、強烈な罪悪感に襲われた。

俺は、ユキハをどうしたいんだ？

落ち込ませて、どうするんだよ！自分！

（えええつと！！！！）

思わず、ユキハの手を握る両手に力が入る。

「ユキハ様。」

ユキハ様がそんな風に気に病む必要は、爪の先ほどもございませ
ん。」

じつと、俺とユキハの話を聞いていたライアが、口を開いた。

「ユキハ様。 シーワールドは、ユキハ様を独り占めしたいのですわ。」

ユキハ様を組合ギルドに預けてしまつたら、
忙しいシ・ワールドは滅多にユキハ様に会えなくなつてしまいま
すもの。

その点、自分の実家ならいつでも好きな時に帰ってきて、ユキハ様の顔が見れます。

それこそ時間を気にせず、存分に。遅くなれば自分も泊まればいいんですもの。朝まで一つ屋根の下で一緒に居れるのですわ。」

「なつつ／＼／＼／ライアっ　俺はそんなつもりで言ったんじゃない！」

「あら。　そうかしら？」

「そうだよ！　俺はっ」

「ずっとユキハ様の手を握り締めていて……今更、照れなくても……ねえ。」

クスツと笑う。

バツと二人して手を離してしまった！

「離さないでいいのに。誰も召喚者には、なんにも言わないのにねえ」

ニヤニヤ笑いを止めてくれ。

ユキハは真っ赤になりながらも、何の事か分からない顔をしている。

ライアはユキハに微笑みかけながら

「ユキハ様。シーウエルドの下心は置いておいても、レスコス夫妻は、明るくて親切ないい方々ですわ。子供が大好きで、とても誠実です。

教養も有り、常識人です。だからユキハ様がアースリンドで生き

ていかれる基本を学ぶのには、とても良い環境だと思います。私も、彼らなら安心して任せられますわ。」

親を褒められて、嬉しいけど多少こそばゆく……

しかもユキハは、ライアの言葉で強烈に納得した顔をしている……
つい。つい口が……

「人の親のことを、偉そうに……」

俺の^{ひな}呟きを、ライアは聞き漏らす訳も無く

「シーウェルド。貴方の両親とは、子供の貴方より、私^{わたくし}の方が付き合いが長いんですよ。

それこそ学生の頃からの付き合いですからね。
よくよく解っているんです。

私にはユキハ様のお世話が出来ないんですから、後任の人選は私^{わたくし}の納得のいく者でないと！私の、純粹なる愛情の表れです。ユキハ様の行く末に心を配るのは、当然のことですわ。」

びしゃり、と言われた。

ああ。言い返せない……

「それに、召喚者にとって、喚^よんだ女性は何より大切な存在です。だから世話になってる、なんて決して思わないで下さい。むしろ、来てやったんだから、女神の如く扱^{こと}いなさい！位の気持ちで十分です。シーウェルドは、こう見えても執務室勤務の高給取ですから、思い切り我^{わがまま}俚^{ぜいたく}言^{こと}って贅^{ぜいたく}沢しても罰^{ばち}はあたりませんわ。」

すると、ユキハが

「我^{わがまま}俚^{ぜいたく}も贅^{ぜいたく}沢もしようとは思いませんが……」

ライアの言い様が面白かったのか、笑い声をあげた！

「ライアさんがそうおっしゃるなら、あたしシードさんの実家に行く事にします。」

「シードさん。いいんですか？」

「もちろん！ユキハ！我侫^{わがまま}でも贅沢^{ぜいたく}でも、何でも言^いって？」
他人の我侫^{わがまま}なんて聞きたくもないが、ユキハは別。

何でも、聞きたい。

むしろ、言^いって欲しい。

自然と、頬^ほが緩^{ゆる}む。

一時はどうなるかと思ったけど、なんとか上手^{うまい}くいった。

「シードさん、宜しくお願いします。」

笑顔で、でも深く頭を下げるユキハに

「こちらこそ、よろしく。」

と返しながら、

俺はライアに、感謝した。

そして、この借りはいつか返そうと心に誓った。

ライアは、もう何も言わず、俺達を見守るように、静かに微笑んでいた。

22話 いれからのこと ～sideジード(後書き)

甘々ですね。

23話 やさぐれ 〽sideシード(前書き)

やさぐれる

意味・・・すねること、自暴自棄になること

23話 やさぐれ ｝sideシード

俺は今不貞腐^{ふてくさ}れている。

もう、やさぐれているのである。

この怒りを何処にむけたらいいんだろう？

庁舎最上階西館奥のテラスは、人が滅多に來ない俺の隠れ場所だ。

そこに座り込み足を投げ出して、空にナッツを投げては指先に集めた空気をピンとはじいてナッツを粉碎させている。

おかげで、テラスのあちこちにナッツの破片が飛び散っている。
散らかしたってっ

ど　せ鳥が片付けてくれる……

俺が何をこんなにイラついているかというと

ユキハの実家行きがキャンセルされたのだ。

実家の都合で。

っていうか、あのバカ三男のマシュー^{せい}所為で……！！！！！！

何が

彼女が妊娠したから結婚しまゝす。

住む所がないので、実家に住みまゝす。

兄貴、ごめんね。

先越しちゃった。

だ！

両親も、長官も子供が出来るのだから仕方ないと……

マシユーの相手は17歳で、家事も碌ろくに出来ないらしい。

それを見るにかねて、同居のはこびとなったそうだ。

そりゃあ、さすがにマシユーと彼女、生まれる子供の部屋を取つたら、ユキハの部屋はなくなる。

うちは下級貴族で、家もロニーの家のような大貴族のお城ではないのだから……

それにしても

17歳。

末っ子五男のルイと同年で、ユキハの2歳上……

……………どうなんだろう……？

すごく、いけない事のような気がするのは、俺だけなのか？

17は大人か？

確かに、母さんは兄貴を17歳で産んでるから、抵抗はないんだろっけど……

17が大人なら…… 15は？

……。

ダメに決まってるじゃないか
！ 俺は、変態じゃないぞ……

俺の実家がダメになって、ユキハはザンバルデアの所で、身の回りの世話をしながら この世界の勉強をする事に決まった。

確かに、アースリンドに住むと決めて以来の、ユキハの学習能力の高さは驚くし、勉強したいというユキハの希望で決まったことなのだが……

指輪は新しい依巫に渡さなければいけないし、指輪なしでは会話できないからと、

ユキハはノートに意味を書き、指輪を外してライアに発音させて音を書き取り、

自分で簡単な辞書を作ってしまった。

図書館にあった古い異世界の女性が書いた辞書も持っていたが、あまり参考にはならなかったようだ。

もう日常会話くらいなら、指輪無しでも　なんとか話す事ができるようになった。

文字を書くのがまだ苦手なようだが、ザンバルデアが教えればそれも時を置かず難なく出来るようになるだろう。

ザンバルデアの傍^{そば}はユキハのためには、とても良い居場所だ。
俺の後は、高齡の為と言って弟子は取っていなかったが、弟子になつて学びたいと望むものは、今でも引きも切らない。

俺が言つのもなんだが、最高の師匠だと思う。

思つんだ、けど……

ユキハに会いに行き難^{にく}い。

行けば絶対何か言われるし……

でも、ユキハの顔は見たいし……で

今、俺は　イライラしているのである。

23話 やさぐれ ｝sideシード(後書き)

次回、王子登場です。

24話 王子の溜息 〈sideシード〉(前書き)

23話の続きです。

24話 王子の溜息 ｛side｝

チチ……チ…… 晴れた青空を小鳥が飛ぶ。
庁舎最上階西館奥のテラスは、約1名を除いては、非常に穏やかな午後である。

キィ

テラスの扉が開いた。

うな垂れて、テラスに出てきたのは……

アルフレッド王子。

例の おうじさま だ。

俺に気づかず手すりにもたれて、両手で頭を抱えたかと思うと

「はああああ

」

盛大に溜息をつきながら、背を丸めてズルズルと座り込んだ。
柔らかな金髪を、豪快に掻き回して
うつうつと唸り声が聞こえそうな物騒な顔で、眉間に皺などを
寄せて……

美しの王子様が台無しだな。

しかし……なんだ？
どうしたんだ？

王立魔道師養錬所^{アカデミー}では、ずっと同級生^{クラスメイト}だったけど……
こんな奴、初めて見るぞ。

鬱陶^{うつとう}しい、取り巻き連中も居ないし……

俺は、取り巻きAこと、ロイス・エツカートが大嫌いだ。
あの胸糞^{むなくそ}悪い公爵家ご嫡男^{ちやくなん}様は、公爵家の権力を笠^{かさ}にやりたい放題しやがる。

さらにムカつくのは、雲行き^{あや}が怪しくなると、王子に押し付ける事だ。

結局、王子が揉め事を、荒立てない様に収める^{おさ}はめになるのだ。

第6王子のアルフレッドは位こそ高いが、成人したところで大した権力は持てない。

他国に婿入り^{むい}するか、臣下に下るか……その、どちらかである。
元々小さい国のアースリンドに、王子達全てに与える領地などなく、大抵は中枢^{ちゅうしゅう}を担^{にな}う役職に就いたり騎士団^{きしだん}に入ったりする。

ちなみにアルフレッドは魔道騎士団 第2師団大隊長で階級は少佐^{しょうさ}だ。

所属する大隊は選りすぐりの精鋭^{せいえい}揃いで、就任当初は「王子様に勤まるか！」と反発が大きかったが、有無を言わさぬ実力で、捻じ伏^ふせた……らしい。

まあ、それだけの力量を持っていながら、取り巻き連に強く出ようとしな……

そのアルフレッドの煮え切らなさに、俺は昔から腹が立って仕方ないのだ。

などと思いを巡^{めぐ}らしながら、無遠慮にジロジロ見ていると向こうも俺に気が付いたようだ。
空色の瞳が見開かれる。

「！！！！」

取り合えず、寝転がったままではなんなので起き上がって、『よっ！』とばかり軽く片手を上げてみた。

気まずい。

しかし、沈黙は奴の方が破った。

「うちのお姫様が、お前の依巫殿に会いたいんだって。」

唐突に切り出された話に

「はぁ？　なんでだよ？」

アルフレッド達に対する学生時代の習慣で、つい乱暴な口調で

答えてしまった。

「知り合いらしい。」

「知り合い？ 何処で知り合ったよ。」

「あつちの世界で 学校の同級生だったそうだ。」

「嘘だろ。 同じ学校行ってたって云うのかよ……信じられねえ……」

「全くもって、僕も信じられないけどね。 で、姫は依巫殿カノン よりまじどのが怪我をしていたのを見ていてね、すごく心配して……」

「ふうん。 お姫様の願いを叶えるべく、王子が走り回る訳ですか、まあ、知り合いなんだたら、ユキハユキハは問題ないと思うけど？」

「じゃあ、蒼玉宮せいていぐうまで来てくれないか？ 明日にでも！」

「それはまた急な……
宮殿の北側だったよな……ラズmont長官に一応話しを通しておいてくれないか？ それと、ユキハには俺が付き添う。」

「それでかまわないよ。 ありがとう。 じゃ、そういう事で！」
いやに晴れやかに王子がいうので、ちょっとからかってみたくな
って

「お姫様のお世話は大変だな。 うまくいってないのか？」
と聞いてみた。

「ものすごく、手強いよ。やっぱり異世界の娘だからかな……思い通りには行かないよ。でも、楽しい。いろんな意味であんな娘初めてだよ。　　なんだかゾクゾクするよね。」

（いやいや。俺はゾクゾクはしてないよ？）

そろそろサボってられない時間になって、俺は服の埃なんぞを払いながら立ち上がった。

「それはそうと。お前らは、どこまでも仲良しだよな……」
王子も、立ちながら　少し寂しそうにも見える複雑な表情で。ポツリと言った。

「はん？　誰と誰がだよ？」
思わず、王子の顔をまじまじと見た。

「お前と、ロナルド・ベックフォードだよ。」
俺の不躡な視線など全く気にせず、さらりと答えた。

「???ロニー？　確かに仲はいいけど……?」

「王立魔道師養錬所アカデミーからの同級生で、執務室の同期で、今度は依巫の召喚者同士って……仲良すぎ。」
羨ましいよと言わんばかりの言い様だけど

ちよつと待て。

「召喚者同士って？まさか？」

まさか、まさか……

「あれ？聞いてないのか？依巫の召喚者、ロニーが選ばれたんだ。」

ガタッ

「聞いてない。俺は、聞いてないぞ！」

「ロニー

！」

そう叫びながら、俺はテラスを飛び出して走った。

「聞いてなかったのか……余計な事言っちゃったかな？」

王子の呟きは、俺の耳には届かなかった。

25話 蜂蜜色の夢

魔道府、執務室へ通じる廊下を、彼が猛然と歩いている。

彼はその勢いを落とさぬまま、執務室に踏み込むと、ザッと室内を見回す。

その憤りを隠さない剣呑な顔つきに、執務室の面々は

「やばいよ！きてるよ！」「何かあったのかよ？」「うわ〜コレ？ 聞いてたけどオレ初めて見るよ。シーウェルドの雷帝様？

ははは、中々迫力あるねえ」

などと、目配せしながら 係わり合いたくはないと 笑いを堪えながら顔を伏せる。

目当てが居ないと分かれると、視線は執務室脇の資料室へ流れ、つかつかとドアの前まで進む。

そして観音開きのドアを、勢いよく両手で開け放ち

「ロナルド・ベックフォード！！」

雷鳴^{らいめい}よろしく、彼は叫んだ。

「なんだよ。シーウェルド・レスコス」

名前を呼ばれたロニー^{あさ}こと ロナルド・ベックフォードは、資料を漁^{あさ}る手を止めて 物憂^{ものう}げに返す。

「お前、依巫召喚の候補者リストに名前載せたままにしてたって、どういうことだよ！ その上、召喚者に決まったって、なんだよ！」
烈火のごとき憤りをそのままに、シーウェルドは ロニーのだら

しなく、前を肌蹴はだけている上着をガシツと掴つかみ引き寄せる。

ムカツ腹を立てた時の怒りのぶつけ方が、まさに落雷を容赦なく撒まき散らす雷いかずちの神ようだ　と　王立魔道師養錬所時代アカデミーに誰かが言った事から、シー・ウェルドはこっそり「雷帝」などと呼ばれたりしている。

シーウェルド本人は「お前ら頭腐ってる」とその呼び名をバカにしているが……

最近では滅多な事では見れないソレが、久しぶりに出てきたと、執務室の面々は　遠巻きにしかし　興味深々で資料室を伺うかがっていた。

ところが当のロニーとくれば、シーウェルドの怒りなど全く気にしてない様な　のんびりとした声で

「えゝ。　まんまだけど？」
などと、しれっと返す。

「まんまって！　俺、お前に説明したよな？　お師様から聞いた事とか、自分の思った事とか、全部話したよな？」
そう言いながらシーウェルドは、掴つかんだ上着を揺ゆさぶってロニーの頭ををガクガクに振り回した。

ロニーは大きな目を白黒させていたが、シーウェルドが揺らすのを止めると

「うん。　聞いた」

まっすぐにシーウェルドの目を見て答えた。

「だったら、なんで降りないんだよ！」

鼻息も荒く、シーウェルドが追及する。

すると、ロニーはにっこり甘く微笑んで

「えゝ。だって、ウィル 毎日楽しそうじゃん。
あの ウィルが彼女の為に、時間わざわざ作って会いに行ったり、
プレゼントしたり……
僕は正直感動したなあゝ こんなに変わるって！ 運命の女^{ひと}っ
てスゴイと思うよ」
うっとりとはちみつ色の瞳を細めて、夢見るようにロニーが言った。

眉^{まゆ}をひそめて、シーウエルドは
「そんな事じゃなくて！」
と否定しようとするも

「大切な事だよ。 ウィル」
ロニーが真顔で静かに言う。

さらに、ロニーは続けて
「僕の家的事、知ってると思うけど……」

ロニーは伯爵家の三男だ。
上に優秀な兄が二人いて、ロニーは後が次げるわけでもないので、
執務室に勤めている。
執務室にいる連中は、そういう奴が多い。
もちろん、シーウエルドもその中に含まれている。

「親父が婿入りの話しを進めててさあゝ。その相手が、またやな女
なんだ。」

高飛車で、気が強くて、我俥で……
そいつが何故か僕を気に入っていて…… 僕も、僕の変わりに、
彼女が気に入りそうな奴を探したんだけど、見つからないんだよね
ゝ 丁度いい身代わりが…… 全く」

ロニーは、はあゝと大げさに息をついて

「んで、困ってたところへ、お前の召喚があつて、ユキハちゃんに
夢中のお前を見てさあ。 いいよなあつて 思っちゃった訳。 純
粋な愛つてもものが欲しくなったんだゝ そんな時に、この再召喚の
話だろ。 もう、運命だ！ っと思つたね！」

ニコニコして云う。

「それでもっ！」

困惑しながらも、シ・ウェルドは食い下がる。

ロニーはシーウェルドに反対されることは予想していたので、真
面目に素直に最大の理由を述べた。

「それでも、何でも、僕は好きでもない女と結婚なんて出来ない」

ロニーは、普段滅多に見せない苦い顔にがをして、静かに言った。

「僕の両親を見て、ずっと思ってた。 贅沢ぜいたくな暮らしとか、地位とか、
僕は要らない。

だって、僕の稼ぎでも 贅沢しなければ普通に暮らしていけるじ
ゃん。

僕はただ、好きな人と一緒にいたいだけなんだよ。
でも、残念ながら僕の周りには そこまで僕が思える人はいなか
った」

「それでも、かなり真剣に“好きになれる相手”を探したんだよ？
ウィルと違って。

で、せっかくだから、他の世界にも探索の手を広げることにした
んだ。

こんなチャンス二度とないだろうし。」

最後は、いつものロニーに戻って、舌をぺろっと出しておどけて
見せた。

「チャンスって…… 戦争がからんでるんだぞ。どんだけお気楽で
前向き なんだよ……」

シーウェルドは、ロニーの余りの前向きさに呆れた声を上げた。

「ああ。僕は、いつも気楽で前向きさ！それが取り柄でもあるんじ
やあないか！

戦争は回避するんだろ？ウィル。

じゃあ、大丈夫。問題無いさっ！ウィルも僕も幸せになれるよ！」

そう言っただけで笑ったロニーの笑顔には、何を言っても覆さない強い
決意と、幸せな未来しか信じない熱い情熱みたいなものが存在して
いた。

シーウェルドは、ロニーの熱が伝染して来るように感じた。

そして、自分の心配が杞憂きゆうであればいい。そうなってほしいと望
んだ。

そして、自分たちの身には このまま何事も起こらず、ひよつと
して みんな幸せになれるのかもしれないと、思ってしまった。自
分達も大丈夫だと、思ったかったのかもしれない。

その時の彼等は　これから待っている運命など、
何も、

そう、まだ何も気付いていなかった。

運命は、密かに、ゆっくりと、しかし着実に歩を進めていた。

その波に彼らが呑まれるのは、まだ少し先のことである

26話 巫女 1 召喚 ｝side花音（前書き）

おまたせしました。やっと巫女です。

26話 巫女 1 召喚 ｝side花音

いつもの放課後。

いつもの友達。

それも、もうあと2日で終わってしまう。

卒業。

みんな別々の高校へ進み、別々の毎日が始まる。

寂しさと、期待に胸をざわめかして……

でも、私の心は暗鬱^{あんうつ}だ。

未来に光が見えない。

周りは どんどん華やかに輝かしくなっていくのに、私の立っている場所には深く暗い穴が開いている。

いつか、この闇に自分は飲まれてしまう……

そんな、焦燥^{しょうそう}感と絶望^{ぜつぼう}感に心の底辺^{ていへん}を炙^{あぶ}られながら

私は、未来を生きるのだろうか……

でも、あと2日だけは。

わたしでいられる。

今日はみんなでお別れパーティーをする事にした。

仲のいいグループ同士が集まって、クラスの半分位は来るみたい。

女の子達は学校のトイレで軽くメイクをして盛り上がっている。
私も昨日買ったばかりの、ピンクのグロスをつけた。
うちの中学校は生徒指導がゆるい。

特に放課後は先生の目も行き届かないし、大丈夫。

「花音かのんく男子、もう 外で待ってるって」

「分かったあ。ねえ、キヨンちゃん早く行くよ！」

「待ってえ。花音」

みんなで玄関で靴を履き替えていた

はずだった

え？

一瞬何かが光った気がした。

誰かが写真をとったフラッシュだと思った。

目をあけると……

知らないお爺さんがいつぱいいた。

そして、理解できない言語で話していた。

此れは、一体、どうした事かと

驚いていると、お爺さんの中から1人若い男が近づいてきた。

オ カル！

まさにそんな感じの人！

ああ、塚ファンのオバさん達が此処にいたら、狂喜して、居住まいを正して、記念撮影をお願いするだろうに……

だって

金髪、長髪、巻き毛（後ろで束ねているけど）

真スカイブルーつ青な瞳、涼やかな目元

通った鼻筋、白桃の頬、珊瑚の唇！

長身、逆三、9頭身。

服は白い軍服。赤い飾り＋金モール付き

完璧！

まさに、理想の王子様像。

オ カル様は女だけど……

この綺羅綺羅しい後光は、まさに主役。

その綺羅きらめい綺羅王子が、私わたしの手を取ると

振りほどく暇も与えずに、指輪を嵌はめた。

近くに寄った御尊顔ごそんがんをポカンと見ていた私の顔はさぞかし間抜け
だったろうと

少し赤面してしまう。

でも、指輪を嵌めた瞬間に周りの会話が理解出来、その内容に鳥
肌が立つ。

巫女姫様？

なに、それ？

ひょっとして……これは俗に言う……

異世界召喚？

まさか！

キヨンちゃんの妄想でもあるまいし！

そう易々と、違う世界に行けたりしないでしょ？

ふいに、綺羅綺羅王子が耳元で囁いた

「私の名はアルフレッド。どうかアルと呼んで下さい」
私の目を見つめてにっこりと微笑む。

あゝ。この顔。好きだ。
笑うと、可愛い。

実家の諸事情で、美形慣れ且つ、用心深い私なのに
すっかり魅入りそうになってしまった。

「花音です。 アル」

ああ！

しまった！

ちよっと照れてしまつて……

つい、ぶつきら棒な感じにっ！

常に礼儀正しくは、お嬢様の基本なのに……

なのにアルは

「カノン。素敵なお名前ですね。綺麗な貴方にぴったりです。
神に祝福されし、私の片羽。逢えて幸せです」
と、惚けるような眼差しを向ける。

えええええ？

片羽？

この指輪って？

そっちの意味の指輪なの？？？

「／／／／／／／／／／」

アルの真剣な眼差まなざししが、彼の誠意が本物であると言っているように感じた。

私は過去の失敗で、告白されても信じる事が出来なくなってしまうた。

でも今は、何故か耳が熱い……

絶対、真っ赤になってる……

初対面の人に、齒の浮くセリフ言われたからって、ときめく事無いでしょ。と自分を叱咤してみた。

だけど、不覚にも やっぱりどきどきして、うつむいてしまった私の肩をアルがそっと抱き寄せた。

さつきから、なんだかゴチャゴチャごちゃごちゃ煩いお爺ちゃん達から、私を守ってくれているみたいだ。

……………悪くない。

こんな状況、信じられないけど

アルは嫌いじゃない。

（素直に、そう思える自分にもびっくりだよ……）

アルに促されて床の模様からそつと脇に移動すると隣にも同じような模様が描かれていた。

黒の魔法使いのローブを着た、男の人が呪文を唱え出すと、模様が光り出した。

目が眩むほどの光の後には

模様の上に何かが居た。

アルと同じような、でも少し地味な服をきた人が、それを掴みあげた。

人だった。

しかも・・・すごく傷だらけで血だらけだけど・・・

??

見たことある子かも……

クラスが離れているし、話した事も無いけれどひよっとしたら同じ学年の子かも……

名前は確か…… 永山さん？

「な（がやまさん）」

呼びかけた名前を飲み込んだ。

永山さんを掴んでいた男が、放り投げたからだった。

何？

失敗ですなつて、怪我してる女の子投げたよ、この人！

信じられない！

それを見た瞬間、ゾツとした。

こんな酷いことする人達の中に、自分はいるんだって気付いたから。

恐る恐るアルの顔を見る。

眉間に皺を思い切り寄せて、苦く悲しい顔をしていた。

「（アル）」

声を掛けたかったけど、私もアルもお爺ちゃん達に押されて、部屋から出されてしまった。

目一杯振り向いて、最後に見えたのは

永山さんに駆け寄る、ローブの人の悲壮な顔だった。

27話 巫女 2 饒舌な沈黙 } side 花音(前書き)

花音の頭の中の話です

27話 巫女 2 饒舌な沈黙 ｝side花音

ここは、ヤバイ。

神官を名乗るお爺ちゃん達……

怪我した女の子、無視しやがった。

衣装も豪華で位が高いらしい神官たち……高慢糞坊主どもと命名しよう。

私の事を「巫女様」「姫様」などと、目一杯持ち上げてはいるが、その目が語ってるよ

贅辞と贅沢で溺れさせとけば、下賤の小娘なんぞ容易くあしらえるって。

残念でした。

贅沢にはね、慣れてるんだ

自分の利益の事だけ考えて行動する人達の、邪な眼にもね。

それにしても……問題は、この胡散臭い奴らから、何時逃げ出してどうやって帰るかって事。

帰る方法はあるんだろうか？

知り合いが一緒だなんて、ものすごい偶然で少し心強いけど、永山さんだし……

彼女を当てには出来ないか。

永山さん、怪我してたみたいだし……
今すぐは動けそうにない。

大丈夫かな？

早く合流してしまいたいんだけど…… 一緒に帰れるものなら
そうしたいしね。

私から見た彼女の印象は、とにかく悪目立ちする子だ。

その低い身長と痩せた体型は、見た者を一瞬ギョツとさせる。

黙って廊下の隅に立っていたら、最早もはや学校の怪談並みの不気味さ
がある。

それに加えて、歴代担任達の目の懸かけ様だ。

実際に同じクラスになった事がないから、彼女と同じクラスだっ
た子からの話だけど

親から虐待を受けている！と言えない事情があるらしく、それを
止められない引け目や罪悪感から逃れる為か、とにかく皆、彼女の
事を特別気に懸かけていたそうだ。

新学期のうちはクラスメイトも「自分より酷い環境の子がいるん
だ。自分は恵まれている。彼女に負けないう、頑張ろう。」とい
う空気になるんだけど、

その内、彼らにもそれぞれ悩みなどが出てくる訳で、その悩みを
彼女の置かれている状況と比べた時、鬱屈うつくつした気分になるらしい。

自分にとっては大きな悩みでも、彼女にしたら取るに足らないこ
とだろうと 思ってしまうと、自分の器が小さいと自分で認めるこ
とになる。ささいな事でも、一喜一憂したい年頃である。

自分の周りの全てに感謝して生きるなんて、中学生には無理な話
だ。

むしろ、全てに反発して、不平と文句をタラタラ言って暮らして
いたい。

それが表立って出来なくなるのは、苦痛になる。

そこで、彼女の存在が鬱陶うつとうしくなり、自然発生的にイジメが始ま
るという構図らしい。

私はイジメられる方にも原因があると、思っている。

彼女は、もっとはつきり、自分の気持ちを言っ、態度を明示するべきだと思う。

まあ、関わった事の無い私が言っのも変だけど……

その永山さんが、異世界に飛ばされて、怪我までしてるなんて……
どんだけ不幸体質なの？

と、自分のことはさておき あきれてしまっ。

二人ともが、ちゃんと帰ればいいんだけどな。

私がこんな事を考えている間も、高慢糞坊主どもはこの国の窮状をお涙頂戴に訴えて、私の重要性・必要性等々 延々と、熱弁をふるってらっしやる。

（「わたしでお役に立てるなら、喜んで！頑張ります！」とでも言うと思ってんの？）

誰が言うか、ボケ。

別世界から女の子浚っ暇があるんなら、強力な兵器でも開発しとけ。

それはそうと、さっきから隣に座っているアルから、熱い視線をガンガン感じるんだけど……

アルは、真正正銘の王子様だった。

生まれながらの、セレブってやつか……

あゝ、苦手だな。

巫女と召喚者の関係も聞きました。

運命の人？

そんなの、本気で信じてるの？

そりゃあ、ロマンチックですよ。

でもね。

言い伝えとか、一目惚れとかで、お嫁さん決めちゃうのはどうかと思うよ？

王子さまの定番かもしれないけどもさ。

シンデレラや白雪姫、オーロラ姫もだ おかしいよ？

白雪姫とオーロラ姫に至っては、一言も話していないよ？

顔だけか！

王子は顔しか見てないのかっ！と私はいつも叫びたくなる。

あ…… オーロラ姫は一人娘だから、王に成れるのか……

私もそうなるかな。

三条家の血筋と多国籍企業のグループ創業者の娘。

血統と金 欲する者は多い。

閨閥に組み込んで、資産を潤わせた^{うめお}御方々や、由緒正しき^{おんかたがた}三条家と姻戚関係^{いんせき}を結びたい成り上がり^{ねら}がこぞって、狙^{ねら}ってくる。

執事の黒須^{くろす}が私に就いてからは、対処方法もずいぶん身に付いたけど、一度痛い目には遭^あっている。

だから、初対面の人を信用する事は出来そうにない。

というわけで、ごめんね。アル。

一目見た時から、2人は惹かれあつてその夜の内にベッドインなんて、ありえないから。

そんなにフェロモン垂れ流して熱心に見つめられても

無理。

きつと勝手な妄想を膨らましているんだろうな……

見た目と違い、無垢でも初心でも可憐でもないんです、残念ながら。

だから、お願いです。

そんなに、ウツトリした顔で こっちを見るなっ！

こっちは、この世界が掴めなくて、どんな対応していいのか悩んでるっていうのに！

それに。

永山さんを引きずり上げて放り投げた奴。

アルの仲間なんじゃない？

制服似てるし、馴れ馴れしかったよ？

アルも、止めなかったしね……

信用、できない。

やっぱり信用なんて、とても、できないわ。

アルフレッド。

あーあ。まだまだ、知らない事が多すぎる。

綺羅綺羅王子様に、絆されてすっかりドキドキしている場合じゃないよね。

糞坊主達は、自分の都合のいい情報しかくれなさそうだし……
一歩間違えると、あっさり殺されそう……

情報、誰から聞き出せばいい？

アルなら、ガードが緩^{ゆる}そう？

帰り方とか、何か方法があるのかな？

呼べたんだから、帰る方法もあつて欲しい。

帰す方法ありません。だったら ヤだな

とにかく今は、様子を見るしかないか……

そして、私は暫^{しばし}くの間は 彼らに従順な、望み通りの巫女を演じ
情報を集める事にした。

28話 巫女 3 アルフレッド ｝ sideアル

召喚者として立ったのは、義務感からだった。
王子としての、国民に対する義務。

王族は生まれた時から食うに困らぬ豊かな暮らしと引き換えに、国民の命と生活を守らなければならない。有事となれば、なおさらにである。

魔道騎士団に入団して、国を守る事について考えさせられた。自分がいかに甘えた考えを持っていたか、見せ付けられるような事の連続だった。

今のアースリンドが置かれた状況を見ても、王子である自分がすべきことを成さねば、国民に申し訳が立たない。

僕は、魔道騎士団 第2師団大隊長として、そう思っている。

今は 有事である。

150年前の大戦以来、魔道師になれるほどの魔力を持った子が年々生まれなくなった。

原因不明のその現象は、アースリンド以外の国で著しく、他国の騎士団は魔道を伴わない技術・体力勝負の集団になり、治療法師は医者に変わった。

周辺諸国にとって、魔道立国のアースリンドは最も手に入れたくない国の一つになった。

今まで小さいながら独立を貫けたのは、神を降ろせる巫女と依巫を呼べるこの世で唯一の大神殿があるから。

前の大戦で、圧倒的勝利をアースリンドにもたらした 恐ろしく不公平な神の御業を恐れ、武力を蓄えた周辺諸国も手を出してはこなかった。

今までは。

しかしここ数十年、アースリンドでも確実に魔道師の数は減少している。戦争に於いて魔道師の術が敵にあたえられるダメージは、たかが知れている。たとえ術が使えなくても、数で勝れば勝算は十分。

神が降りようとも、数で押せると踏んだのだろうか？

魔道師に頼る戦争の時代は、実質終わっている。現実を直視せず、対策が遅れたのは、頭の固い奴らの所為だ。

僕が入団して現状を知ってから、魔道騎士団以外の軍備を急がせたのだが、とても数年では間に合いそうもなく……

列強が手出し出来ないように、巫女と依巫よりましを召喚する事になったのだ。

僕は、今こそ王族として、義務を果たさなければいけないと思った。

巫女を召喚するのは、王子と決まっていた。

戦が終わった後も、神の声を聞ける巫女の実在は有用だからだ。

その有用な巫女を、王家の一員として囲い込む為の人選だ。

僕の国民に対する想いがあつたにしても、6番目の王子に大役が回ってくるのは珍しい。

今回、なぜ第6王子の僕に白羽の矢が立ったかという点、

他の王子達が逃げたから。

兄弟達の他力本願と無責任ぶりには慣れていても、驚いた。

亡き母の身分が低く後ろ盾が無くて立場が弱いから、押し付け易い
だとか、

結婚も婚約もしていないし側室の一人も置いてないから、巫女の機嫌を損ねないとか、

もう運命の相手と出会っていますから、自分が召喚しても誰も来ませんとか

「運任せで結婚相手が決まるのは厭だ！」と泣いて嫌がったとか

……

そんなもろもろの聞きたくも無い理由は、聞かないことにして

「他の王子は魔力も足らず実力不足。召喚者は確実に成功するアルフレッドに決定した」

そうゆうことにしておいて欲しい。

そんな経緯で召喚する事になったから、別段期待してはいなかった。

いや、正確には失望するのが怖くて、どんな女性が召喚されても受け入れようと 運命の人を夢見る事を 自ら戒めていたのかもしれない。

そして

召喚の光が消えた魔法陣に佇む少女は、僕の予想を遥かに超えて、美しかった。

彼女と初めて目が合った時、全身の血が沸騰するかと思った。

アースリンドでも特に珍しくも無い黒髪だが、彼女の髪は濡れたような艶とサラサラ流れる黒い滝のようで、こんな美しさの髪は見たことが無かった。

服装は、白い長袖の上着に濃青のスカート。黒いタイツ。黒い靴下。黒い靴。

2本の青のラインが入った三角の広い襟は胸元まで伸び、赤いリボンが締められている。

肌を晒しているのは、顔と手首から先のみと、露出も少なく清楚と言える装いである。

最初、彼女は見知らぬ場所に驚いている風だった。

しかし、僕の姿を見つけると

黒曜石の瞳を大きく見開き、キラキラ輝かせて うつとりと僕の顔を見つめた。

うつすらと開いた唇が、艶つやを帯おびていて妙みよつに艶なまめかしい。清らかな容姿の中で、唇だけがやけに煽情せんじょうてき的で、心を掻かき回される。

そして何よりも心を掴つかまれたのは、僕を見つめる 真っ直ぐな瞳。あんな風に見つめられたのは、初めてだった。

僕が名乗ると、小さな声で彼女の名前を覚えてくれた。

カノン……綺麗な響きだ。

「出会えて嬉しい」と言ったら、カノンは何も言わずうつむいてしまった。

何か、気に障ることを言ってしまったのだろつかと、よく見ると、耳が赤い。

照れてる？

軽く抱き寄せると、首まで真っ赤になって……

かわいい。

なんて、可愛らしい反応をする娘^こなんだろう……

カノンを抱き寄せた時、ふわんと微かに花の様な果物の様ないい香りがした。

舞踏会で言い寄ってくる令嬢達のキツイ香水ではなく、さり気ない香り。

ずっと嗅いでいたい。

この髪に顔を埋^{うず}めて 黒髪の滑らかな手触りと、良い香りに酔いたい。

清らかな巫女に対しての、不埒な考えを悟られないように最高の笑顔を浮かべる。

あまりの自分の幸運に、僕はシーワールドにも いい娘^こが召喚されますようにと

祈りを込めてサインを送った。

彼の結果は、残念だったけど……

召喚の後、神殿の迎賓館で着替えやら、食事やら、簡単な召喚の説明やらを神官から聞いている間、カノンは俯^{うつむ}き加減で、ほぼ無言で過ごしていた。

神官達が、とにかくよくしゃべるので、2人で話すきっかけが掴めなかった。

次の日の朝、僕が朝の挨拶に行くと

カノンは僕だけに聞こえる、とても小さい声で

「もう一人の少女はどうなりましたか？」とまるで隠すように尋ねた。

「怪我をしていたので治療して、いまは回復しましたよ。」

と僕がカノンの耳元で答えると、

「よかった。」と硬い表情のまま、囁いた。

おかしい？

昨日と反応が違うようだ。

昨日召喚の直後は、僕の言葉や仕草にに頬を赤らめていたのに。

今日のカノンは頑かたくな態度だ。

時折、僕をじいつと見ているが、目が合つと軽く眉をひそめて何かを考え込んでいる様子だ。

名前すら呼んでくれない。

理由が分からない。

朝の二言ふたことからは、また無言を通し、王に謁見えっけんするために玉座の間へ移動した。

昨日の異世界の出で立ちも良かったが、巫女の装束を着て 玉座の間に立った、カノンも美しかった。

白絹で、袖と裾の長いのゆつたりとした內衣を身に付け、その上

から緋色の綾織りに錦の縁飾りが付いた 床まで届きそうな長い上着を重ね、赤金錦のサッシュベルトで留めてある。

腰まである黒髪と上着の緋色が絶妙なコントラストを生み出している。

真っ直ぐに切り揃えられた前髪は、彼女の顔立ちと共にエキゾチックな魅力を際立たせていた。

巫女姿のカノンは、まさに神秘的な魅力を溢れさせていた。

王太子である長兄のカノンをみる目が、いやらしくて不快だったり、

カノンが無表情で感情がまったく読めなかったりと 気に掛かる事はあったが

謁見は、滞りなく終わった。

元々、何かを話すわけでもなく、召喚が無事済んだ報告をするだけだ。

依巫よりましが一緒に無いのが唯一の例外だろう。依巫よりましの傷ついた姿には驚いたが、怪我を治してから送り返す事になりそうだ。子供に依巫よりましをさせるのは、いくら国家の為とはいえ気が引ける。

シーワールドには残念だろうが、奴なら理解するだろう。

謁見を終えたカノンと僕たち一行は、大神殿へと向かった。

巫女が依巫に神を降ろす『神の間』を案内するためだ。

カノンにとって大きな問題になる事が、待ち受けているとも知らずに……

29話 巫女 4 神の間 ｛side花音

謁見の席では、我ながらよく耐えたと思う。

本当は、勝手に人を呼びつけた王様とやらを罵倒したかったけど、不敬であるとか言われて殺されるのは困るから、我慢した。

平伏低頭とまでは強要されなかったのも幸いだった。

意外と巫女のポジションは高いのだろうか？

王族や貴族らしき人々の、品定めをしているであろう視線にも辟易したけど、アルが隣でずっとムツとした顔で そいつらを睨んでいたので、好しとした。

後は、大神殿の『神の間』を見学したら部屋に戻るそうだ。

宮殿から大神殿へ向かう道すがら、アルは宮殿と神殿について説明してくれた。

要約すると、

アースリンド国の王都の中央には宮殿と隣接した大神殿がある。

宮殿には、王が政を行う金剛宮と 王、王妃、王女、年少の王子、側室が住まう後宮、成人した王子が住まう宮殿群とがあり、アルフレッドの蒼玉宮もその一つだ。

神殿は荘厳な古代様式の石造りの建物で、建国当時から現存する数少ない建造物である。

白亜の列柱は植物の幹を象り、柱頭部には葉の彫刻が刻まれており、大神殿の周囲を取り囲む回廊を華麗に装飾している。

床は長い年月を経てなお 鏡のような光沢を失わず、壁には神々の物語を象った、繊細なレリーフが施され、神話を後世に伝える役割を果たしている。

その大神殿の最奥に『神の間』がある。

神の間には三振り^ふりの剣が奉じられていて、その剣を用いて巫女は依巫に神を降ろす。

アルの説明から、賞賛の言葉を抜くと、大体こういう内容だ。

アルって、すごく言葉を飾るというか 詩的表現を多用するよね。
王子様の素養^{そよう}の一部ですか？ と聞いてみたい。
まだるっこしいので、止めてもらいたいけど。

長つたらしいアルの説明を聞くうちに、大神殿の『神の間』の入り口に到着した。

高さ4メートルはあろうかという巨大な青銅^{せいどう}の二枚扉の両横には白くて飾りの少ない衣装を着た中級つばい神官二名と、並つばい神官二名が控えていた。

中級はおじさんで、並は若者だ。高慢糞坊主^{こうまんふそうず}どもと違い、この四人は聖職者つばい禁欲的で清らかな空気が漂っている。

（よかった。ちゃんとした神官もいるんだ）

そして、神の間へと通じる ゴテゴテとした浮き彫りが施され、無駄に頑丈そうな扉は、神官四名の手によって、自重^{きじ}に軋みながらゆっくりと押し開けられた。

神の間への扉というより、地獄の門と言う方が相応^{ふさわ}しいんじゃないだろうかと思ひながらも部屋に入る。

中は、半球形の天井に開いた、大きな穴から差し込む陽の光で、とても明るかった。

天井の穴には、ガラスなど嵌められておらず、ぽつかりと青空が覗いていた。

壁も天井も大理石に似た白く大きな石材が使われていて、その継ぎ目は、髪の毛一本も通らない位きっちりと組み合わされている。

扉から向かって正面奥には壁面一杯、天井まで広がる蔦をデザインした黒い金属の刀掛けが取り付けられていた。

所々に金や宝玉で煌びやかに飾られたそれに、三振りの神剣が鞘に納められ安置されている。

一振りずつ蔦に絡め取られる意匠で、特に立派な一振りを頂点に同じ様な二振りが下に並び、正三角形に配されている。

神剣の前には、直径1.5メートルほどの水盤が、花を象った台の上に乗せられていた。

水を満々と張った、その水盤は水鏡と呼ばれ、神との会話に使われる代物らしい。

中央の床には、魔法陣らしき模様が緻密なモザイクで描かれていて、他より3段ほど低くなっている。

それ以外は特に、窓や飾り、扉など何もなく、ガランとした部屋だ。

「清らかで静かな場所で、ございましょう?」

中級神官の一人が、穏やかな笑みを浮かべて言った。

確かにその通りかも、と思った時。

微かな振動を感じた。

「??」

辺りを見回すが、特に変化はない。
他の人たちは、何も感じない様だ。
しかし、私がこうして見回す間もその振動は強くなり、鼓膜こまくに響いて痛い位だ。

(一体、何処どこから?)

ゆっくり室内を歩き始めると、今度は囁ささき声が聞こえてきた。
何を言っているのかは、解らない。しゃわしゃわした声が、囁きのレベルを超えて響き渡っている。

(こんなに不気味な音が、満ちてるのにみんな気が付かないの?)
アルの顔を見上げて、にっこりと微笑み返されるだけだ。

(やっぱり、聞こえてないんだ……)

そして、大きく小さく空間を埋める耳障りな声は、水鏡から聞こえて来る様だった。

怖い。

怖くて、とても近寄れない。

怖がっていても、埒らちが明かないのは 頭では理解しいても、
本能在「まわれ右して、ダッシュで逃げろ！」と告げている。

囁く声の雰囲気まがまがが、禍々しいのだ。

（神とかつて、もつと こう……神々しい清らかなオーラとかじゃない？）

怨念がこもった欲望の叫びっばいんですけど……

なんだかヤバイ神様？

邪神も神ってコト？

水鏡には、近寄らないでおう

別に好奇心とか無いし これがホラー映画なら 水鏡を覗き
込んだ瞬間、白い手とか、どわーって出てきて水の中に引きずり込
まれるんだよう！

怖すぎ。

高慢糞坊主^{こつまんくそほうず}が得意顔で水鏡の説明とか始めてるし……
さあさあって、手招きしても、行かないからっ！

耳は痛いし、囁く声も大きくなっているし……気分悪い。
吐きそう……）

「カノン。大丈夫ですか？ 顔色がすぐれませんよ……」

アルが倒れそうな私に気が付いて、支えてくれた。

冷や汗が額から流れる。

繋いだ手^{つな}から、アルの体温が伝わってきて、自分の指先の冷たさに
気付く。

（いや……大丈夫じゃない……マジ無理かも
ヤバイ。 立ってられない）

体は動かないのに、思考だけはグルグル回った。声が五月蠅い！
耳が痛い！

ふわっ

体が浮いた。

「え？」

びっくりして閉じていた目を開けると、視点が高い。
見上げるとアルの顔が間近にあった。　どうやら私はアルにお姫
様抱っこをされているようだ。

普段なら、こんな小っ恥こっばずかしい格好は、断固拒否したいところ
だが、今は非常に有難い。

もう、頭がクラクラして、まともに歩けそうにないのだ。

もう、なんでもいいから此処から連れ出して欲しい。

重くて、やっぱり無理とか言われて降ろされるのは厭いやだな〜など
と、チラツと思ったけど、私の体重を支えているアルの両腕はとて
もがっしりした筋肉がついていて、優男やさおとこな顔からは想像できない程、
鍛きたえられている様だ。　少なくとも部屋に帰るまで位は、平気そう
な安定感があった。

アルは、突然のお姫様だっことに驚く神官達を押しつけ　すごいス
ピードで、部屋まで戻ってくれた。

神の間を出てからは、あの声は聞こえなくなったし、頭痛も無く
なったけど、代わりにどっと疲労感が押し寄せて……

その所為^{せい}かどうかわからないけど、アルに抱き上げられて運ばれるのは ユラユラ、フワフワして とても気持ちよかった。

29話 巫女 4 神の間 ｝side花音（後書き）

続きは次回に・・・

30話 巫女 5 寝室にて ｝side花音

神殿の迎賓館に用意された私の部屋に入ると、アルはベッドにそっと寝かしてくれた。

そして、世話係りの人が持ってきた冷たい濡れ布を私のおでこに乗せると、手を優しく握って声を掛けていてくれた。

アルの手は、硬いタコがあってゴツゴツしていた。

王子様の手なのに、意外だった。

（ああ思い出した。騎士団の隊長って聞いたな。 剣とか持ったりしてるんだ……）

物語の王子様が、生身のアルフレッドになった様に思えた。いろいろ考えなくちゃいけないんだけど、頭がグルグル回って、考えがまとまらない……

アルが優しく頭を撫でてくれるのが、すごく落ち着く。あったかい手が、気持ちいい。

「はあ……」

思わず漏らした溜息に

「カノン……気分はどう？ 辛い？」

いかにも、心配ですって声で聞いてくる。

アルは、声まで素敵だね

「どこか痛い所、ある？ 昨日召喚されたばかりなのに、無理さ

せたね……」

違うんだけど……

そういえば、アルは普通の言葉でしゃべってる。

飾らない方がいい。 初対面だから、格好つけていたのかな？

ふふふ。

なんだが、アルに撫でてもらって楽になった。

怖かったのと、ほっとしたので、疲れた。

そして、眠い。

このまま、眠っちゃおうか？

うとうと眠り始めたところへ

「アルフレッド殿下。 失礼致します。」

ノックと共に男の声がした。

アルが、そっと立ち上がって、音を立てないように寝室から出て行った。

扉の向こうで話し声がする。

聞き耳を立ててみても、遠くて聞き取れない。

神の間の事について話しているのだろうか？
すごく、気になる。

程なくアルが戻ってきて、ベッドの脇に置かれた椅子に座った。
そして、おでこの布を裏返して乗せながら

「大丈夫。 無理はさせないからね…… ゆっくり休んでね」
目を瞑^{つぶ}ったままの私に、答えを求める風でも無く話しかける。

「……………」。

続きは？

何も話さないの？

眠ってるって、思ってる？

気配でこっちを見ているのは感じる。

じーっと、見てる。

ただただ
只々見てる。

居心地、悪い。

そんなに見られて眠れる訳無いんだけど！

もう眠気なんか、何処かへ行つた！

起きる。

「ありがとう。もう良くなりました。」

そう言つて、私は おでこの布を取つて上半身を起こした。

いきなり起き上がった私を見て、アルは驚いたようだったけど
「もう大丈夫です。巫女の装束もしわになりますし、起きます。」
と言つて、ベッドから降りようとするとアルに止められて、ちょ

つとした押し問答になった。

結局

「昨日の依巫の事もあるし、召喚が何らかの形で悪影響をもたらしている可能性がある以上、治療法師に診てもらうまで、安静にして欲しい。」

という、アルの意見に従うことになった。

永山さんが、あんな姿になってしまった事を思い出して、ひよつとして自分もどこか壊れているかもしれないと いままで 今更ながらゾツとした。

女神官の手を借りて夜着に着替え、治療法師っていう医師みたいな人が来るまで、横でもなるうかとベッドに上がった所へ、治療法師サリエス・ファラーが到着したと告げられた。

「お休みの所、ご足労頂きありがとうございます」と頭を下げるアルに

「依巫よりましの治療が長引いて、力を使い過ぎました」と、素っ気無い返答をする人物を見て、私の全身に鳥肌が一気に立った。

サリエスというその人物は、低めの声と170cmちよつとの身長から、細身だけど男だと思われる。

薄い水色のほぼまつすぐな髪が、切り揃えられもせず伸び放題で、後ろは腰まで、前は顎の辺りまで不揃いに覆おおっていた。右目は前髪に隠れていて見えない。

顔色は色白というよりは青みがかり、その上 目の下には隈くまがくつきりと浮いていた。

そして、なにより私を震え上がらせたのは、サリエスの眼だった。まるで、腐った魚の様な…… 鮫の目の様な…… 青白い瞳。

白目は赤く充血していて、濁った色をしていて、黒い瞳孔だけが

ポツンとこちらを見つめている。

（はいー ゾンビ出ましたー）

本当に、人間ですか？ その目の色は悪役魔物の定番でしょ？
此処はホラーな世界だったんですか？

怖い、すごい苦手なんだけど……

目の前にこんなのがいるだけでも逃げ出したいのに、そいつは眉間に皺をよせて不機嫌そうに私を見下している。

ベッドの上で可能な限り後ずさったけど

「カノン。サリエスはアースリンドーの治療法師なんだよ。ちやんと診てもらおうね。」

などと言うアルに、あっさり引き寄せられてしまった。

確かに、白衣みたいな上着だから、医者に見えるけどもね、

『36時間連続勤務の後に、地下の研究施設から逃げ出したゾンビに噛まれて自分もなっちゃった悲惨な外科医』
みたいな顔が怖いんだよ！

サリエスは、アルに阻まれて逃げられない私に、無言で手を伸ばしてきて、両手のひらを握った。

その冷たさに、思わず体がビクッと反応してしまう。

（冷たいっ！ 死んでるんじゃないの?!）

そして、顎を掴まれ、口を開かされて中を診られ

（ガツて顎を押さえて、無理やり口を開けるな！ 痛いってば！）

恐怖のあまり声を発することも出来ない私からの、拒絶と抗議の視線を無視したまま

終始無言でジロジロ観察していたサリエスは

「特に異常は、ありません。　しいて言うなら精神的疲労くらいでしょうか。」

一応薬は出しますが、殿下が心配される程ではありません。
よりまし
依巫の傷も召喚時に出来たものではありませんでしたし、召喚のダメージは考えなくて良いでしょう」

と一本調子でアルに告げ、用は済んだとばかりに　さっさと出て行ってしまった。

「はあああ……」

（出て行っ た！　あああああ……　気持ち悪かったあ）

診察つて、たったあれだけ？手抜きだろ！って思ったけど　1秒でも早く出て行って欲しかったので　そこはスルーをしておこう。

目の前の恐怖が去って一息つくも、まだ次に何か（白い子どもと
サリエス
か）出てきそうで、アルの軍服の端っこを握り締めたまま離せない。

不覚。

暫くして、薬が届けられた。

空腹では体に悪いと、スープだけの昼食のあとに飲んだ。

その白くてドロツとした得体の知れない薬液は、嫌な甘さがあっ

て とても飲みにくかった。

たったコップ一杯の薬を飲むのに、口直しの水が三・四杯も必要なくらいに……

アルが心配そうに、薬を飲み終わるまで目を離さないから、こっそり捨てることも出来なかった。

薬を飲み終わると、何もすることがなくなり、やわらかな午後の日差しが差し込む窓を開けてぼんやり外を眺めたりしていた。

ずっと傍から離れようとしないうアルが気になって、仕事に行かなくていいのかと尋ねると、召喚者は巫女を守るのが第一の仕事だから、こちらの世界に慣れるまで（せめて体調が戻るまで）は一緒にいるとの事だった。

ずっと一緒に勘弁して欲しいと思うが、神の間の事と、サリエスの恐怖が抜けきらない今は、有難く横に居てもらおう。

見るからに退屈そうな私の様子を見兼ねたアルが、本でも読みましようかと部屋にあった本を手にとった。

アルが選んだのは、子供向けの昔話だった。魔道師と召喚された娘のハッピーエンドっぽい話。

どうやら、私向けに神官達が用意していた物みたいだ。静かな部屋にアルの声だけが流れる。

綺羅綺羅王子は声まで爽やか系だね。

ふと、アースリンドの言葉で聞いたら どんな風かと指輪を外してみる。

意味は分からないけど、英語っぽい響きの言葉。穏やかで張りのある声音を純粋に楽しむ。

（いい声……）

だんだん^{まぶた}瞼が重くなる。

サリエスは、あの液に睡眠薬でも混ぜていたのだろうか？
異様に眠いんだけど……

ゾンビ医者め……

溺れる夢をみて目を覚ますと、真夜中っぽかった。

ベッドサイドのライトからオレンジ色の柔らかい光が室内をほの暗く照らしている。

ベッドの横を見ると、アルが長椅子に横たわって眠っていた。
影の濃い部屋に、一人きりじゃない事にホッとした。

アルは、上着を脱いで布団代わりに掛けているけど、薄ら寒そう
だ。

空調が入っているのか、凍えはしないけどそのまま寝たら風邪は
引きそう……

でも、温度上げるのとかって、どうすればいいのか わかんない
し

それよりも　まず、トイレ　トイレ。

寝る前に、あんなに水を飲んだから……
そうと起き出して、アルに気付かれないように急ぐ。

はあゝと息をつく、ぶるつと寒気がきた。

「くしゅん！」

アルがくしゃみをした様だ。

王子様の生くしゃみを見逃した……

人がくしゃみする時の顔って、好きだなあゝ
無防備っていうか、取り澄ました人でも、つい地が出てしまう感じがいい。

どんな美形でも、一瞬だけど変顔になるし。

次は、ぜひお目に掛かりたい。

寝室を抜けて、居室に出る。

世話係りの女神官は……居眠りしている。

この部屋に通されてから、この人がずっと面倒を見てくれている。
神殿は人が足らないのだろうか？

豪華な神官の衣装を作る金があるなら、もっと人手を増やせよ、
予算配分おかしいだろ。　などと思いながら、気持ちよく寝ている
ところを起こすのは気の毒なので　そのまま寝室に戻った。

ええゝつと。

空調の温度も変えれないし、毛布とかも見当たら無い……あるのは
自分の掛けていた薄手の羽根布団一枚。

仕方が無い。

ベッドから羽根布団を引つ剥がし、アルにそつと掛ける。
ベッドがクイーンサイズなおかげで、掛け布団も大きくて長椅子から随分はみ出る。

よしよし、アルは眠つたままだな。

閉じられた瞼まぶたの下に睫毛まつげの影が出来てる……

身長差の所為せいで、じっくり見れなかった顔を観察する。

（よく出来た造りだな）

これが正直な感想。 眠っている顔までかつこいって反則じゃない？

涎よだれくらい、垂らそうよ

視線の先には鼻。 スツと通った高い鼻。 日本では滅多にお目にかかれない縦長の鼻の穴……

無防備に眠る美形の本物王子様。 またとない絶好の機会。

（なぜ、この部屋にはティッシュが無い！ こよりを作る紙も見当たらない！）

いっそのこと自分の髪の毛で……いやいやいや、それは女の子としていかなものか。

一瞬ますの内に衝動と抑制が頭を駆け巡り、怒らせて出て行かれるのは拙いという結論に至り、泣く泣く生くしゃみはお預けとした。

長椅子からはみ出した布団を柏餅かしわもちの葉ようにして包まりくる、アルを起こさないように、そつと寄りかかり眠くはないけど目を閉じた。
ひとが呼吸する微かな動きわず、仄ほのかに感じる体温。 それが、こんなに安心するものだなんて知らなかった。

アルのゆつくりとした呼吸のリズムに合わせて、息をしてみる。
他に何の音もせず、規則正しい寝息だけが静かに聞こえる。 緩^{ゆる}

やかに時間が流れるような気がした。

メールも、ネットも、ゲームも、勉強も、何も無い静かな夜。
寂^{さび}しいはずなのに、寂^{さび}しがらない自分が不思議だった。

30話 巫女 5 寝室にて \side花音(後書き)

読んで頂き、ありがとうございます。

諸事情の為 これから更新がゆっくりになると思います。

どうか、ご理解してやって下さい。

もちろん、完結するまで頑張りますので、これからも宜しくお願い申し上げます。

31話 巫女 6 蒼玉宮 ｝side花音

チチチチ……

小鳥の声がうるさいな……

眩^{まど}しい カーテン閉めるの忘れたのかな？

うーん…… もうちょっと寝たい

窓に背を向け、コロンと寝返りを打った。

ん？

何？ あったかい物に包^{くる}まれてる……

ん？

コレ、なんだろう？

開けたくない目を開ける。

目の前に、二つの青い空があった。

「おはよう。 カノン。 よく眠れた？」

朝日にきらきら輝く、整った顔。

寝起きで頭が回らない…… ぽやんと見ると

胸焼けする程、甘い笑顔が近付いてきて

口唇^{くちびる}を塞^{ふさ}がれた

ちゅく

「ん！ んん……！！」

頭の後ろに手を回されて、顔が離せない

ぐぐ ドガッ

ベッドの下に蹴り落とした

物音に驚いたのか

「失礼致します。殿下？ カノン様？ どうかなさいましたか？」
と、遠慮しながらも女神官が顔を出す。

「なんでもない。朝の挨拶あいさつをしていただけだから」
何事もなかったかのように、さらりとアルが流す。

「こんなの挨拶じゃない！（いきなり、ベロちゅうって！）
しかも、どうしてアルがベッドにいるの！」

「それは、昨夜カノンが僕を放してくれなかったからじゃないか」
意味あり気な流し目で、ニヤニヤしながらアルが続ける。

「カノンが僕に掛けてくれた布団の中で、カノンまで一緒に床で寝
てしまっているのを、

目を覚ました僕が見つけて ベッドに運んだんだけど、
カノンは僕の服を掴つかんだまま放してくれなくて……ねえ？」

アルは、女神官に同意を求めるように振り向いた。

昨日、話の中で普通の口調の方が聞きやすいと言ってしまったか
らか、アルの話し方が急に馴れ馴れしくなっている。

中に入り辛づらかったのか、入り口付近にいた女神官は、急に話を振
られて戸惑いながらも

「はい。あまりに固く握られておりましたので、無理やり剥はがす
訳にもいかず……殿下がこのまま眠おらせた方が良くと仰おせでしたの
で、私が殿下のブーツをお脱がせて……」

女神官が私に申し訳なさそうに口ごもる。

私のせいですか？！

私が寝ぼけて、アルの服を離さなかったのがいけないんですか？
それでキスされるなんて、全然得心とくしんしてないけど！

「キスは余計よけいだと思う」
ボソリといった私に

「一晚耐えたご褒美ごほうびでこと。ね？」

甘く蕩とろける極上の笑みを、朝っぱらから振りまくな。

襲襲わないでくれて、ありがとう　とでも言えばいいのか？

ムカつく。

腹が立つ。

王子だと思って、丁寧な対応を心がけてた自分にも腹が立つ。

もう、敬語とか使ってやらないからっ！

でも、文句でも何でも、言葉を口にしたら喜ばれてしまいそうな
雰囲気ふんいきなので

無言で睨ねめ付ける。

そんな私の刺す様な視線など、蚊の針ほども感じないのか

「どきどきするから、そんなに強い目で見つめないで」などと鼻
歌でも出てきそうな　にこやかさで、アルは居室へと背を向けた。

腹立ち紛まぎれに、うしろ姿目掛けて　手近たぢかにあつた置物を投げつけ
ると

アルは当たる寸前に振り向いて、ヒョイと受け止めると

「これだけ元気なら、今日　部屋を変われそうだね。　後で迎えに
くるよ」

そう言つと、置物を適当な棚に置いてサッと消えた。

あいつは後ろにも、目がついてるのか……？

いやいや、それより部屋を変える？

着替えを持って来た女神官に

「今日、部屋を変わるのですか？」
と尋ねると

「蒼玉宮の方が、カノン様は落ち着かれるだろう　とお聞きしましたので……」

「誰がそう言ったの？」

「アルフレッド殿下が……そう　おっしゃられて……」
「……………」

勝手に決められるのは気に入らないが、確かにこの部屋はゴテゴテ飾られ過ぎて、とても寛げるものではない。

それに、あの怖い神の間から、少しでも距離を取れるのは嬉しい。文句を言うのは、蒼玉宮とやらを見てからでも遅くなくろうと、私は身支度を始めた。

今日は巫女の装束ではなく、ドレスを着た。

ドレスは、オフホワイトの厚手でスルスルした手触りの絹地に水色レースが重ねられ、ブルーのサテンリボンが所々にあしらわれている。丸く大きめに開いた襟ぐりは鎖骨が見える程度で、パフスリーブの半そでに水色のジョーゼットの長袖が内側から出ている。スカート部分はハイウエストで、Aラインを描いて床まで自然な広がりを見せている。大仰なパニエや固いコルセットで締められることなく、ドレス丈も、いつ計ったんだろう？という程、床上下度に仕立て上げられていて、予想していたより、楽に過ごせそうだった。

朝食を終えると、アルが迎えに来た。

オリエンタルブルーのフロックコートに揃いのズボン、濃い藍色のブーツという格好だ。

昨日の謁見の時と比べて、随分と軽装。飾りや刺繍も無いし、シンプルだ。

これが、王子様の普段着だろうか？

上着の前を開けて、中のベストまで肌蹴はだけてるのは、少し崩くずしすぎの感があるんだけど……

私の荷物なんて、全く無いので部屋が変わるといっても、自分が付いていくだけだった。

アルは、神殿から蒼玉宮せいぎょくきゅうに付くまで、建物など色々な事を解説してくれた。

蒼玉宮せいぎょくきゅうは、白と青を基調にしたすっきりとした小宮殿だった。内装もシンプルでありながら、趣味が良く、迎賓館の装飾過多に満腹だった私は この宮殿の爽やかな空間に大満足だった。

その様子を見ていたであろう、アルが

「蒼玉宮せいぎょくきゅうへ ようこそ！ 気に入ってくれた？」

と、ニヤリと笑って自信あり気というから

つい

「悪くない」

と、素っ気無い返事になった。

そんな私にアルは苦笑しながらも

「此処こゝには、僕と古くから仕えてくれている侍従や侍女しかいないから、気兼ねなく自由に使ってね」

と言って、彼らを紹介した。

案内された部屋は、白と水色、淡いピンクといったパステル系を基調とした、女性らしい優しい色合いで、広いリビングと小さな寝室に分けられていた。（小さめといっても優に10畳は越すだろうけど）

リビングある寝室と反対側のドアを開けると、壁一面本棚になっている部屋だった。

大きな黒檀の机と、布張りの優美な応接セットが置かれてある。

更に奥のドアを開けると……

キングサイズのベッドが中央に鎮座した、いかにもメインベツドルームという部屋。

濃紺の天井には金と銀で星が描かれ、夜空を移した様。

壁は紺から群青のグラデーションに銀彩で植物の文様が繰り返されて、不思議に落ち着く空間に仕上げていた。

「きれい」

思わず呟くと

「僕の寝室。 気に入ってくれた？」

アルが私の頭の上にコッソリと顎を乗せて、後ろから そっと抱きしめてきた。

びっくりした。

足音しなかったよ？

っていつか、やめてほしい。

不心得者には頭突きでもプレゼントしようかと、一瞬沈み込む私

に、

アルはスツと頭を引き、腕を緩めたと思ったら、離れ際に頬に軽くキスをした。

「朝ので懲りたからね。こっちの部屋が気に入ったのなら、今日から使う？ 寝心地いいよ？」

そう言ってベッドに仰向きにダイブして、ポンポンと隣を叩く。

「……………」

ありがとう！ お言葉に甘えて、今晚からあなたと寝るわ！

きやはっ！ このベッド、ホントに寝心地いいね。今晚からヨロシクね！

なぐんで、私が言うとも？

申し訳ないけど、日本人の脳みそでは、そんな展開ありえないと思うよ。

そして、やっぱり此处はアルの家だったか。

そんな気はしていたんだけどね……寝室が書斎と居間を挟んでつながっているって身の危険を感じるわ。

無言で頬つぺたをゴシゴシ拭^{ぬぐ}って居間に戻った。

鍵が付いていたから、ついでに締めておいた。

ソファに腰掛けると、タイミング良く紅茶が出された。

自分より少し年上の侍女に礼を言い、花の香りのする紅茶を飲む。優雅だ。

コンコンコン

「カノン。開けて」

無視する。

カチャ

アルが鍵を開けて入ってきて、正面に腰を下ろした。
何事も無かったかの様に、出されたお茶に口を付けている。

「いい香りだ」

にこやかに言い、足を組む。

私が無言で差し出した右手にチラリと目を遣ると

「様子が見れないと、心配なんだけど？」

と言いながらも、意図を察して すんなり鍵を渡してくれた。

「サリエスが、心配ないって言ってたから、大丈夫。」

そうそう。 入って来られるかと思うだけで くつろげない。

鍵を渡して油断さすためか、最初から渡すつもりだったのか アルの真意が分からないけど、後でノブの隙間に何か詰めて動かないようにしておこう。

それから後は蒼玉宮を案内されたり庭を見たりして過ごした。

アルは よくしゃべり、よく笑う。

ずっと笑顔。

私が無愛想な態度でも、至れり尽くせりに世話を焼く。

それはまるで、愛しい恋人に対する様である。

うかうかしていると、好かれていると勘違いしそうになる。

その、うつとりとする甘い声に心が持っていられる。

危ない。

しっかりしなければ！

例えばアルが 親切で、優しくて……格好良く、好みの顔であつても

違う世界から連れて来て、戦争なんてものに巻き込んだ張本人なんだから。

ここは知らない世界。

利用されて、サクツと殺されるなんてのも、在りえると思う。

このアルフレッドが、それをするとは考えにくいけど……

でも、ここまで手厚く持て成すのは何故だろう？

強要すると、何か不具合が出るのだろうか？

あの神の間の事があるからなあ……

のこのこ近付いて、食べられちゃうとかは嫌だなあ

巫女をやりたくないって言っても「はい、そうですか」で済まされないだろうな。

などと、考えていると

ツルッ

「うわぁ！」

階段で滑って転びそうになった。

「だから、気を付けてねって言ったのに。 僕の話、聞いてなかったでしょ？」

アルに抱きとめられた。

（ああ、はいはい）

（アルの説明を聞き流していましたよ

でもね）

「ほっぺにチューは余計じゃないかな？」

「そう？」

やっと頬から口唇くちびるを離して にっこり微笑むと、また転ぶと危ないからな と、手を繋がれてしまった。

これじゃあ、恋人同士の散歩じゃないか と思ったりしたけど、転んでチューされるのも迷惑なので、従うことにした。

スキンシップ過多だね。

このまま恋人ごっこを続けていても、私が聞きたい話には一向にならないし

いい加減、誰に聞くとか何時いつ聞くとか……考えるのも面倒くさくなつて

「そろそろ、本題に入らない？」

庭園の東屋で冷たくしたハーブ茶を飲んでいる時に切り出した。

「一体何のこと？」

アルが笑顔で聞き返す。

「いくら巫女が貴重でも、丁重に扱い過ぎなんじゃない？」

巫女って、一体何者なの？ みんな、巫女に何を求めているの？」

真剣に聞く私を見て、アルは真顔で

「僕がカノンを大切に扱うのは、カノンの事が好きだからだよ」

「好きって……逢ってまだ3日目なんだけど」

「好きになるのに、時間なんか関係ないよ。カノンと逢った瞬間に好きになってしまったんだから」

（一目惚れですか？ やはり王子！ まさに王道）

「私の事、何も知らないで好きとかって、おかしいでしょ！」

「おかしくないよ？ まだ3日だけど、どんどん好きになっているから。カノンを知れば知るほど、きつと もっと好きになる」

（こいつは また、齒の浮くようなセリフを……）

「それに、カノンは僕の運命の人だって 皆、知っているから丁重な態度になるんじゃないかな？ 巫女を神聖視してる者もいるけど、神を降ろす儀式を執り行う事以外は、巫女は自由だし」

「……………自由」

なぜだか その言葉に引っかかってしまった。

「自由って？」

アルフレッドの優しい顔立ちを見て ジリッと苛立ちが込みあげてくる。

（怒っちゃダメだ！ キレて状況が良くなることなんてないって解っているのに！）

と、自分を諫めるも

「ここでの私に、自由なんてあるの？」

怒りに声が震える。

「自由って言うなら、元の世界に返して」

（言ってしまった・・・）

言葉にしまつてから、後悔した。

アルの顔が、今の私の言葉で酷く傷ついたように、歪んだから……

「カノンは、帰りたいの？」

驚いたように、アルが訊ねた。

「訳の分からない世界に連れてこられて、巫女だといわれて困っているよ。」

学校の友達も 私がいきなり消えちゃって、きっと心配している」
正直に言った。

「ごめん。 浮かれてた。 カノンと出会えて嬉しすぎて……カノンの気持ちを考えてなかった。」

今まで召喚で来た女性達は、皆 何かしらの事情を抱えていて、元の世界で生き辛い人ばかりだったんだ。

だから、カノンもそうなのかと、勝手に思い込んでいた」
本当に申し訳なさそうに、アルが謝った。

「あの世界で生き辛い事情……」

驚いた。

（私、そんなに、嫌だったのかな……？ 世界を超えてまで、逃げ

出したい位に。 友達や家族を放り出してしまっ程に？)

なんだか、笑い出したくなってきた。

(被害者面^{ツラ}して、自分も逃げ道に飛び込んだって訳か……)

呆然としたり、笑いそうになっている私は さぞかし不気味だったのだろう。

アルが慌てて言葉を続ける。

「カノン。 カノンの世界へ還^{かえ}すことは出来る。 でも、呼ぶのも返すのも1度きりなんだ。

カノンを還してしまったら、僕は もう2度とカノンに会えない。それは、嫌なんだ。 カノンにずっと傍^{そば}に居て欲しいんだ。」

「カノン。 今すぐ帰らなくてもいいだろう？

君には絶対^{つら}辛い目に遭^あわせない様にするから、ここにいてくれな
いだろうか？」

アルの空色の瞳には、何か切実な孤独^{こどくかん}感みたいなものが浮かんできて、私を戸惑わせた。

何がアルを駆り立てているのだろうか。

アルの真剣な告白に、私は軽はずみな返事は してはいけな
いと思った。

この人の言葉を信じていいのだろうか？

また、裏切られたら？

好きだとか、愛しているとか言っても、何か他に目的がある
のかも？

でも、私は此处ではただの16歳の小娘にしか過^すぎない。

家名も財産も、何一つ持っていない。

あるのは自分自身だけ。 その私をアルは好きだというの？

知りたい。

アルは何も持たない私の、何処どこを好きだというのか。

「嫌がることはしないと、約束するなら……もう少し居る事にする」

答えを聞いた瞬間からアルの顔が輝き出して、私をギュッと抱きしめて おでこ頭にキスの雨を降らせた。

だから。

それ、嫌なんだけど……

32話 巫女 7 夜明け前 〈side花音（前書き）〉

花音の生い立ちについて

32話 巫女 7 夜明け前 〈side花音〉

夜明け前 一日の中で一番暗い時間だと思う。

昨日はアルと蒼玉宮^{せいぎよくきゅう}を散策して、疲れてしまい早くに休んだ。
よく眠れた感じがしないのは、このベッドの寝心地^{うんぬん}云々ではない。
いいベッドだ。 寝具も、さすが王室御用達の品と賞賛すべき使
い心地のものだ。

理由は…… たぶん、アルとの会話

『今まで召喚で来た女性達は、皆 何かしらの事情を抱えていて、
元の世界で生き辛い人ばかりだったんだ。 だから、カノンもそう
なのかと、思い込んでいた』

頬を、思い切り張られたような気がした。
そうだ。

私には、あの世界で生き辛い事情がある。

召喚されたあの時、
私は、全てを壊してしまいたかった。

自分が逃げられない檻に閉じ込められているようで、
家も家族も、自分の未来でさえ壊してしまつて
知らない場所で、新しい自分になつてみたかった。

いつの間に、役割を背負わされたんだろう……

小学校に入った頃は、父親の創めた会社は軌道に乗り始めた頃で両親とも忙しかったけど、割と楽しかったように思う。

保育園から地元の小学校に上がって

近所の子達と、毎日 公園やら友達の家とかで遊んで成績は二の次、遊びが一番！

実に、一般的かつ庶民的、麗しの子供時代を過ごしていた。これからも、その暮らしが続く予定でいた……

だけど、会社がどんどん大きくなって

母親は社長夫人としての付き合いが増えて

父親も事業が海外進出したりして益々忙しくなって……

一緒にいる時間は、どんどん少なくなった。

いつまでもマンション暮らしではいけないんだと、豪邸に引っ越した。

広すぎる家は、落ち着かなかった。

忙しくて私の世話も出来ないし、掃除も大変だからとお手伝いさんが来るようになった。

お嬢様と呼ばれた。

この頃からだろうか？

両親が、ありのままの私を見てくれなくなったのは。

それぞれの、『自分の娘像』の枠に当てはまる部分しか、見ない様になってしまった。

パーティーに連れて行かれるのは、慣れない豪華さが苦痛だった。

そこで出会う同じ年頃の女の子は、みんな私立の学校に通っていた。

父親が「女の子は私学の方がいいのかも」と言い出して、大喧嘩した。

無理やりの受験勉強なんて嫌だったし、お嬢様とは話しても面白いと感じたことが無かったからだ。

そんなの集まる学校になんか、行きたくなかった。

頑張つて食い下がったけど、いかんせん小学5年生。帝王な父親に圧倒的な力量不足で負けてしまい、中学受験の勉強をさせられた。

しかも、お嬢様学校ばかりだ。

今まで、ものすごく適当に勉強してきたのだ
無理があつた。

否。不可能。

こんな脳みそで合格ラインまで持っていくって、どんだけ、頭いい子なんですか？

凡人の脳ですよ、残念ながら。

母親にも、行きたくないし入れないって言うてはみたけど、理解してもらえなかった。

母親は、才色兼備の完璧お嬢様だ。

家が京都の名家で、それはもう 生粋のお嬢様。

それが、お父さんと恋に落ち、駆け落ちした。

それ以来、1度も実家には帰ってないらしい。

自分を中心に世界が回っている人で、彼女にとって重要なのは、
自分がどう思うか。

人がどう思っているかとか、感じているかなどを、考慮する認識
がそもそも無い。

そんな、母親だから、私がお嬢様らしく振舞えないのも、受験に
全て落ちたのも

謎らしい。（当然なのにつ！）

私に対する愛情は、あると思うけれど 自分の与えたい愛情しか、
持ち合わせていない。

それが私の母親。
おがあさん

父親は

母親の事を愛している。

彼女のこののみ、愛している。 信奉している。

彼の理想の女性像は、妻である彼女。

だから、娘にも母を見習えと言う。

でも、所詮中身が違うのだから、思う様にはならず 最後に飛び

出すセリフは

「もういい。 お前は、黙って++している」だ。

もちろん、黙りもしないし、言われた事もしないけど。

容姿こそ妻似だが、性格が自分にそっくりの娘は頭痛の種らしい。

母親から見れば、頭脳明晰・容姿端麗の素敵な父親も、

私から見れば……絶対君主で独裁者だ。

確かに、創業者としてのカリスマ性があるのは感じている。

帝王オーラっていうか……社員でも信者みたいな人いるし。

でも、押さえつけられるのは我慢できない。

嫌なものは、嫌だ。

そして、更に役目を背負わされる事になった。

入学してすぐに、母親の実家から連絡があつて

「長男一家が事故で亡くなり、三条家を継ぐ人がいなくなってしまった。」

子供を跡取りに就ける」

というもので、諸条件を話し合った結果、三条家へ養女に出された。

住む家はそのままだけど、鈴木花音から三條花音になった。

母親は結婚を反対されたから、家を出たのであって 別に三条家を嫌っている訳ではない。

この機会に、両親と仲直り出来て とても幸せそうだった。

そんな嬉しそうな母親を見て、「お母さん、よかったね」と思う自分がいて、次ぎたくない、とは最後まで言えなかった。

由緒正しき三条家、唯一の直系で跡取り娘。

京都の三条家に連れて行かれた時は

「いやあ。花音ちゃん、何もではらへんねなあ。 まあ、よろしいわ。」

にこにこしといってくれはったら、何とでもなりますやろ」

（訳：まあ、いやだわ。 花音ちゃん、何もお出来にならないのですね。仕方ありませんね。 何もなくていいですから、せめて外面だけは整えておいてくださいね。 後はこちらで対処しますから。）

などと、馬鹿にされた。

その時は、三条家に入ったことを心底後悔したが、後の祭りだ。不出来な私のために、専用の執事兼、教育係が付く事になった。

三条家から派遣された、黒い執事、その名も黒須。

何が黒いかって……

黒髪、黒目、服装も黒づくめもそうなんだけど、雰囲気が……オーラが黒い。 絶対悪いことを、企んでいそうな……できれば近寄り

たくない人種だ。

そして実際、なんでも お見通しで、腹の中で何を考えているのか分からない、やな奴だ……

その頃、私は初恋の真つ最中で、家庭教師の先生が恋人でした。公立中学に行く事の交換条件で家庭教師がついたんだけど、大学生で頭良くて、素敵で優しくて……理想の彼氏。

彼も私の事を愛してくれている。少なくとも、私はそう思ってた。

でも、違った。

企業がらみの策略があつたみたいだけど、金で雇われただけだと本人から聞いた。チヨロかつたらしい。

私としては かなりショックを受けたんだけど、こうなる事も、黒須には分かつていたみたいで

「実際に経験してみないと、分からない事があります。どんな経験も花音様の力に何れはなるでしょう。花音様の価値は何ら傷つくことななく、むしろ、良い勉強をされた分 上がった事でしょう。」

などと宣ふのだ！

しかし、黒須の言葉とは裏腹に三条家の祖父の耳に入るや、問答無用で

名門 聖アグネス女学院高等部に入れられる事が決定した。

聖アグネス女学院は、上流階級のお嬢様のみ入学を許される、全寮制の知られざる有名校で、鈴木家の様な にわか成金は不可。

三条の名前の威光と、莫大な寄付金で入学が決定した。

それと同時に黒須は三条家に戻される事になった。

三条家の跡取り娘に虫が付くのを防がなかった責を負うことになるのだそう。

家庭教師の彼は、行方不明らしい。父親が激怒していたから、今頃は……

3日。

中学の卒業式まで あと、3日。

卒業式が終わったらずぐに、私は拘束こうそくされる。

祖父の命で学院に送られる。

真正正銘のお嬢様として、上品かつ聡明な何処に出しても恥はづかずかしくない三条花音にする様、教育される日々が始まる。

そこには、気を許して笑い合える友達もいない、優美な鳥籠とりかご。

何処どこかへ、逃げだそうか？

ダメだ。他に替わりがない。

両親にも、祖父母にも 三条花音が必要なのだ。

逃げられないのだろうか？

畏おそだらけの、汚い世界から。

私を理解しない人たちの中から。

あと、3日で決めなくては……

黒須の情報によると、学院の警備は厳重で、侵入はおろか脱出も不可能だそう。

「入ったら、出られないと覚悟して下さい」
そう言われた。

そんなのは嫌だと散々言っただけ、じゃあ代わりにコレを
と具体的な目的はない。

だから意見は通らない。 駄々でしかない。 解っている。
でも、嫌なものは嫌なのだ……

逃げないけれど、逃げたい。
望みもしないのに背負わされた役割から……

その時の私は気が付いてなかったけど

私は、私でいられる場所を欲していたのだ。
それも、どうしようもないほどに。

心から笑っていられる場所を……
心の底から信じられる人を。

此処ここには、それがあるのだろうか？
逃げ出した先の、この世界に 私の居場所があるのだろうか？

夜明けまで、あと少し。

私は、一番暗い時間にいる。

33話 巫女 8 後宮にて ｝sideアル

カノンを蒼玉宮に移した次の日

王妃のたつての希望で、カノンを伴って 後宮の夜会に出席せねばならない。

本当は昨日訪れる予定だったが、カノンの体調が優れなかったことで 日延べされたのだ。

出来る事なら、もっと日を置いて 十分カノンを静養させてからにしたかった。

しかし、王妃の催促でそれも叶わず……

（巫女姫の、顔を見せろって事だな）

うんざりしながらも、断ること等出来はしない。
気の重い用向きである。

昼食の時も、つい言葉少なになってしまった僕に、カノンは頼杖をついて

「そんなにイヤな相手なら、行くの止めよう。 巫女も体弱いとか言つとけば？」

依巫の具合を聞かれて、まだ意識が戻っていないと教えたからか、デザートの赤いチェリーを口に含みながら、行儀の悪い態度でカノンが言う。

昨日の王の前での立ち居振る舞いから、彼女の育ちの良さが伺える。 それを、あえて悪ぶっている。

（この子は……また、かわいいことをして……）

昨日もそうだが、カノンはかわいい。

何をして、かわいい。

一昨日の眠^{おとこい}っているカノンは、無防備で表情もあどけなさを残していた。

しかし、軽く触れる体の曲線は16歳だという割には立派で、十分な成長をしているようだ。

朝まで眺めるだけで、手を出さなかった自分を褒^ほめてやりたい。

カノンは素っ気無く、無愛想に振舞おうとしている。何故^{なぜ}そうしようと思っただのか、元からそんな風なのかは まだ不明だが、表情や仕草^{しぐさ}の端々^{はしはし}に感情が漏^もれ出ていて、何を考えているのか分かり易^{やす}い。

それを隠そうとしている所がまた、猛烈にかわいい。

怒^{いら}っていいようが、睨^{にら}みつけようが、どの顔も僕の目には 愛^{いと}おしいカノンとしか映らない。

（もう、この部屋に閉じ込めて、誰にも見せないで独り占めしたい）

しかし、そんな訳にもいかず……

王妃や側室達はまだしも、侍女連中の鋭い視線にカノンを晒^{さら}すことを想像すると、溜息が出てくる。

「行きたくないですって言っ^いてしまいたいけど……言えないんだよね」

苦笑いしか出てこない。

「そんなに、嫌な人達の所へ これから行くの？」
カノンが綺麗な顔をしかめる。

（こらこら。 カノンを怯えさせてどうする！ 自分！）

「気が重いつて言ってもね、王族つて話す時に気を使うし、疲れるからつていうのと

カノンがあんまり可愛くて、みんながいろいろ言つてきそうだなゝつて事くらいなただから！

大丈夫。 カノンは僕の傍に居るだけでいいからね。 何もしなくて、いいから。」

安心させるように言う。

カノンの目が一瞬大きく開かれ、その後、ムツとした顔つきに変わった。

（あれ？ 何か、気に障つた？）

なんだかカノンの目に不穏な火が灯ともっているんだけど……

（今、なんて言つたかな ）

こらこらカノン、三白眼は止めようね。 戻らなくなっちゃうよ？
うん。 何処どこに引つかかった？

「解わかつた。 何も言わない。 何もしない。」

ポイントを特定出来ないまま、カノンは話はもう終わりとはかりに席を立った。

（うわゝ 最悪。 機嫌悪っ！ もう本当に 行くの止めたい……）

夕刻、大神官が供を引き連れて訪れた。

僕は、魔道騎士団の軍服、カノンは巫女の装束を身に付け、共に後宮へと向かう。

後宮へ通じる大扉の前は、ちょっとしたロビーになっていて、後宮へ入る手続きなどの間に利用する者も多かった。

そこにロイスは居た。

偶然を装っているが、どうやら、後宮へカノンを伴う事を聞き付けたようだ。そういえば、ロイスはカノンをまだちゃんとは見ていなかった。召喚の時、仄暗い中^{ほのくら}で見ただけだし、王の謁見にいたのは王太子と評議会の面々、公爵家の当主のみだった。

（ロイスは父親の公爵から、夜会の事を聞きだしたか……）

後宮でのやり取りを思うとうんざりするのに、今 ロイスに関わって面倒事は起こしたくなかった。

しかし、ロイスはカノンに興味深々で、「珍しい黒髪だ」などと、カノンの髪に触れようと手を伸ばした。

制止しようとした その時

パシッ！

ロイスの手が、叩^{たた}かれた。

「汚い手で、触らないで」

嫌悪感も顔^{おもて}に、カノンが冷たく言い放つ。

元から今日のカノンの機嫌は悪かったのだ。気位の高いカノンが、ロイスの無遠慮な行いを許す訳はなかっただろう。

そんなカノンの性格を知るはずのないロイスの顔面が、見る間に怒りでどす黒く変色していく。ロイスは公爵家の嫡男として、皆に傳かたづかれてきた所為か、傲慢ごうまんな男である。巫女姫とはいえ、年端もいかなない少女に無下むげにあしらわれ、ロイスは激昂げきこうして体を震わせた。

「何をする！ この女！」

僕は、詰め寄ろうとするロイスとカノンの間に体を割り込ませると「ロイス。これから王妃殿下の夜会なんだ。悪いけど、また後でね」

即座そくざに、カノンをロイスから引き離す。

王妃との約束を持ち出されては、ロイスも面と向かつては文句を言えずに一瞬押し黙る。

その隙に

「じゃあね」とカノンを庇かばいながら通り過ぎようとした。

ところが、その時

ロイスがカノンの手首を、がしりと掴つかんだ。

「なにをする！」僕が言葉を発する、その前に

ズダン

ロイスは、掴つかんだ手を、その勢いのままカノンに取られ、往いなされて、仰向あおむきにひっくり返されて……

自分の身に何が起こったのか理解出来ないまま、眼を見開き床の上に屍餅しりもちを付いていた。

瞬きする間の出来事に、皆 啞然とした。

不意を衝かれたとはいえ、ロイスも一応 騎士団に属している。鍛錬もそれなりにしているはず。

そのロイスを軽く転がしたカノンは、床の上のロイスに、さも汚らしいという一瞥を向けた後、フィとその顔を大扉の方へ向けると、ロイスが眼に入らないようにか 僕の影に入ってしまった。

激怒の余り、口がまともに聞けないロイスに大神官が

「まあまあ。 巫女様は清純な乙女故、貴殿の所作に驚かれたのでしょう。 気をお鎮め下さりませ」

ホホホと長い白髭を揺らしながら、やんわりと諭し、

お付の神官がロイスを立たせる間に、さつさとカノンを大扉の中に入れてしまった。

ロイスを残したまま大扉が閉まってすぐ

「カノン。 今の凄かったね！ ロイスに何をしたの？」
待ちきれない気持ちでカノンに聞いた。

気分が少し晴れたのか、柔らかい表情を浮かべて

「子供の頃から変態よけに習っている 合気道の技を使ったの」

「アイキドー？」

「武道の一種よ。 相手の勢いを利用して、投げたりする身を守るための体術って言えば解るかな」

ああ、解るよと頂突けば、カノンは そう？と口元を綻ばせた。

そして、僕の目を見つめて

「アルと、さっきのあの男とは、友達なの？ 私が召喚された時にも見かけたんだけど」

探るような口調で尋ねた。

「ああ 友達というか……幼馴染で同級生かな 同い年だから小さい頃から、何かにつけ一緒だったんだ」

ロイス・エツカートは公爵家の嫡男で、彼の受け継ぐエツカート公爵家は、広大な領地を所有し、豊かな経済力を誇っている。王家としても扱いには注意が必要な大貴族だ。

その嫡男と同年の僕には「友好を深め、懐柔^{かいじゅう}し、王家の影響力を高めよ」と命令され、なんとか友達になるようにしてきたのだが

……
わがまま
そほう
我侂^{わがまま}で粗暴なロイスとは性格的に会わないし……
従えるというより、良いように使われている感じ？

でも、カノンの目には ロイスと付き合う僕は、彼と同類に映っていたのだろう。

「不愉快な思いをさせて、ゴメンね。 もうロイスを君に近づけないから」

そう言つと

「ええ。 そうして」

カノンは低い声で答えると、ツンと前を向いたまま、僕の方を向かない。

ちよつとロイスに対する反応が、過剰じゃないかと 思わないこともないが、

僕に接する甘さを含んだ つれない態度と、ロイスへのそれとはまるで別物で

（カノン、僕のこと嫌いじゃないよね？）

ロイスに対する優越感を噛^かみ締^しめて、カノンをエスコートする。

（さあ、気持ちを引き締めよう）

そして僕たちは、後宮へ足を踏み入れた。

34話 巫女 9 夜会 ｝sideアル

後宮の長い廊下を通り、広間に向かう。

巫女姫の到着を聞き付けたのか、いつもより多くの女官とすれ違う。

今日の夜会は、王族と側室、その侍女達だけの内輪のものである。しかし、王の側室は常時8名、後宮に住まう王子は3名、王女2名で、後宮を出て宮を持つ王子はアルを含めて9名いる。王女数が少ないのは、他家に嫁に出しているからだ。これだけの人数に侍女も加わると内輪とはいえ、そこそこの規模である。

夜会の会場となる広間に案内されると、其処そこには既に臣下すでに下った王子やその家族、侍女達が、談笑していた。侍女達の華やかな輪の中心に、栗色の短髪を見つけて驚いた。

最もカノンに会わせたくない人物、王太子がいる。

（なぜだ？ 今日には出席しないと聞いているのに…… しかも広間にいるなんて？）

いつもなら王妃と共に入場する奴が、会場で待つのは珍しいことだ。

謁見の時の奴を思い出し、このまま引き返したい気分になる。

王太子らが僕達に気が付くと、話し声が止み、会場がシンとなる。

カノンの手を取って、中央まで進み、王太子の前にカノンと並び立つ。

後ろには大神官、神官は入り口付近に控えている。

「こちらに王太子殿下がお越しになるとは、存知上げませんでした。遅参致しましたこと、お詫び申し上げます」

遅れた訳でもないが、立場仕方なく、深々と、頭を下げる。

「よい、アルフレッド。用が早く済んだから、勝手に押しかけたのだ。母上にも来るとは言っていない。一昨日は慌しくて巫女姫をよく見れなかったからな」

王太子はカノンに目を遣り、上から下まで舐めるように見廻し

「王太子のヘンリーだ。巫女姫殿には出来る限りの事をして差し上げたい。望みがあれば何なりと、このヘンリーに申し出られよ」
好色そうな笑顔を浮かべ、王太子は毛深い手でカノンの手を取り、分厚い唇をカノンの手の甲に押し付けた。

（カノンに触れるな！！）

情欲のこもった奴の視線に晒すだけでも、カノンが穢されそうなのに、挨拶とはいえカノンを触られるのが不愉快で、殺意を覚える。そんな僕の気持ちを知ってか知らずか

「ありがとうございます。王太子殿下」

カノンは鈴の鳴るような可憐な声で、ヘンリーに答えた。
そして、艶やかに微笑み、膝を軽く折って礼をした。

「お気遣いに感謝致します。でも、アルフレッド様にはとても良くて頂いておりますので、ご心配には及びませんわ」

僕を見上げて、あどけない表情でニコリと笑う。僕に向けられた甘い言葉に、ヘンリーの手が緩んだ隙に、カノンはさっと掴まれていた手を引き抜いた。

それと同時に少し下がり、王太子には見えない位置で、こっそりと手の甲を服に擦り付けているのが目には入った。

顔は未だ、非常ににこやかな愛想の良い笑顔を浮かべたままである。

僕は危うく噴出すところだった。

しかし、その時

王妃の入場が伝えられた。

王太子以外全員が正面の一段高い玉座を向き頭を下げる。

王の側室達が玉座の横の扉から入場して、

王子、王女が続く

最後にでっぷりと肉の付いた体をゆっさりと揺らしながら王妃が入場し玉座の前に立つ。

王妃は薄くなった栗色の頭髮に入れ髪をして大きく膨らませ、蟻の尻の様になった頭に略式の冠を乗せて、壇上から一同を見下す。その姿は長年に渡り後宮に君臨してきた女の驕慢さが垂れ流されていた。

「面を上げよ」

命令し慣れた口調で、王妃が命じる。

背筋をピンと伸ばし、凛と佇むカノンは王妃の前にも関わらず、どこか悠然としていて、後宮の雰囲気吞まれ萎縮する様子など、全く見られなかった。

むしろ、その立ち姿は広間にいる者達の好奇の目に晒されている

ても、超然^{とてんぜん}としていて美しく、輝いて見えた。

王妃は、正面にいる僕とカノンの姿を見つけると

「アルフレッド。こちらへ」

壇上に呼ばれ、カノンと共に上がる。

「王妃殿下。 本日はお招き戴き、恐悦至極^{きょうえつしごく}に存じます。 こちら

はこの度、召喚致しました巫女のカノン・サンジョーにございます」

礼の形を取り、王妃にカノンを紹介する。

「お初にお目にかかります。 花音・三条と申します」

カノンは膝^{ひざ}を軽く曲げて宮廷風の礼をとる。 その滑^{なめ}らかで自然な、洗練された立ち居振る舞いに、王妃は少し目を見開いた。

公爵家の出^でで、気位が高く、下賤^{げせん}の者を嫌う王妃の目にカノンは適^{かな}ったのか、王妃はカノンに微笑みかけながら

「アースリンド国王妃クローディアじゃ。 遠い世界からの客人^{まれびと}として、また巫女姫として歓迎しよう。」

王妃はそう言うと、カノンの背に手を添え

「巫女姫、カノン・サンジョーじゃ。 皆、見知りおくように」

会場中に聞こえるように声を張る。

皆、膝^{ひざ}を折り承服^{しょうぷく}の意を示した。

「音楽を！」

この一言が合図となり、夜会が始まった。

飲み物が配られ、銘銘^{めいめい} 食事を楽しんだり話に花を咲かせたりを

始める。

玉座に腰を下ろして

「中々、可愛らしい娘で良かったではないか。　アルフレッド」

王妃は笑みを浮かべた。

礼を述べようとして、王妃の次の言葉に凍りついた。

「ヘンリーが、巫女がとても可愛らしかったと褒めちぎるので、どのような娘かと思っておったのじゃ。　このように愛らしい姫なら、真欲まじくしくなるのも無理はない」

（今、なんて言った？　この女……！　ヘンリーがカノンを欲しがっているだ？）

頬が引きつるのを感じながら、何も気付いてないように

「私の運命ひとの女が、このように素晴らしい方であって、喜ばしく思います。　よい姫を我が元に迎える事が出来て、まさに僥倖じやうじやうであると存じます」

牽制けんせいをかけておく。

「さて、私達が踊らないと　どなたも始められないようなので、少し失礼させて戴きます」

これ以上、カノンに余計な話を聞かせたくは無い。

王妃にとびきりの作り笑顔で断りを入れると、カノンの手を取りさっさと広間の中央に出る。

1曲カノンと踊った後、他の王族や側室などにカノンを紹介して回り、ようやく一巡し終わった。

食事でも取るうかと広間の端の席へと足を向けると、傍迷惑はたな程

のきつい香水の香りと共に、耳障りな声が掛けられた。

うんざりとした気持ちで振り向くと

「アルフレッド殿下。この度は召喚の御成功おめでとございます」

人を食べてきたかのように赤い口唇くちびるから、媚こびを含んだ声色こわいろが流れた。

そこに挑むような顔つきで立っていたのは、バーネット伯爵家息女、アナベラ。

確か、側室カトリーナ妃の侍女をしている。

ブロンドの髪を高く結い上げ、オレンジ色のドレスの胸元は大きく開き、豊かな胸の膨らみをこれ見よがしに見せつけている。

その格好は、お世辞にも上品とは言いがたい。

以前から度々誘いをかけてくるこの勝気な娘、顔立ちは別に悪くない。むしろかなり美人の類に入るし、スタイルもいい。しかし、何かにつけて上昇志向が強過ぎる。王子や有力貴族の子弟の妻の座を狙っているのがあからさまで寒気がする。

いくら見た目が良くても、地位や権力と寝るような女と、結婚する気には僕はなれない。

そして、そのアナベラの後ろには彼女の仲間のような侍女達が数人こちらに向けて含みのある笑顔で立っていた。

「ありがとう。アナベラ嬢」

早く立ち去って欲しいと、願いを込めて最小限の言葉にする。

「殿下、こちらが巫女姫様？ まあ、なんて可愛らしい姫様だこ

と」

アナベラの青い目が細められた。

そして、カノンに向き直ると

「巫女姫様。お初にお目に掛かります、バーネット伯爵息女アナベラにございます。慣れない所で大変でございましょう？ 暫くのご辛抱でございます。戦が収まれば、すぐにでも元の世界に帰れますから……」

アナベラの、いかにも『同情しているんです』という表情と、たたみ畳み掛けるような口ぶりに、カノンは何も言わず 驚いたような顔をしている。

気性の激しいアナベラならば、何かしらの行動を起こすだろうと覚悟はしていたが……

（これはまた、直球で きたものだな）

王妃が客人であると宣言した手前、直接的な嫌がらせも出来ずこの程度の嫌味になったんだろうけど

カノンを不快にさせる者を放置する気も無い。

アナベラの後ろで「巫女だから、アルフレッド王子も仕方ないのよ」「用が済むまでの辛抱よ、アナベラ」だとか 取り巻きが申し合わせたかのような台詞をセリフヒソヒソとわざ煩い。カノンに聞こえるように態わざと言っている。

（頭の悪い女には、はっきり言わないと分からないか……）

「アナベラ。君は 勘違いをしているね。 戦はおこらないし、私はカノンを帰さないよ」

僕の言葉に、アナベラ達がぱつとこっちを向く。

そんな彼女達に

「カノンは愛する、大切な、運命の女ひとなのに、私が手放す訳ないだろう？」

それに、私達はもう一緒に住んでるしね。カノンの可愛い寝顔を見るのが 今の私の楽しみなんだよ」

カノンの手を握り、手のひらに口付けをする。

女達の目は、つり上がった。

カノンの指に僕の指を絡めて握り締め、頬に寄せて

「君達にも、早く運命の男ひとが見つかるように祈っているよ」

笑顔で彼女達に見せ付ける。 啞然としているアナベラ達に向かって さらに畳み掛ける。

「ああ、そうそう。 私の大切なカノンが 誰かに傷つけられたら…… たとえそれが言葉によるものであっても、私の報復を容赦するつもりは無いから。 草の根を分けてでも探し出して、息の根を止めないと気が済まないだろうね。 君達も、そんな事が起こらないように願っていてくれる？」

そう言うてにつこり笑った僕を見て、アナベラ達は顔を真っ青にして頷き頭を垂れた。 それをそのまま放置して、くるりと踵かかとを返すと 僕はカノンを連れてメインテーブルに程近い 壁際の席へ付いた。

ワインと甘い食前酒が出され、軽い食事がすぐに運ばれてきた。

カノンは杏あんずの香りのする黄金色の食前酒を一口含んで

「アル。 さっきの女はアルの愛人？ 元恋人？ その他大勢？」

大きく黒い瞳で僕を覗き込みながら聞いてきた。全く怒っている風でもなく、むしろ興味津々といったところか……

「とんでもない。どこからそんな考えが出てくるの？ 何の関係もない、ただの顔見知りだよ」

全面的に、関係を否定しておく。

「ふうん。違うんだ。ずいぶん綺麗な人だったしアルに気があるような口ぶりだから、そうかと思った」

銀杯を揺らして香りを楽しみながら、カノンがニヤリと笑った。そして

「じゃあ、これから修羅場が始まるのかしら？」

心底楽しそうに 広間をくるりと見回して、期待のこもった熱い目で僕を見つめる。

「ええ〜っと。残念ながら、今で終わりだと思うよ？」

「ええ！ 無いの？ 修羅場が？ 『この、泥棒猫！』とか、言われないの？ 赤ワインを頭の上から注がれたりして、『綺麗な色に染めてあげようと思ったのに、黒くて汚いままの髪なのね』とかも？」

信じられないとも言いたげな顔だ。

「そんな事を期待していたの……？」

頭痛がしてきた。

「だって……朝からずっと溜息ばかりついているから、アルにとって よほど都合の悪い事が待ち受けているのかと思って。ほら、定番でしょ？ アルは王子の中でもイケてる方だし、女の子が放つて置く訳ないだろうと……」

「ここにいる女性とは、カノンの想像しているような関係を持ったことは一度もないよ。だから、カノンが期待している展開は、いくら待ってても訪れないからね。

そもそも、さっき王妃殿下がカノンの事を客人って紹介してたでしょ？ 王妃の客に喧嘩けんかを売る人間は此処ここに居れないよ…… アナベラの言動も大概失礼たいがいだけど、あれが限度かな」

（僕は許さないけどね）

「ふん。残念。つまんない」

カノンは口を尖とがらせて そう言つと もう女達に興味を無くしたようで、料理に視線を落とした。

（修羅場が定番って……カノンのいた世界はどんな所なんだろう？）

カノンの頭の中が読めない僕は、こらからのカノンとの生活に一抹いちまつの不安を覚えた。

35話 巫女 10 春の夜 〱 sideアル

その後、戦争後も影響力を持つであろう巫女に 自分を売り込もうとする輩やからに囲まれて、蒼玉宮せいぎよくきゅうに帰れりついたのは真夜中近くだった。

カノンは居室へ戻った時から無表情になって、三人掛けのソファに深く腰をかけると、はあゝと息を吐きながら上向きに倒れ込んだ。

「アルゝ 暑い。 窓、開けてゝ」

伸びをしながらカノンが大きい声を出す。

「はい、はい」

バルコニーに続く窓を開けると、ひんやりとした夜気と共に 仄ほのかにマリニアの香りがした。

庭のマリニアの花が満開だった。 風が、その香りを運んだのだらう。

カノンの国のサクラに似ていると、昨日聞いた。

カノンの頭の上にあるクッションを除けて ソファに座りながら「カノン、大丈夫？ 疲れた？」

無造作に投げ出された 艶やかな黒髪を纏まとめて 頭を撫なでる。

会場では気付かなかったけど、頬あかが朱く染まっている。

僕が目を放した隙に、勧められるまま 呑んだのだろう。部屋
に帰って、酔いが廻ったか？

カノンは撫でられているのが気持ちいいのか、目を閉じて避ける
様子は無く

「疲れた。 顔が、すごく疲れた。 もう笑えない」
頬を両手でマッサージしながら、仏頂面で言った。

確かに、今日のカノンの笑顔は素晴らしかった。 作り笑顔と分
かっている僕でさえ、見惚れる完璧さだった。

「お疲れ様。 頑張ってくれて、ありがとう。 これで暫くは静か
に過ごせそうだよ」

（嫌な奴に、目を付けられてしまったけど……）

まあ、僕さえしっかりしていれば、大丈夫だ。

カノン程は疲れてないんだろうけど、今日は僕も疲れた。

ミルクのたつぷり入った鎮静効果の高いマサラ茶を飲みながら、
指でカノンの長い髪を梳く。

ひんやりとした滑らかな手触りは、とても気持ち良くて 何故か
落ち着く。

頬をさすりながら、ぼんやりと僕にもたれかかっていたカノンが
おもむろに

「王子って、思ってたより大変だね」
ぼそりと呟いた。

「ん？ そうかな？」

「そつだよ。言葉遣いや作法もいちいち面倒くさいし……」

アルが　すぐく気を使つてたのが分かったもの。

さっきの夜会でも、私の分らない駆け引きが、山ほどあった気がするし……

王子って、もっとお気楽なものだと思つてた」

「ああ。召喚する前は、気楽だったよ。今まで僕は　割と無視される方が多かったし……」

僕が召喚者になつて、王家でのポジションが変わったから、動きたい連中もいるんだよ。

自分を売り込みたかつたんだろうね」

「割と無視つて、なによ？」

カノン　は　むくりと少し起き上がつて、僕を振り返り　まじまじと顔を見て聞いた。

「うーん。王子つて言つてもね、母親の身分も低くて、後ろ盾の無い6番手なんて　注目に値しないからね。先代の王にも子供は沢山いたし、今の王にも男女合わせて19人子供がある。この国には王族なんて、掃いて捨てる程居るんだ。だから、後ろ盾の無い者は　王家の中では軽くあしらわれてしまふんだ。利用価値の無い者は、存在しないのと同じつて事だね」

「王様は、何してるの？　自分の子供でしょ？」

語気も荒く、カノンがむくれる。

「僕の母は側室だったんだけど、僕を産んだ後　亡くなつてね。

国王は僕に特別な愛情は持つてないと思う。まあ、守役と乳母を

付けて後宮に住まわせて、教育なんかはしっかりしてくれたから、父親の義務は果たしているんじゃない？ ロイスと同年だから、学友としての役割が出来たお陰で 生き残れたのは、幸運だったと思うけど」

「……たいへん、だっただね」

暫ししばの沈黙の後、カノンが珍しく口ごもる。

「病気で母親を失う子供は沢山いるよ…… 僕だけが特別じゃないから」

微笑む僕に

「そうだとしてもっ！ アルは、一人で頑張ってきたんでしょ？」
びっくりするほど真剣な眼差しで、カノンに詰め寄られて
なぜ、彼女がこんなに熱くなっているのか理解出来ずに戸惑う。

（どうしたの？ 何かおかしいよ？カノン）

潤む瞳で僕を見つめていたと思ったら、急に カノンはソファの上に ぺたりと座り込み 俯うつむきがちに口を開いた。

「私ね、ずっと自分の家が嫌だったの。 自分の役割から逃げたかった」

ポツリ、ポツリと言葉をこぼす。

「でも、今日 夜会に行つてこの国の王族達を見たら、自分は両親や周りの人たちに守られていたんだなって思った」

「アルは、あの人たちの中でずっと生きてきたんでしょ？」

長い髪が顔に掛かり 陰になっている所^{せい}為で、カノンの表情は見えないが、声がかすれている。

「小さい頃は滅多に会わなかったけど、まあ、後宮で育ったからね」
僕が答えると

「えらかったね……」

カノンはおもむろに ソファの上に膝立ちになり 片手を伸ばして、優しく頭を撫で始めた。

黒い瞳が濡れて 明かりを反射してキラキラと光っている。

頭を撫でられるなど、幼少の頃に乳母からされて以来である。

どう反応していいのか戸惑い、動けずにいると

カノンは、まるで小さい子供にする様に、静かにそっと優しく頭を抱き寄せて

「一人でえらかったね。 頑張ったね」
と僕をキュツと抱きしめた。

トクン・トクン・トクン

カノンの胸から規則正しい鼓動の音がする。

胸の柔らかさと、カノンの甘い香り

抱きしめられた腕の細さと、頭を撫でる手の温かさ。

それらが全て合わさって、瞬時に僕の胸の奥に 温かい何かが注ぎ込まれた。

しかし、カラカラに干上がった、存在すらも忘れていた その場所
は

カノンから注がれるそれを 砂漠に落ちた水のように 一瞬の内に

沁^しみ込ませた。

カノンはどういっつもりかは分からなかったけど、
そうされているのは、ひどく心地の良いものだった。

そして、カノンは僕を抱きしめて、

抱きしめて、

抱きしめて

……

「……………」。

「カノン？」

返事が無い。

「カノン。」
もう一度呼ぶ。

「…………ぐー…………」

(寢息？ 眠ってる？)

耳を澄ます。

やっぱり

「……………すー…………」

首に巻きついた細い腕を、そつと外し
ぐらつく頭を片手で支えながら、ソファに横たえる。

「この状況で眠るか？ 普通」

無邪気な寝顔を無防備に晒す この困った姫巫女様に

「まいったな…… この酔っ払いめ……」
力なく 悪態をつく。

初めて会った時、

真っ直ぐに僕を見たカノンの眼差しに心惹かれた。

それは僕が王子とわかってても変わる事はなく、媚を含まない澄んだ瞳だった。

ただ僕そのものの本質を見際めようとするかのような、曇りの無い目をしていた。

僕は、それが とてつもなく嬉しかった。

そんな風に見てもらえたのは、初めてだから……

そして、今また一つ。

自分でも気付かなかった部分が、カノンを求めている。

一度味わった蜜は 忘れることなど出来ないものだ。

もっと。もっと と求めてしまいそうで怖い。

カノンの全てが欲しい。

心まで手に入れたいと こんなに思ったことは無い。

カノンといると 心が満たされる。

まさに神からの贈り物。

うっかり傷つけて壊してしまわないように、

他の誰にも奪われないように

気を付けなければ……

「愛している」

安らかな寝顔のカノンに ささやく。

「絶対に、幸せにするから。 僕の傍にいて欲しい」
言葉に出して、自分を縛る。

いつの日か、この言葉を告げた時 カノンは肯うなずいてくれたらいい。

その日が来る事を 願わずにられない。

ともかく、明日からの毎日を大切にしようと思う。

カノンと出会って、まだ4日だけど

彼女といると、今までとは 全く違う日々が待っていそうで……

『僕の世界が変わっていく』
そんな予感に、胸が高鳴る。

甘くて、なんだか切なくなる

花の香りに包まれた 春の夜だった。

35話 巫女 10 春の夜 〈sideアル（後書き）〉

第1章が終わりました。

思ってもいなかった長さに びっくりしています。

プロローグ的な人物紹介文に お付き合い下さいました皆様、
ありがとうございます。

2章から、ぽつぽつ話が始まります。

すみません。

ぽつぽつです。

これからも お付き合い頂けると非常に嬉しいです。

1話 秘密のクスリ 〱 side 雪羽

「おはようございますーす。 ザンバルデアおしいちゃんのクスリをいただききにまいりましたあ」

今日も元気に 受付の女の人へ頭を下げて 挨拶をする。
何事も、挨拶が基本だつて面接の時 社長が言つてたからね。

「ユキハちゃん、おはよう。 今日も元気ねえー オバさんまで元気になるわー。 薬、多分もう出来てるから サリエス様のお部屋にどうぞー」

笑顔で通してくれる。

受付の人とも顔見知りになつて、チェックも無しに目的の部屋へ向かう。

療法院の奥にあるサリエス先生の部屋に行くには、セキュリティチェックみたいなのをするんだけど、もうしなくて いいのかな？

魔道師ザンバルデアの元に来て10日が経つた。

初めて会つた時に、なんて呼べばいいのか聞くと

「お爺ちゃん、で良いではないか？」と本人が言つたので、お爺ちゃんと呼ばせてもらっている。

大体の人は老師って呼んでいるのに……？

理由を聞くと

よりまし
依巫で なくなつたあたしが目立たないように生活する為に、一般にはザンバルデアの古くからの知人の孫という事で通すらしい。
さらに

『とある事情で 辺境の山奥からザンバルデアを頼りに一人出て

きて、雑用などをしながら、一般常識を学ぶことになった。

人里離れて暮らしていたので、世間知らずの常識無し。

独特の言葉を使う地方から来たので、公用語は片言しか話せない。

□

なんて設定が付いているんだそうな。

うさんくさい話だな〜と思うんだけど、

ザンバルデアの弟子は出世するという説がまかり通っていて、弟子希望の人間が後を絶たないそうだ。ちなみに、ラズモント執務長官も女官長のライアさんもシードも弟子なんだって。

で、その人達の妬みをかわすためにも 弟子だとは絶対思われない形にしたんだと シードが教えてくれた。

その代わりに、ザンバルデアをお爺ちゃんと呼ぶあたしを見た人達は、あたしがザンバルデアの隠し孫？だと思ったみたいだけど……

そんなザンバルデアは スゴク偉い人なんだろうに、あたしの前では優しいお爺ちゃんだ。

だから、あたしもお爺ちゃんの手助けになればいいなと 出来る事をやらせてもらっている。

それで毎朝、療法院のサリエス先生の所に、薬を受け取りに来る事が あたしの日課になった。

お爺ちゃんは 最近具合が良くないそうで、薬を飲んでいる。

保存がきかない薬なので、毎朝決まった時間に あたしが受け取りに行くのだ。

コンコンコン！

「しつれい いたしま〜す。 サリエスせんせい。 雪羽です。

クスリをいただききに まいりましたあ」

お爺ちゃんに教わった 決まり文句を言う。

「入りなさい」

いつもと同じ中性的な声で、いつもと同じ返事があったので、そうとドアを開ける。

サリエス先生の部屋はメモ紙だらけで、そつと動かないと壁に貼られたメモ類が飛ぶ。

何を書いてあるのか 私にはさっぱり解らないが、式みたいなことや 図やら記号やらが書き殴られた感じだ。

理解の出来ない物を、元通りにする事など不可能なので あたしは散らかさないよう 静かゝに動くようにしている。

いつもの通り、デスクの脇の丸椅子に腰掛けて、先生が薬を渡してくれるのを待つ。

先生は隣にある 調剤室兼実験室で用意をしているみたい。
暇なので、部屋をキョロキョロと見廻す。

デスクの上に写真立て発見！

中の人物は動くのか？と期待して覗き込んだけど、残念。 普通の写真だった……

サリエス先生と…… 知ってる人が写っている。 シードの上司の偉い人だ！

しかも、2人とも笑ってる！ ラズモント長官だったっけ？ 笑うと、こんな顔なんだねゝ

それにしても、サリエス先生を初めて見た時はびっくりしたなあゝ
水色の長い髪の毛で、アイスブルーの瞳なんて アニメの中で見えたことないよ！

しかも、女の人？　つてくらい華奢きゃしゃで綺麗きれいだし。

思わずエルフですか？　つて聞くとところだった。　耳は尖とがってない

し人間みたいだけど……

言葉が少ないところが　また　人間離れしているんだけどなあ

などと、物思いに耽ふけっていると

「待たせたね。　老師の具合はどう？　少しは　良くなった？」

防護用の眼鏡を掛けたままで先生が出てきた。

今日も、不機嫌そうですね。　そして、髪の毛　ぼさぼさになってますよ

しかも、前髪が右目ふさいじゃってるじゃないですか！　見えてないでしょ？

綺麗な顔が台無しですよ。

なんて

余計な事を言ったら　つまみ出されそうなので　言えないけど……

今日は伝言を頼まれたから、忘れないうちに言っておこう。

「はいー。　良くなったので、止めていいかと聞いてこいです。

」
伝わったか？

聞き取りは随分出来るようになったんだけど、話すのが上手く出
来ないんだよね。

「ああ。　ダメ、つて言つといて。　歳なんだから体力落ちてて
当たり前だし、休めつて言つても国の事で忙しいんだから　休まな
いだろうし、薬飲んで働けつてね。

解る？

お爺ちゃん、クスリ、飲む。」

先生は氷河の水溜りみたいな瞳で、じつとあたしの目を見つめながら ゆっくりと区切りながら発音してくれた。

無愛想で、そっけないけど仕事はきちんとする人なんだろうな。異世界の小娘にもわかるように、毎回簡単な単語を使ってくれる。

「はいー。 お爺ちゃん、クスリ、飲んで働く。 ですね」
ちゃんと言えてるよね？

発音は苦手だ。

あれれ？

眉間に皺寄せて…… メモ書いて袋に貼ってる。
信用ないなあ。

ん？

それに もう1つ袋がある？
薬、増えるのかな？

「これは、ユキハのクスリだ。 夕食後に3粒飲むように。 夕飯、後、3こ。 解る？」

袋を渡された。

「何の、クスリですか？」

あたし、どこも悪くないんですけど？

「成長促進剤だ。 背、伸びる、クスリ」
こころもち、上機嫌っぽく言われた。

（ちょっと待って。 背が伸びる薬って、今 言ったよね？）

「そんなクスリ、あるのですかー！」

（すごい！ さすが異世界！ くれるの？ ちょっと！ あたしラッキーじゃない？）

「まあね。 ユキハが初めてライアに連れられて来た時、『15歳だから、背はもう伸びないかも。 背が伸びる薬があったらいいな』って言うてたろ？」

（わあ。 それで調合してくれたの？ この人、いい人だあ）

「せんせー！ ありがとうございます！」

（ラッキー！ 嬉しい！）

「あ。 でも、お金ないです」

（こんな高価そうな薬、払えないよ）

召喚の時、治療してくれたって聞いたから、分かってくれるとは思っただけど？

「金のことなら、心配なくていい。 好きな事の為に使う金は惜しまない主義だから」
頭をわしわしされた。

「あああ……ありがとうございますー」
（うわわわ ヤメテ下さい！ 薬はとも ありがたいですけど
頭がぐしゃぐしゃになったじゃないですか）

学校の屋上でザクザクに切られた髪が可哀想だ、女の子は可愛くなさいと、ライアさんは花の飾りの付いたピンを沢山くれた。
そのピンで前髪とか留めてたのにー！ 時間掛かったのにー！

しかも、後半が早口で 何言ってるのか聞き取れなかったし……

結局、散々頭を引つ掻き回されて、髪の毛がグシャグシャになつてから 手を離してもらえた。

むっとした顔を上げると、先生の男女な美人顔が 間近にあった。

「薬の事、他の人には ナイショだからね。 お爺ちゃんにも言っちゃダメだよ」

先生、ちよつと 顔が近いです。

眉毛も、まつげも水色ですね。 お人形さんみたい。

それはそうと、秘密にしろとは あやしいなあ。

「どして ないしょ ですか？」

隠す意味が どこにある？

「これでも私は療法師としては人気でね。 診察も調薬も予約で

一杯なんだよ。 だから、勝手に薬を作ったらダメなんだよ」

ちよつと困つたような顔で 先生が説明してくれる。

なるほど。

割り込みがバレたら、まずいんですね？

「わかりました。 いいません」

恩を仇では 返せません。

「いい子だ」

先生が 薄く微笑む。

デスクの電話みたいなことから、受付の人の声がして、何やら話が
始まった。

本当に忙しい人みたいだ。

邪魔をしては申し訳ないので

「せんせー。 ありがとうございますあ」

と小声で言うと、先生が軽く手を上げたので

薬の袋 2つを持って そうつと部屋を後にした。

雪羽がそろりと部屋を出て行った後、サリエス・ファラーは待た
せていた仕事を手早く片付け、お気に入りの椅子に深く腰掛けて
先ほどの雪羽とのやり取りを思い出していた。

「ふふふ…… 背を伸ばす薬なんて、この世界にも有る訳ないだ
ろ？」

薬で伸ばすなんて、今まで考えた事もなかったからな。

実に、新鮮だ。 面白い。

取り合えず 3粒にしてみたけど、さて どれだけの効果が現れ
るか……

結果が楽しみだな」

そう呟くと、ニヤリと笑みを浮かべた。

2話 寄り道 ｛side雪羽

いつもなら療法院から、すぐに お爺ちゃんの部屋のある居住棟へ行くんだけど、サリエス先生から『背伸び薬』を内緒でもらったので、一度 自分の部屋に寄って 置いて来ようと、女官の居住棟へ向かって歩いている。

ここの世界の人なら、多少の差はあっても魔力を持っているので術場からエレベーターみたいにビューンと移動できるところを、あたしは ひたすら徒歩で……

万歩計で計ったら、きつと何万歩も 毎日歩いているんじゃないかな？

同室の女官見習いのミリにも見つからないように、そつと机の中に薬を隠し お爺ちゃんの部屋に急ぐ。

ゼイゼイゼイ

あ もお 息 切れた……

喉も カラカラだよ。

もうちょっとで お爺ちゃんの部屋って所でノロノロと歩いていると

「ユキハちゃん。具合悪そうだけど、どうかしました？」
のんびりとした声が掛けられた。

声の方を見ると、ドンちゃん ことドン・ケアリーが立っていた。

「ドンちゃん！ ちょっと いそいだ からです。 心配しないで
す。 ドンちゃんは 仕事ですか？」

距離を歩いて、熱くなった顔を 手の平で扇^{あお}ぎながら、息を整え
る。

「今から、老師の所へ 書類を届けに行くんですが…… ちょっと、
いいですか？」

そう言っでドンちゃんは あたしの手を掴むと、ぐいぐい引ッ張
ッて行き 喫茶室みたいな場所へ連れて入った。

そして

「お姉さん。いつもの、ムルカのジュース、シロップ大盛りで
お願いします」

慣れた感じで注文する。

あたしを窓際の席に座らせると、ドンちゃんも向かいに座った。

「あの…… ドンちゃん？」

向かいの席でニコニコと笑いながら、額から吹き出る汗を拭く男、
ドン・ケアリーは 魔道府の一般職員で事務的な仕事をしているら
しい。

ほぼ毎日、お爺ちゃんへ書類などを届けにやって来る、メッセン
ジャーみたいな人だ。

あたしが感じた ドンちゃんの印象は、ズバリ 『クマのぬいぐ
るみ』だ。

丸くて 大きな体。 うす茶色の髪に つぶらな茶色の目。
のんびりとした じゃべり方と 愛嬌たっぷりの表情。

おいしいものが大好きで、ケーキとか持ってきてくれては 自分
もしっかり食べて帰る 面白い人である。

で、そのドンちゃんにお店に引ッ張り込まれて、びっくりしてい

る。

「おっ！ ユキハちゃん。 来た来た。 コレ飲んで、元気出して下さいよ。 女の子は疲れた顔してちゃ ダメなんですからね」
と、ウェイトレスのお姉さんが持ってきた、赤いジュースにシロップをどば どば入れて、あたしに差し出した。

（うわぁ。 すごく甘そう……）

ドンちゃんは、ストローでかき回せてゼスチャーをしている。
透明なシロップが下に溜まって2層になったジュースを、ストローでかき混ぜて、恐る恐る口をつける。

「……おいしー！」

酸味と甘みが丁度いいバランスで、爽やかな果物の風味が口に広がる。

予想以上に美味しくて、思わず疲れも吹き飛んで 笑顔になる。

「疲労回復には ムルカが1番なんですよ。 あ。 ワタシの来ましたよ。 お姉さんありがとうございます」

ドンちゃんは、ウェイトレスのお姉さんから ソレを丁寧に取り、スプーンですくってパクリと食べ始めた。

「ドンちゃん…… まだ、朝 ですよ？」

ソレは パフェでした。 呼び方は違うけど、どう見てもパフェ。 しかも大盛り。

目の前で、大盛りパフェを高速で平らげていくドンちゃんを、あたしは 信じられない気持ちで見つめる。

「ちょっとした、栄養補給です」

見る間にパフェが消えていくので あたしも「もったいないなあ」と思いながらもジュースを一気飲みする。

ドンちゃんはあるという間にパフェをたいたらげると、口元を軽く拭いて 何事も無かったかのように「さあ、仕事ですよ」とあっけにとられる あたしを置いて会計を済ませてしまった。

慌てて 「ごちそうさまでした」と御礼をいうと ドンちゃんは「どういたしまして。 また付き合って下さいね」と朗らかに笑った。

そのまま2人で お爺ちゃんの部屋に着くとシードが来ていた。朝に来るなんて、珍しい。

お爺ちゃんに何か用事でも あったんだろうか？

険しい顔をして、こっちを見ている。

「お爺ちゃん。 ただいまー。 遅くなりまして ごめんなさいい。シード、おはよー」

シードにも声を掛けたけど、機嫌が悪そうだ。 これまた、珍しい。

刺激しない様に、スーっとキッチンへ抜けようとする

「ユキハ。 随分、時間が掛かったね？ 今、探しに行こうとしていたんだよ」

進路に立たれて、シードに言われた。

はあゝ まずい。 やっぱ、直接来れば良かったかな……

「あ ごめんなさい……」

背伸び薬の事を隠して、どう説明したら誤魔化せるかと、頭をフ

ル回転させていると

「ワタシのせいで、ユキ八さんに時間を取らせてしまいました。申し訳ございません」

ドンちゃんが あたしを かばうように頭を下げた。

シードは そこに誰かがいる事を 認識していなかったように、初めてドンちゃんに 目を向けた。

「君は？」

氷のように冷ややかな声。

（シード、怒ってる？ 顔が、怖いよう！）

「魔道府事務局三課のドン・ケアリーと申します。」

直立でドンちゃんが答える。

ドンちゃんが、真面目だあ！

でも、ドンちゃん。

汗、噴いてるよ！ 玉になってるよ！

暑いのか？ そんな訳ないか……

シードからの 無言の圧力で？

（ひい…… 空気が、ピリピリするよう……）

その緊張した空気を解いてくれたのは、お爺ちゃんのゆるい声だった。

「ユキ八はドンと一緒にやったか。いつものドンの道草に 付き合っておったというところじゃろ？」

ほほほ、と笑いながら お爺ちゃんが出てきた。

「道草？ 仕事中に？」

シードの眉がつり上がる。

仕事に関して、シードは ちゃんとしてるっぽい からなあ……
バリバリ仕事をこなします、できる男ですって感じたもんな。
ドンちゃんの、のんびり・お気楽スタンスは 理解も共感も出来
ないだろうなあゝ

でも、お爺ちゃんはドンちゃんを気に入っているみたいで

「栄養補給じやの」

茶目っ気たつぷりに そう言つと

「書類を貰^{もら}おうか。 託^{たく}けるのも 有^あるんじや」

と、ドンちゃんを机のある奥の部屋まで すいっと連れて行つて
しまった。

そして、奥の部屋から声だけで

「シーワールド。 お前も 気を付けて行きなさい」
見送るような事を言った。

3話 謎の抱擁 ｛side雪羽

「シード。どこか、いくの？」

ドンちゃんに まだ、何か言いたそうだったシードに聞く。

シードが微妙な表情のまま

「仕事で国外に出るんだ。 半月位は来れないから ユキハの顔を見ておこうと思って来たんだけど……」

シードの顔が曇る。

半月…… ずいぶん長い出張？

準備とか 忙しいだろうに、遅くなって 悪いことした。

「いつ、出かけますか？」

出発は、いつなんだろう？

戦争が始まりそうだからって あたしが召喚されたのに……

ここ以外の場所でも しかも外国なんて、想像出来ないけど 危なくないのかな？

「今日。急に決まって 今から出る。 もう、行かなくちゃ……」

溜息がこぼれそうに、シードが言う。

（突然、長期出張とかが入っちゃう仕事なんだ。 執務室ってすごい大変なところだなあ）

「シードに会えない、さびしいです」

半月も会えないの 初めてだね……

仕事だから、仕方無いんだけどね…… 心細いな

シードは忙しい。

みんなの話から、それは分かった。

でも、3日と置かずに訪ね来ては いろいろ話したりしていく。

あたしの事を気にかけてくれてるって分かって すごく、嬉しい。

召喚者の責任ってやつ？

実家に来るようになってくれたり（弟さんの結婚で無理になったけど）、ここで暮らしやすいように心を配ってくれたり シードは責任感の強い人なんだな。 きっと。

だから、おつかいの帰りが遅くなったのも 心配してくれて……
仕事で海外に行く人に、心配かけて ダメだな あたし。

凹んだ あたしの頭に手を置いて

「寂しく思ってくれるの？ ユキハ」

シードが少しかがんで あたしの顔をのぞいた。

う。

シード。

顔が近い。

ドキドキするから、少し離れて。

自分が かつこいって自覚ない？

「うん。」

（寂しいです）

首をすくめて コクコクと うなづく。

うすいオリーブグリーンの瞳が、フツと和らぐ。

そんな、優しい目で見られるの 慣れてなくて、困る。

でも、さっきのサリエス先生も、話すときの距離が やたら近かったけど、ドキドキしなかったのはなんでだろう？

綺麗過ぎて、作り物っぽいから？

シードに見つめられると、逃げ出したくなるのは なぜだろう？

頭を撫でていたシードが、ふと

「ユキハ、今日は髪の毛を 留めてないんだね？」
不思議そうに聞く。

「留めてたんですが もう、聞いてください。
サリエスせんせーに むちゃくちゃされて、ピンとれましたー」
ホント、迷惑な人ですよなって……何？
どうして、固まってる？

「サリエスが？」
シードが、信じられないような目で見てるけど、何？

「こうー ぐしゃぐしゃ に 触られました。 変な人でーす」
（変わった人ですよ。 いい人だけど）
へらって笑うと、むっとした顔になって

ぐしゃぐしゃぐしゃぐしゃ……

「ふわふわふわっ！」
思いつきり、頭をかき回された。

先生は、表面を撫でただけなのに、今度は 髪の毛の中までシードの長い指を突っ込まれて

「んくう……」

シャンプーするみたいに、くまなく わしわしされて

(ぞわぞわ する) ヤメてええ)

こそばいやら、寒気がするやらで 涙が出てくる。

鳥肌が立って、頭がクラッときた。

髪の毛が、これでもかかっていうほど ぐしゃぐしゃになった頃。

ぞわぞわするあまり、真っ赤にのぼせて思考が停止した あたしの姿に気が済んだのか

シードは、ようやく手を放して 毛羽立った あたしの髪を手櫛で整えた。

そして

「もう、誰にも触らせちゃ ダメだよ？」

と、満足そうに にんまり笑って言った。

(好きで触らせた訳じゃないよっ！)

ギリッと睨みつける。

身長が違いすぎて、上目遣いになっちゃうのが悔しい！

そんな あたしをみたシードは、急にフニャンと溶けた様な顔になっ
て

頭を両手で挟まれたと思ったら、おでこを あたしの頭にくっ
けた。

「ユキハ、解った？」

やけに熱っぽい声が 降ってきた。

.....。

えーと……

えーと えーと

この状況を、どう受け止めたら いいのでしょうか？

なんだか……

なんだか……

これは

ものすごく、恥ずかしい気がするんですけど……

もうそろそろ、放してくれたら 嬉しいんだけどな

両手でシールドの胸の辺りを、ぐいーっと押してみた。

うっ。

動かない。

さらに力いっぱい押してみる。

うわ ん。

やっぱり、動く気配もない

あっ！

動かない上に、頭 両腕の中に 抱きこまれた

がっちり、ホールドされちゃったあ

ダメじゃん。 あたし。

じたばたと もがいてみるも、ビクともせず……

「ユキハ。 返事は？」

頭上から聞こえる低めの声と、シードがつけている香水の 甘く
スパイシーな大人の香りに

クラクラする

理由も分からず 熱くなる。

「ううう。 わかったー」

「わかった から、はなしてー」

シードの吐く息もわかってしまう距離に
慣れない あたしは もう泣きそうだ。

「いい子で、お留守番してて」

シードはそう言うのと、頭にチュってキスを一つ落として 放して
くれた。

「行ってきます」

優しく告げるシードに

もう、びっくりし通しで ろくな反応も出来なくなった あたしは

「いつてらっしゃい」
と とうにか言って送り出せたけど、きつと 耳まで真っ赤だっ
たはず。

シードの後姿を見送りながら、どうしてこんな事になってしまっ
たのか考える。

サリエス先生の話になってからが、おかしかった……

シードはサリエス先生が 嫌いとか？
あたしの 言葉が悪くて、何かを勘違いしてるとか？

う ん。
考えても、わかんない。

とりあえずは、シードの前でサリエス先生の話は無しにして……
後は、言葉を習得する！
シードが帰って来るまでに、もっと上手に話せるようになるう！

きつと、言葉が足りないから、過剰でハードなスキンシップにな
っちゃうんだ！
そうだ！
そういうことに、しておこう！

よし。
頑張つて、勉強しよ。

4話 たくらむ者たち (前書き)

とある場末の酒場での一幕

4話 たくらむ者たち

色街近くの酒場に似つかわしくない男が一人、その店の個室に席を取った。

目立たぬように粗末な形なりをしているが、身に纏まとう雰囲気は上流階級のそれで、貴族である事は容易に見てとれた。

しかし、当の本人はその事に気付かない様である。

男は、目の前に置かれた二つの杯の片方に 出された酒を注ぐと、何の気なしに口をつけた。

しかし、次の瞬間には 眉をしかめ、二度とその酒を口にすることはなかった。

普段待たされる事等ないであろう その男の忍耐が限界に達すると思われる頃。

「おまたせしやした」

卑屈な笑みを浮かべながら、堅気とは縁遠い風貌の小男が 男の待つ部屋にスリと音も無く滑り込んだ。

何の気配もさせずに部屋に現れた小男に 僅わずかにひるみながら男は

「例の物は、持ってきたか？」

と、高圧的な物言いを保った。

「旦那はせっかちでいけやせんねえ。 もちろん、持ってまいりやしたが……」

まずは一杯などと言いながら、小男は空の杯に酒を満たし一気に呷あおった。

そして、大して減っていない瓶の酒と 男の杯を見て

「おぼつちやまの口に、場末の安酒は合いやせんでしたか…… ケケ」

下卑た笑い声を上げる。

「五月蠅い。早く出せ」

男は苛立ちを露にして、声を荒げた。

「へいへい。 ホント、せっかちで いけやせんねー」

小男は、白髪ぬぐの混じり始めた無精髭が生えた口元を、手の甲でグイッと拭くと、隠し持っていた皮の汚い袋から 艶のある丸く平らな石を数個取り出した。

「丁寧に扱え！」

無造作にテーブルに転がされた石を見て、男の顔色が変わる。

「へいへい。 すいやせん」

反省の意が全く感じられない謝罪を 小男が嘸く。

男は、「全く、これだから低能な輩は……」などと口の中で悪態を吐きながら、小男が出した石を明かりにかざしたり、表面を撫でたりして確かめた。

真剣な面持ちで、全ての石を確認し終わると

「これで、全部か？」

と、小男に問うた。

鼻をほじりながら 暇そうに酒を飲んでいた小男は

「へい。 それで全てでやす」

手を服で拭きながら答えた。

「本当だろうな？」

もし隠し持っていたなら、今、此処で、すぐに出せ。

お前には分からないだろうが、これは危険な物なのだ。

知識も無い、魔力も乏しいお前らが扱える代物では無いのだぞ」

男は、言葉を区切りながら脅すように小男に言った。

「隠すなんて、めっそもも ございやせん。盗掘をお目こぼし下すった、旦那を騙すなんて、考えたことも ございやせん……」
哀れな声を出して テーブルに額を擦り付けるように、小男がひれ伏す。

その態度に気を良くしたのか

「ならば良いが、へたな気を起こさぬ事だ。お前達の処遇など、どうにでも出来るのだからな。無事に暮らしたければ、おとなしく俺に従えば良い。悪いようにはしない」

男はそう言う、隠しから皮袋を取り出し小男に投げた。

小男は中身を確認すると、口元を密かに綻ほころびせたが やおら情けない声で

「旦那あ。お情けでございやす。もうちつと、色つけてもらえねえと、あつしら おまんまの食い上げでやす」

男に懇願した。

「足りぬと申すか。強欲な……」

男は眉をひそめながらも、あと数枚銀貨を取り出し テーブルに置いた。

小男は銀貨を素早く袋に入れると、
「ありがとうございやす、旦那。また よろしくお願いいたしやす。それじゃ あつしは、これで失礼いたしやす」
もう用はないとばかりに 早々に部屋を後にする。

しかし 部屋を出る直前、チラリと振り向いた小男の目には 愉
悦に歪む男の顔が焼きついた。

そして、こらえ切れずに漏らした男の一言を 小男の耳は拾って
いた。

「ククク…… 見ている。 あの女、ズタズタにしてやる。

魔物の牙に引き裂かれ、瘴気に犯されて、美しい顔も体も 腐り
落ちるがいい……」

「あんちゃん。 あんちゃん。 遅かったから オオオ…オレ、心
配した」

二階の個室へ通じる階段を降りてきた小男に、頭の弱そうな大男
が駆け寄った。

「ああ、すまねえな。 ちいと、手間かけやがってよお」

小男は そう言つと、ガチャガチャ、ワイワイと酔っ払いの立て
る音がうるさい一階のホールへと足を向けた。

そして、目立たない席を選ぶと 酒と料理を注文し、不安げな大
男を安心させるように 今的一幕を かいつまんで話してやった。

そして、酒も回ってきた頃

「俺たちや、黒蟻兄弟だ。

黒蟻の通った後にや何にも残らねえ。

俺たちが掘った後にも、何にも残る訳もねえ。」

いつものセリフを上機嫌で言った後、小男は急に声をひそめて

「弟よ、実をいうと 奴に渡した石は全部じゃねえんだ。 とつと
きのが まだ一つ残っててよお。 そいあ金の卵だ。 大金に化け
る。 俺たちにも運が廻って来たぜ」

ニヤニヤと笑いながら小男が言った。

「すげえな！ あんちゃん。 オオオ！ オレ、金いっぱい うれし
い。 うまいもん腹いっぱい 食いてえ」

大男は顔を パツと輝かせた。

「おおさ。 いっぱい食いな。」

どっかの御大尽おたいじんにでも売りつけりや、死ぬまで金にやあ困らねえ。
それに、さっきの ぼんぼんからも、金はがっばりせしめたから
な、暫くはコレで楽しめそうだ」

小男はニヤリと、男からせしめた金の袋を 大男にちらつかせた。

「あんちゃん！ オレ、女も 欲しい！ 酒も 飲む！」

大男が興奮して、叫ぶ。

「ああ。 懐ふところは温けえんだ。 好きに、やんな」

小男は 狡賢ずるがしそうな目を弛ゆるませて、はしゃぐ大男を見ている。

騒がしく、雑多で活気の溢れる歓楽街の喧騒けんそうは、今日も明け方ま
で続くのだった。

4話 たくらむ者たち (後書き)

男は、女に相当恨みがあるようです。

5話 雪羽の休日 ｝ side 雪羽

今日はお爺ちゃんも外出していて、1日いないのでお休みになった。

好きな事をして過ごしていいって言われたけど、特に出来る事もない。

お買い物に行く お金も持ってないし、街に出たことが無いから勝手が分からない。

あんまり外に行っちゃいけないみたいだし……

庁内をぶらぶらしていると、どうやら神殿の近くまで来てしまったみたいだ。

向こうから歩いてくるのは……

ロニーさんとニーナさんだ。

ニーナさんは、あたしの代わりに召喚された依巫よりましで ロシア人だ。すごくキレイなお姉さん！

28歳って言うてたけど、そんな年には見えないっていうか……夢見る乙女風な、ほんわか 天然な人だ。

肌が抜けるように白いのは、この世界に来るまで、ずっと病院のベッドの上の暮らしたから。ニーナさんは、子供の頃から心臓に障害があつて 移植待ちをしている状態だったそうだ。

でも提供者は見つからず……体は限界に来ていて、あと数ヶ月の命と診断された。

それが ロニーさんに召喚されて、サリエス先生が魔法治療で治して、

今では歩いたり 普通に生活出来るらしい。

（やっぱり サリエス先生って、スゴイ人だったんだ！）

召喚者のロニーさんは、ニーナさんに一目惚れして 猛アタックの末、 現在二人はラブラブ同棲中だ。

「ニーナさん、ロニーさん。 こんにちは」
手をつないで歩いてくる二人に 声をかける。

「あら。 ユキハちゃん、こんにちは」

「ユキハちゃん？ こんな所でどうしたの？」

二人そろって、まぶしい笑顔。

幸せがあふれてますね。

でも、背の高い二人が目の前に並ぶと、壁のようです……

「天気がいいので、お散歩です。 お二人は？ 神殿に御用ですか？」

「ええ。 神殿で依巫の試験だったの。 本当に私に神を降ろせるか、ちよつと試されたのよ。

それで、ホラ。 これが 依巫の衣装なんだって。」

クルリと回って衣装を見せてくれる。

三条さんに見せてもらった 巫女装束と全く同じデザインで、色だけが真っ白だ。

白装束……

ニーナさんはウェディングドレスみたいだって言うけど、白ずくめの装いからは 他の事が連想されて笑えなかった。

「…… 依巫に、試験なんて あるんですね」
話をそらす。

「本当に降ろす訳ではないけどね」

明るく話すニーナさんとは違い、少し複雑な表情でロニーさんが言った。

ロニーさんは、私に依巫の事を話したくなさそうだ。あまり詳しく聞いてもいけないのだろうか？

望んで失格に扱ってもらっているから 強くは言えないけど、気にはなるんだよね

試験内容って………というのが合格なの？

聞きたいけど、聞けない。

すると、話題を変えるように、ロニーさんが

「それより、ユキハちゃん。言葉、すごく上手くなったね」
二ヶ月経ってないのに上達、早すぎるよ」

そう言って、明るく笑う。

目は心なしに 笑ってないように見えるけど……

仕方ない、あたしも これ以上目の前でイチャつかれても反応に困るので、この辺で失礼させてもらおう。

「お爺ちゃんのおかげです！ もっとちゃんと話せるように、猛勉強中です！」

あたしも 勉強方法については、詳しく追求されたくないのだから、わたしはこれで！ さようなら」

二人に手を振って、そそくさと別れた。

ニーナさんと二人なら、もっと一緒にいたかったなあ。

神殿には　すぐ近くまで森が迫っていて、あたしは　その森を散策することにした。

木々の新芽が　キレイ。

ぽかぽかした　春の日射しが気持ちいい。
気持ち良過ぎて、ぼーっとなる。

サリエス先生の薬を飲み始めてから　ぐっすり眠れていない。

夜の間　骨が軋むように痛むせいだ。
成長痛？

骨が伸びる時、痛くなるんだよね？
計ったら　伸びてるかな？

少しくらい　痛くても我慢しなくちゃ……

そう思っ　て　飲み続けてるけど、さすがに睡眠不足になったかな
？

ああ　だるい……

少し　座ろう……

あの大木の根元が　気持ちよさそう

大木の根元は、少し開けていて、教室程の広さの広場のようになっ
ていて、やわらかい午後の日差しが降り注いでいる。　芝生のよ
うに蜜に生える下草の淡い緑が、日の光に照らされて輝いていた。

「失礼します……」

木にことわりを入れて腰を下ろす。

なぜって？

だって、御神木っぽい大木なんだもん。
トト〇とかが　住んでそうなんだもん。

座って、木にもたれて　ボーっと上を見る。
木漏れ日と、小鳥の鳴き声が心地いい。

「平和だ〜」

自分の世界の事が、嘘みたい。
なんて、やすらか。

しばらく、呆けていたけど居心地がいいので　ここで少し勉強することにした。

スカートのポケットから小さな辞書を取り出して、お爺ちゃんから借りている魔法具のルーペみたいなのを片目にあてる。

すると、見たものが頭の中に記憶されるという　反則な道具だ。

古代の遺物だそうで、どういう仕組みになっているのかは不明、お爺ちゃんも解明しようとしたけど　技術が失われているので再現は無理だと諦めた、超貴重品だ。

もっと早く習得したいと言った　あたしに、お爺ちゃんが貸してくれた。

ただ、長時間使うと脳に負担がかかるので　1時間使ったら、1時間休む　という約束をした。

気が付くと

2時間くらい辞書を眺めてた。

ふあああ〜

疲れた。

ころんと、横になる。

伸びをすると、すごく気持ちいい。

自然と まぶたが重くなる。

温かい日差しに 気持ちよく ウトウトしてたのに、
鼻がツーンとしてきて、金属臭いニオイが……

ああ…… 鼻血だ。

魔法のループ、使い過ぎたか。

何度が使いすぎで、そのたび鼻血を出してるから、今更びつくり
しないけど……

さすがに 寝ながら鼻血をたれ流すのはマヌケなので、ハンカチ
を探してポケットをさぐる。

無い。

何も、入って無い。

しまった。

何で拭こう？

ぼやけた頭で考えながら、無理やり起き上がると

いつからいたのか 仔犬？が二匹、ほんのすぐ近くに座っていて
あたしの方をじっと見ている。

犬？

形は、確実に仔犬。 柴犬の子供っぽい。

でも、色が…… 赤と、青だ。

赤い仔犬は 白地に、耳・口の周り・足・尻尾・背筋が赤い。

青い仔犬は、その青い版だ。

こっちの犬を初めて見た。

色が違うんだね

などと、鼻血垂れ流しで感動していると、仔犬があたしの前まで歩いてきて、いきなり飛びついてきた。

うわゝ可愛いー！！と悶絶するあたしに　二匹はよじ登る勢いで顔目掛けてダイブしてきた。

そして

ペロペロと、あたしの鼻を　舐め始めた。

ペロペロ　ペロペロ　ペロペロ

鼻が　くすぐりたい

ペロペロ　ペロペロ　ペロペロ

うーん

くすぐりたいな

ペロペロ　ペロペロ　ペロペロ

もう……

いいかげんに、しつこい！

顔が、べとべとになったよ！

二匹を、自分から引き剥がして地面に置く。

一瞬、私の鼻血を徹底的に舐め摂るこの子達が、肉食で　あたしを食べようとしているかもって思ったけど、小さな尻尾を　目一杯振っているのを見たら、そんな考えは吹き飛んでしまった。

「かわいい」

犬、大好き！

毛色が多少違っていても、可愛いものは可愛い！

あたしの 手とかにじゃれつく仕草も、かわいすぎ！

二匹は ちょこんと並んで座っている。

赤が左で青が右。

その様は、なんだか…… そう…… なんだか……

お湯と水？

水道のカランだよ

あははは！

突然笑い出した あたしを二匹は不思議そうに見ている。

手を差し出すと匂いを嗅いでペロリと舐めた。

尻尾をぱたぱたと振って、頭を撫でてやると手にまわり付いて
じやれてきた。

「名前つけていい？」

通じるとは思っていないけど、聞いてみる。

以外にも クウーンと鳴いて、尻尾を振る。

「言葉、通じてるの？」

じゃあOKってことで。 何がいいかな？

赤と青…… まんまか。

お湯と水、ホットとクール…… ファイアとアクア…… 良いじゃない！

まてまて…… 周りが洋風の名前ばかりだし、あたしが付ける

んだから和風がいい！

うっん……

温オンと冷レイ。

安直？

気にするな！

よし！ 決まった。

君達の名前は 温オンと冷レイ」

「気に入った？」

と 聞くと

「アン！」

と答えてくれた。

尻尾振ってるし 気に入ってくれたでしょう。

夕刻を告げる神殿の鐘が鳴り出すと、オンとレイは落ち着かなくなつた。

日も傾いてきたし、お家に帰る時間なのかな？

あたしも、そろそろ帰らないと……

「オン、レイ。 お家に帰る時間だよ。 楽しかったし、また遊んでね」

そう言つと、分かったとばかりに あたしの周りをぐるぐる駆けてそのまま森の奥に走っていつてしまった。

「また、会いたいなあ」

名残おしかつたけど、むりやり連れて帰る訳にもいかないし、また会える事を祈る。

そして あたしも ミリが心配するといけなかったので、部屋に戻つた。

6話 魔獣1 \ side花音(前書き)

花音がぐるぐる悩んでいます。

6話 魔獣1 ｝side花音

アルが第2師団の訓練で 宮を3日空けた最後の夜は、灰色の厚い雲が 月だけでなく音まで覆い隠してしまったような 静かで重い夜だった。

私は蒼玉宮せいぎょくきゅうの居室でソファに座り いつもと変わらず侍女のエマのように 湯上りの髪を乾かしてもらっていた。

念入りに髪の手入れしながら、エマがふと口を開いた

「お淋しゅうございますね」

え？ 何の事？

私が怪訝な顔で振り向くと

「明日の夕刻には、お戻りになられると 侍従長が言っておりました」

につこりと微笑まれる。

ああ。 アルのことか。

「別に…… 待つてないし……」

反論してみるが、効果の無い事は実証済みである。

アルが常に、『カノンは照れ屋さんだね』とか『素直じゃないな』とかいうものだから、侍従も侍女も皆して私の事を 誤解してしまった。

私がアルに関して どんなに文句を言っても、愛情の裏返しの捉えられてしまって 今のエマの様な暖かい眼差しで 見守られてしまうのだ……

私は小さく溜息を一つ吐くと、明日にアルが帰るなら 今夜くらいは 皆、ゆつくりするようにと エマに言伝て、下がらせた。アルが居ると来客も多いし、何かと用事が増える。 人手が足りない訳ではないのだが、余ってもいない。

彼らにも 羽を伸ばす日があつていいだろう。

私はソファから立ち上がると うん、と伸びをして室内を見渡した。

壁に取り付けられている光源不明の照明からは黄味がかつた光が放たれ、広い部屋をやわらかく照らしている。

陰影の濃い部屋は物音一つせず、自分以外 誰も居ない事を静かに教えてくれる。

（この部屋、こんなに広がったつけ……）

金髪頭の派手な男一人が居ない所為で こんなにも部屋が味気なくなるものだろうか、王子様の存在感に少し感動しながら

（そういえば、こつちに来て2ヶ月近く経つけど アルと離れるの初めてだ）

3日間アルと離れたことで 隣にアルがいることに慣れてしまった 自分に気が付いた。

一人で居る事なんて平気なはずなのに……

子供の頃から両親は不在がちだったし、お手伝いさん以外に家族がいることなんて 滅多になかったから、人の気配がしない方が普通だった。

それなのに、決して暗くはないはずの部屋が 仄暗く見えて、背筋がゾクリとした。

その感覚を誤魔化すように 私は寝室に向かいドアをぴつたりと閉めると、ベッドに腰を下ろして一冊の本を手にとった。

その本は、さまざまな花木が繊細な筆遣いで手描きされている文字を覚えたての子供向けの物だった。さすが王宮の図書館所蔵の物だけあって 絵本というより画集と言う方が相応しい。

ベッドの読書灯を点けると ゴロリとうつ伏せに寝そべり、その本を開けた。

文字が読めないのは、思っていたより かなり不便だ。

ちよつとしたメモの意味も解らないし、意思の疎通が会話のみになると 手間が掛かる。

それに、この世界は娯楽が少ないから、夜が果てしなく長く感じる。

本でも読まないと、時間を持て余す。

なにより、自分がバカになったみたいで、耐えられそうにない。

元の世界に帰ってから何の役にも立たない言葉を覚える事に躊躇していた私を踏み切らせたのは、永山さんだった。

こっちに來てから3週間程経って ようやく永山さんと会うことが出来た。

その時、彼女と話してお互いの状況を確認したんだけど、永山さんは 家に帰れない事情があるからと、この世界に3年留まる事に決めたそうだった。

そして指輪無しでも不自由しないように、すでに公用語を勉強していた。

私は彼女の事を誤解していた様だ。

あの子は、以外に強い。

永山さんは、自分の言いたい事を言えずにいじめられていた気の弱い子では無く、状況に応じて生き抜く強かさを持っている子なの

ではないだろうか。

私はといえば、現状を受け入れているとは 言いがたい。
元の世界に帰る事も、アルと共に生きていく事も決められずに
アルのお陰で何不自由無く快適に過ごている……

こんな中途半端じゃ、ダメだよな。

ベッドの上で膝を抱えて、かかえて頭を膝頭にコツンと乗せる。

私、変だ。

今まで、家柄や財産目当ての男たちを信じられないなどと言ってきたのに、いざ 自分自身の価値で勝負することになったら 自信がまるで無いなんて……

だって、後宮の女の人達って とんでもなく美人でスタイルも抜群にいいんだもん。

そりゃ、日本の女子中学生の中なら 少しは可愛いはずだと言えるけど、選りすぐりの西洋美人と日本人を比べる時点で間違っていると思う。

根本的に造りが違うんだから。

それに 魔法のある世界で、言葉も違う常識も違う中で 自分の中身でどうやって勝負するんだろう？

性格？

考え方？

キャラ？（癒し系じゃないよね？絶対）

ああ…… 自信ない、それ。

美人慣れしているアルの目に、自分がどんな風に映るのかなんて

想像出来ない。

毛色が変わった女が珍しいとか……

戦争が終わってから影響があるっていう、巫女として珍重しているだけかも。

いっそのこと、私に愛想が尽きれば 二人の間に距離が出来、帰り易くなるのではと 冷たい態度や我儘を言ってみたりしたけど、全く変化が無かった。

むしろニコニコ、献身的。

あれ？

王子って、M系？

甘い言葉をかけたり、スキンシップ過多の割には 押しが強くないしS系ではないと思うけど。

頭の中がグシャグシャになってきた……

そもそも 私は、アルのことを どう思っているんだろう？
それが一番大事だろう？

……。

考えたくない。

ぼすん と横向けに倒れこんで枕に顔を埋める。

だって、フェアじゃあない。

ここは異世界で、元の世界には 簡単に帰れなくて、
アルは王子様で、
紳士で、

かつこよくって、
優しくて、

しかも私の事が好きとか言っ
てて、
すごく大切にしてくれて……

これで、アルの事を好きにならない女の子なんて いないと思う。
でも、それってどこか釈然としない気持ちが残るんだよね。

ある日、「カノンが運命の女だと思って愛してきたけど、もっと
好きな人が出来たから帰って」なんてアルに言われたらどうする？
ほら、人魚姫の王子様は 別の娘と結婚しちゃうよ？
それに後宮は側室OKだしね……

自分で考えていて、落ち込んできた。

アルがそんな人じゃないだろうって、私も思っている。

でも、

『好きになっちゃった。 しかも、とっても』
なんて認めたら最後、帰れなくなるでしょ？
そう感じたから、今まで突き詰めて考えないようにしてきたけ
ど

なんだかそれも限界にきているみたいだ。

アルに「カノン」って呼ばれるだけで、心が温かくなる。
もっと呼んで欲しいと思う。

アルの傍でなら、素直に笑えそうな気がする。

でも、自分から飛び込むのは 怖くて、怖くて、怖くて……
裏切られたらどうする？

今のままなら、いい思い出で終われるから、嫌われて 家に帰ろ

うつて囁く自分もいる。

「好きだから 愛されたい」と「怖いから 逃げ出したい」の狭間で
私の心は定まらずに 揺れ続けている。

今日もまた、気持ちを決められないまま眠りにつくのかと
そつと 目を閉じた時

カシャーン

隣の部屋で、物音がした。

耳を澄ます。

パリン

ガラスの割れる音がする。

（何？ 誰かいるの？）

カシャーン

カシャーン

続いて2度ガラスの割れる音がした。

窓から何かが投げ込まれたようだ。

？

一体何だろうと、そつとドアを開ける。

部屋の中に 何かの影が浮かんでいる。

ユラリ

影が動く。

思わず、ドアを閉める。

胸はドキドキと早鐘を打ち、冷や汗が背中を伝う。
こめかみを流れる血流の音が煩い。

ヤバイ。

本能が危険を告げている。

一目見たただけだけど 隣の部屋に居る物は、自分の知る何にも当
てはまらない『生き物』だった。

光まで吸い込んでしまったかのように それは黒いシルエットで
しかなかった。

でも足が4本、手が4本。

明らかに化け物的な奴だ。

手には鋭い鍵爪が付いていた。

息を殺して、そつとドアの鍵を閉める。

ドアには術式が組み込まれていて、簡単に破れない構造になって

いると聞いていた。

そして、足音を立てないようにドアから離れ、ベッドの向こう側にうずくまった。

歯の根が合わずに カチカチなってしまう。

親指を噛んで音を消し、必死で呼吸を整える。

落ち着け！

落ち着け！

自分に言い聞かす。

このまま見つからなければ、あれは どこかに行くかもしれない。
どうか、気付かずにどこかに行つて！

祈りも虚しく

ガリッ！ バリッ！

ドアを引つ掻く音がした。

次いで

グオオオオオオグワアアア

全身が総毛立つ様な 咆哮が上がり、今度は激しくドアがガタガタと揺れ始めた。

私は恐怖で震えながら、必死で自分に言い聞かせる
大丈夫。

今の声で、誰か来てくれる。

蒼玉宮には警備の衛兵もちゃんという。

アルが不在の今、必ず駆けつけてくれるはず……

でも、お願い早く来て！

ドアは今にも破られそうで、ミシミシ音を立てている。

何かで押さえたいけど、もう そんな時間があるとは思えない。
というより、足がすくんで動けない。

永遠にも感じられる時間が過ぎ（実際には僅か数分の事だろうけど）隣の部屋に多くの人間が入る音と悲鳴がした。

「カノン様！ ご無事ですかつ！」

「うわっ！ 何だこいつ等は？！」

グオオオオオン

衛兵たちの声と、猛獣の威嚇めいた鳴声。

ドアに爪を立てるソレは 休み無く斬り付けているから、一匹ではない事が察せられる。

何匹いるのだろう？

絶望的な予測に、体の力が抜けていく。

私の命は、こんな得体の知れない生き物に奪われて終わるのか…

…？

床にへたり込んで、震える体をきつく抱きしめながら、私は恐怖の余り気が遠くなった。

死ぬ前には走馬灯のように

過去の事が脳裏に浮かぶと聞いていたけど……

今 頭に浮かぶのは アルの

笑顔

困った顔

悲しそうな顔

驚いた顔。

アルの 笑顔

もう一度見たかった

冗談じゃない

まさに死にそうな目にあっているのに

どうして、アルの事ばかり 頭に浮かぶ？

もう一度アルに会いたい

アルフレッド、助けて！

アルは帰らないのは 知っているのに

アルに助けを求めるのを 止められない。

助けて！助けて！

助けて！助けて！

映画などの作り物とは全く違う 産毛の一本一本に感じる振動や、
胃袋がひっくり返りそうになる位 不快なその生き物の気配。

鼓膜にビリビリと響く音達に 恐怖の臨界点を越えてしまったの
か、頭の血の気が引いて行くのを感じた。

もう、ダメかな？

ここで 死んじゃうのかな？

衛兵が来たはずなのに 止まないドアの軋みに、諦めかけた時

「カノン！」

アルの叫び声が 聞こえた気がした。

7話 魔獣2 (前書き)

単位の説明

1メートル＝1メートル

1セテル＝1センチメートル

7話 魔獣2

アルフレッドが訓練場の天幕に敷かれた術場から蒼玉宮せいぎみくきゅうの術場へ転移してきた時、蒼玉宮は恐慌状態にあった。

侍従や侍女が駆け回り、顔には恐怖の色が濃かった。

術場に出現したアルフレッドの顔を見つけるやいなや 一人が

「お部屋に魔獣が！ カノン様がまだ中に！」

悲痛な叫び声を上げた。

侍従の言葉が終わらない内に、アルフレッドは全力で走り出していた。

カノンが居る筈の居室の前は、衛兵達が抜き身の剣を構え、騒然としていた。

どうやら入れ替わりで 中の魔獣に攻撃を仕掛けている様だった。

「何があった。 カノンは何処だ？」

アルフレッドは叫んだ。

「突然、魔獣の咆哮が上がり 駆けつけましたところ部屋に3体侵入している模様です」

「カノンは？」

「おそらく寝室におられると思われます」

衛兵は搾り出すような苦しい声で アルフレッドに告げた。

アルフレッドは弾かれる様に扉に向かい、一瞬の逡巡もなしに中へ飛び込んだ。

「カノン！」

飛び込むと同時にアルフレッドは剣を抜き放つ。

彼の剣は 攻撃魔法の術式が込められ鍛え上げられた 魔剣と呼ばれる物で、中でも最強の部類に入るであろう逸品だ。

魔剣は込められた術式が強力であればあるほど、使う者の魔力を必要とし また扱いも難しい。

その魔剣を抜いたアルフレッドは、普段 蒼玉宮に暮らす時の温和な雰囲気とはまるで違う 魔道騎士団 第2師団大隊長の冷厳な顔をしていた。

その実力を買われ 癖の強い第2師団の隊長に抜擢されて以来、苦勞しながらも まとめ上げてきたアルフレッドが発する怒気は、彼の前に立ち塞がるものなど 塵に帰される運命を確信させるものだった。

アルフレッドは 仄かに光を放つ魔剣を高く掲げると、扉の正面で威嚇する二体に向かって 軽く振り下ろした。

まばゆ
眩い光と共に 床と魔獣の足に深い傷が入る。

カノンの寝室のドアを破ろうとしていた一体が動きを止める。

「さあ！ お前らの相手は こっちだ！」

アルフレッドが剣を構えなおして 叫んだ。

グギヤアアアア

鼓膜が破れそうな 不快な鳴声を上げながら、傷つけられた二体の内一体がアルフレッドに飛び掛った。

三体の中では最も小さい その魔獣をよけながら、アルフレッドは 掴みかかる腕を斬りつけた。

フシャーアアアア

気体とも液体ともつかぬ体液が噴出し、辺りの空間を紫に染める。アルフレッドは素早く飛びのき、体液の霧から距離を取った。剣を持ったままの腕で口元を覆い、三体との間合いを計る。魔獣の体液のかかった床や家具が黒く変色を始め、崩れだした。

「瘴気か……」

厄介な。

アルフレッドは頭を巡らす。

瘴気は毒である。瘴気にあてられると、物は朽ち、生き物は身を腐らせる。室内などで戦うのは最も不向きな相手だ。通常の対応である、封印系の魔法を発動さすには人手が足りない。

瘴気を封じる魔法を掛けている間に、他の2体に襲われるからだ。しかも、カノンが奥に取り残されている。

大技で焼き尽くすか？

この際、宮殿など、どうなっても良い。カノンを無事救出する事だ第一義だ。

多少の被害は止む終えないと、発動にかかったその時

「隊長！」

「ご無事ですかっ？」

聞きなれた声の持ち主らが、部屋に飛び込んできた。

軍服を身に纏った2人を確認すると、アルフレッドは短く指示をだした。

「3体いる。手前の黒いヤツは瘴気を吐く。その横の緑色のは不明。足止めを頼む。私は奥のを倒す」

「はっ！」

アルフレッドの部下と思しき2人は、狭い室内に魔獣が3体もいるという異常事態に臆することなく、剣を抜いた。

彼らの剣も もちろん魔剣である。

魔道騎士団は、名前の通り 攻守共に魔法を使う騎士団で、団員も全て中級魔道士以上で構成されている。

戦争の時は もちろんその才を遺憾なく発揮させるのだが、平時魔獣が出た時などは その能力を請われて駆除に当たるのである。故に、宮付きの衛兵などとは違い、魔獣への対応は専門といつてよいであろう。

そんな彼らにとつてしても、宮殿内に魔獣が しかも1度に3体も出現する事は前代未聞の珍事。

準備無しで 使える味方は3人だけ。
分の悪さが ひしひしと感じられる。

カノンが居るであろう寝室のドアを切りつけている 長い爪を持った魔獣へアルフレッドが向かった時、緑色のぶよぶよした魔獣がアルフレッドの行く手を遮った。

「邪魔だ！ どけっ！」

アルフレッドは 魔剣で魔獣の腹を切り裂いた。

ブニヨン

しかし、切先は肉を切り裂かず、弾かれてしまった。

弾力のあるぶよぶよした体は刃物を滑らせ、食い込ませない。

「ならば！」

アルフレッドは剣に炎撃系の魔法を発動させ、
形を自由に変えながら伸び上がり 3メートルの高みから アルフ

レッドに覆い被さるうとしている魔獣目掛けて、今度は下から上へと切り上げた。

グアアアアオ

ン

叫びともつかない振動だけの声を上げながら、魔獣が後ずさる。切り裂かれることの無かった魔獣の体には、赤く燃えた溶岩のような一文字の焼け攀れが出来ていた。

（切り裂く事は出来ぬが、焼く事は出来そうだな）

アルフレッドは少し息がつけた気がした。対処法が解ればなんとかなるものだ。

しかし、その時カノンの扉が破られる音が響いた。

「カノンっ！」

アルフレッドは己の全身の毛が一瞬で逆立ったのを感じた。

「おまかせを。こちらは、焼きます」

第2師団面々は優秀である。アルフレッドが動けるよう、即座に緑の魔獣を引き受け術式の発動にかかる。

アルフレッドは、それこそ飛ぶようにカノンの部屋へ駆ける。

寝室の物音に、冷や汗が噴出す。

カノンの柔肌にあの魔獣の長く鋭い爪が食い込み赤い血潮が噴出す様が脳裏にちらつく。

息が詰まり、呼吸が速くなる。頭から血の気が音を立てて引

ていくのが分かる様だった。

（カノンが殺されてしまったら？）

その問いは彼の心を暗闇で覆い、全身を恐怖で粟立てた。

破壊された入り口まであと少しという所で、アルフレッドは中から飛び出してきた黒い塊にぶつかりそうになり素早く身を翻した。
ひるがえ

条件反射で、振り向きざま切り捨てようと振り下ろした剣の軌道を、彼は すんでのところであらう 塊の正体を信じられない面持ちで見つめた。

「カノン……」

「アル？ アルっ！ 中に化け物がいるっ！」

カノンは居る筈のないアルフレッドに一瞬戸惑ったが、すぐに恐怖の源である魔獣へと注意が行き……

「わあっ！ 外にもいるっ！」

思わず小さく叫び声を上げるカノンを、アルフレッドは思わず抱きしめた。

「カノン…… 無事でよかった……」

こんな状況にもかかわらず、カノンの温もりを確かめずにはられない自分に失笑しながら、アルフレッドは決死の覚悟で主人を追ってきた衛兵達にカノンを渡した。

衛兵は自らを盾としてカノンを取り囲み、ゆっくりと壁際に身を寄せた。

グルルルルルル

寝室からの物騒な唸り声に、アルフレッドは魔剣を構え直した。

キ カシヤ

カシヤ……キ

鋭い爪が床を掻く不快な音がする。

寝室のドアから姿を現したソレは 漆黒の剛毛で覆われた体に、蜘蛛の様な4本の足が生えていた。

長い腕を床に引きずり その先端に付いた鎌状^{かま}の鋭利な爪が 大理石の床を削って 耳障りな音を立てていた。

大きく裂けた口からは腐臭が漂い、紫色の舌が尖った牙の間から

ダラリと垂れ下がっている。

その狼とも、蜘蛛とも猿とも言い難い姿は、アルフレッドの知識の中のひとつと合致した。

魔獣ゾレググ…… 大昔、戦のたびに魔召喚されていたという魔獣

凶暴かつ攻撃的。

四肢を切り落としても、喰らい付いてくる しぶとい魔物。
瘴気は出さぬし、対処法は……

「貫いて、一気に潰す」

そう呟くと、アルフレッドは袖口に仕込んである聖針せいしんと呼ばれる
対魔物用の長針を ゾレググに向かい数本投げつけた。

ゾレググは聖針がよほど気になるのか、体に刺さった針を抜こう
ともがいた。

アルフレッドは一瞬で間合いを詰めゾレググに剣を深く埋め込む
と飛びのき

「炎槍、散っ！」

鋭く呪を唱える。

魔獣の体に埋め込まれた剣からは無数の炎の槍やりが 2メートル四方
に突き出し、霧散した。

ゾレググだった物体は、ブスブスと黒煙を上げて床に崩れ落ちた。

「戻れ」

アルフレッドが命じると、屍の中から剣が浮かび上がり キラッ
と光ったかと思うとアルフレッドの鞘に納まった。

アルフレッドが他の2体へと視線を向けると、部屋の窓が大きく
破られ、2体共が外へ逃げ出していた。

8話 魔獣3

「逃がして、どうする……」

蒼玉宮の壁にぽっかりと空いた巨大な穴を見つめて、アルフレッドは部下に向かって呟いた。

しかし そうは言っても、この狭い室内空間で 瘴気を発するタ
イプや 高熱の炎で焼ききらねばならぬ魔獣と 対するのは得策で
はない。

幸い、王宮と神殿一体は魔術結界が張られているから、市街地へ
逃げ出すことはないだろう。

が、いかんせん結界の範囲が広い。

神殿の森に逃げ込まれたら、山狩りにどれくらいの人員が必要に
なるだろう……

只でさえ魔道騎士団は訓練の為 必要な者以外は全て王都から出
払っているというのに。

その手間と時間を考えると、つい 逃がさず処分したかったと言
いたくなるのも 仕方の無い事だ。

アルフレッドは、手早く 念話で主要な部署へ連絡を済ませると
カノンの元へ取って返した。

アルフレッドの駆け寄るのを確認した衛兵が スッとカノンの前
から脇へ身を除けた。

3人の衛兵が盾のように守っていたカノンは、突然目の前が開け
た事に目を見開き、胸の前で両手を硬く握りしめながらも、気丈に
立っていた。

真っ青な顔色のカノンを気遣い

「カノン？ 大丈夫？ 怪我はない？」

アルフレッドが優しく問い、そっと手を肩に回すと、カノンは急に力が抜けたように カクンと膝を折り 崩れた。

アルフレッドが慌てて抱き抱えると、カノンは激しく震えていた。

「大丈夫。怪我はしていないの。 ちょっと、びっくりしたただけ……」

それでも、自分を落ち着かせようとするかのように カノンは大丈夫と繰り返した。

「カノン…… すまない。 怖い思いをさせてしまったね……」
アルフレッドはカー杯 カノンを抱きしめた。

「よかった…… カノンが無事で。 本当によかった……」
カノンが生きているのが嬉しくて、温かさを感じていたくて 思い切り腕の中へ閉じ込めた。

もぞつと カノンが身じろぐ事すら喜びで、ついには

「 アル 苦し……」

カノンに弱々しい 悲鳴を上げさせてしまった。

慌てて力を緩めると カノンはハアハアと大きく息をつき、ジロリとアルフレッドを睨み上げた。

「折角助かったのに、アルに殺されるところだった」

カノンはむくれながらも少し照れた顔で文句を言い、ふと 消えた2体の魔獣が居た場所に目をやった。

何かを喋ろうと息を吸い込んだ時、何か喉に引っかかった様に コホコホと咳き込んだ。

それを見たアルフレッドの表情から甘いものが引き カノンの鼻と口を片手で覆った。

「カノン。手で口を押さえて、なるべく息をしないように」
そして、アルフレッドは空いた方の手で 部下と衛兵に撤退のサインを送る。

カノンの口元の手を除けると、彼女は自分で さつと口を押さえる。

その子供っぽい仕草に アルフレッドの頬が緩みかけたが、彼女の全身に目がいくと、眉間に皺が寄った。

カノンが今夜身に着けている夜着は白い薄手の物で 彼女の柔らかい体の線をくつきりと浮き上がらせ、先ほどの恐怖で潤んだ目元と相まって 何とも言えぬ艶かしさを醸し出していたのだ。

アルフレッドは無言で自分の纏っていたマントを肩から外すとカノンを包み込み、彼女の膝裏に手を入れ 横抱きに抱え上げた。

カノンとアルフレッド、衛兵達は 無言のまま 素早く廊下へ出た。

廊下は 衛兵からの通報とアルフレッドの念話により駆け付けた者達で 騒然としていた。

アルフレッドらが部屋を出るのを待ち構えていた騎士団の調査班が部屋を封鎖し、別室では救護班が傷を負った衛兵を治療していた。

「本隊から呼び寄せたのか？ にしても、早いな。」
訝るアルフレッドの問いに

「師団長より、またとない実地訓練の機会を 余す所無く活用してこい と厳命が下ったんですよ」

答えたのは、副隊長のセシルだった。

「お前まで来てたのか……」

「隊長の報告に師団長、盛り上がってますよ。今から魔獣狩りだあゝとか言い出して、訓練内容変更するそうです」

「王宮の結界内に 部隊を展開させる気か？」

「気ですね」

「モメるぞ」

「モめますね。 王宮警護の近衛あたりとは、まあ、确实ですね」

アルフレッドは盛大に溜息をつく、今だ彼の腕の中にいるカノンに向かって、心底申し訳なさそうに告げた。

「カノン。 すまない。 行かなくてはならなくなった」

カノンは下を向いたまま、アルフレッドの上着を ギュツと握り締めている。

普段の彼女からは想像できない その姿にアルフレッドはハッと息を飲んだ。

そして、部下の前では絶対しないと決めていた普段の口調に戻り、彼女にだけ聞こえるよう小声で言った。

「ごめんね、カノン。 傍にいてあげたいんだけど、揉め事が起こりそうなんだ。

なるべく早く戻るから……

そうだ、神殿に行く？」

アルフレッドの問いかけに カノンは俯いたまま、頭を横に振る。

「神殿は嫌い…… アル、アルと一緒にいて」

小さな声だった。

今までカノンの口から発せられることのなかった、気弱な言葉。小刻みに震えるカノンに、アルフレッドの心は揺れた。

今、この手を放してしまうと 二度と会えなくなりそうなの……そんな危うさをカノンから感じて、アルフレッドは躊躇した。

「カノ……」

アルフレッドが口を開きかけた時

「お取り込み中申し訳ありませんが、隊長。 黒い方が『赤の庭』に出ました」

副隊長セシルの緊張した声が アルフレッドの言葉を遮った。かきとぎ

セシルの声はカノンにも届いたらしく、一瞬体を強張らせた後、彼女は握り締めていたアルフレッドの上着を手放した。

そして、身じろぎをしてアルフレッドの腕の中から、廊下へ降り立った。

ふらつく足を踏みしめて、青ざめた顔で彼の顔を見つめると

「また、誰かが襲われるの？」

確認するように聞いた。

「心配しないで。みんな警戒しているし、第2師団が戻るそうだから、すぐに捕まえられるさ」

「アルも戦うの？」

「多分。実物を見ているし……」

「アルが怪我したりするのは、嫌なの」

「大丈夫。僕は強いよ？ でも、気を付けるよ。ありがとう」
ニコリと微笑むアルフレッドを見て カノンは彼の中の騎士としての誇りと自信、隊長としての責任感のようなものを感じたのか、それ以上何も言う事はしなかった。

「必ず、無事に戻るから…… 神殿に行かないなら、僕の寝室に居てね、カノン。あの部屋が、この宮の中では一番頑丈に造られているから。エマ、カノンを頼んだよ」

アルフレッドは侍女のエマにカノンを託すと、魔獣と師団と衛兵が待つであろう『赤の庭』へ急いだ。

9話 魔獣4 ｝side花音

あんな気持ちの悪い生き物を、私は初めて見た。

奴が寝室に入った瞬間、全身の毛が垂直に立ったのを感じた。
見た目も長く鋭い爪とか怖かったけど、奴が発する気配そのものが 全く異質で受け付けなかった。

それと、二オイ。

なんともいえない嫌な臭いが、荒い呼吸と共に放出されて……
吐きそうだった。

何の手立ても思いつけずに、自分の意思とは無関係にガタガタ震える体を無理やり動かして ベッドの脇から、ベッドの下にもぐり込んだ。

肉食獣から身を潜める小動物のように、息を殺して奴の動きをうかがう。

すると、奴はベッドの横を素通りして 私が明日着ようと思って出しておいた巫女の装束の方へと足を向けた。

そして、臭いを嗅ぐような仕草をした後 金属的な鋭い爪で 装束をバリッと引き裂いた。

次は自分の体が切り裂かれる番だと、心臓が縮み上がり悲鳴が飛び出そうになった。

拳を握り締め、噛み締めていた親指からは血が滲んでいた。

奴が装束から顔を上げ、中に向かってで鼻をヒクヒクさせた時、自分の存在を気付かれたと覚悟した。

しかし、奴はおもむろにクローゼットの扉をこじ開け始めた。
たしか そこには何着か巫女の衣装があつたはず……
奴がクローゼットに入った その隙が最後のチャンスだと、私は
床を思い切り蹴って、出口へと転がり出た。

破壊された扉の外に出た瞬間、何かに抱きとめられた。
それは、この場に居るはずの無いアルフレッドで……

信じられなかった。

「アル？」

名前を口にする、泣きそうになった。

でも、私に気付いたであろう奴が 背後に迫り来る気配を感じて
「アルっ！ 中に化け物がいるっ！」

叫んでいた。

そして、アルの肩越しに居室を見ると薄暗がりの中に2体の化け
物が目に入った。

「わあっ！ 外にもいるっ！」

寝室の1体だけではないと予想していたけど、想像以上の惨状に
声を漏らしてしまう。

後ろには恐ろしい化け物、前にも2体もヤバそうなのがいる。
なのに。

「カノン…… 無事でよかった……」

そうアルに囁かれて、抱きしめられると不安がすーっと引いて
いく。

アルの腕の中は安心だ、と
ずっと此処にいたいと感じてしまう。

しかし、当然 状況はそれどころではなく、私はアルの腕の中から宮の衛兵達の元に託され壁際で震えながら、ひたすらアルの無事を祈っていた。

化け物の断末魔のような叫び声が響いた後、私を取り囲んでいた衛兵達の壁が開いた。

すると目の前にはアルが 泣きそうな顔をして立っていた。実際には いつもと変わらない表向きの表情なんだけど、私には何故だか 今にも泣き出しそうに見えた。

なのに

「カノン？ 大丈夫？ 怪我はない？」
私にだけに聞こえる位の小さな声で、私を気遣い優しく抱き寄せる。

「大丈夫。怪我はしていないの。 ちょっと、びつくりしただけ……」

だから、そんなに心配しないで。
安心させたいのに、膝が震えて上手く立てない。

「カノン…… すまない。 怖い思いをさせてしまったね……」
アルが私を抱きしめる。
じんわりと、緊張の糸がほぐれていく。

「よかった…… カノンが無事で。 本当によかった……」
アルは今までに無い位の力で 私を抱きしめている。
その所為だろうか？

布越しに、微かにだけど 確かに感じるアルの震え。

化け物をやつつける位に強くても、怖かったのかな？
恐ろしい化け物だったもんね。

当然だよな。

助けてくれて、ありがとう。

そんな思いと心地良さを噛み締めていたけど……
ちよつと……

力、込め過ぎじゃないかな？

かなり、苦しいんだけど

アルは緩めてくれない……

「アル 苦し……」

酸欠で気を失いそうになって、アルが放してくれた。

ちよつと花畑が見えたよ？

でも

その時見上げたアルの顔は、切羽詰まった顔から 普段の表情へと近づいているようだった。

私が在る事で 少しでもアルを癒せたのなら、すごく嬉しい。
そう思ったけど。

抱き込められて、息の上がった私の口から出た言葉は

「折角助かったのに、アルに殺されるところだった」
だった。

それからアルのマントに包まれて、お姫様抱っこをされて部屋を

出た。

非常に恥ずかしかったけれど、化け物の毒が何かを避けるためと、私の足が震えて歩けないので仕方なかった。

仕方なかったんだけど、照れくさかったけど

ちよつと

いや、かなり嬉しかった。

化け物が迫った時は、アルとはもう会えないと覚悟していたから

……

廊下に出ると、私が知らなかっただけで 化け物と戦って怪我をしてしまった衛兵達がかなりの数いることが分かった。

それを見て 改めてゾツと寒気がこみ上げた。

私も もうちよつとで大怪我どころか 死んでいたかも……と思うと あの恐怖がぶり返す。

「アル、アルと一緒にいて」

情けないことに、アルに弱音を吐いてしまつて困らせた。

神殿は安全だということなんだろうけど、化け物も戦神も得体の知れないものという意味では 大差ない。

初めて神殿に行つて倒れてから、アルに付き添われて何度か『神の間』に入つたけど まだ怖い。

底知れない恐怖を感じてしまうのだ。

でも、『赤の庭』に化け物が現れたと知らせが入り……

アルの顔つきが変わった。

アルと離れるのは嫌だけど

アルが怪我しないか 心配だけど

何も知らない他の人が襲われるのは 防ぎたいと思った。

そして何より アルフレッドが 騎士団の隊長の、またアイスリンド国王子の『顔』になっていた。

これは自分の我儘を通して良い状況ではないと感じた。

アルフレッドは公人でもあるんだ。

上に立つ者の責任。

元の世界で私が放棄していたもの。

そんな私に アルフレッドを止めれる訳が無かった。

私は、アルフレッドから身を放した。

10話 魔獣5 ｝side花音

アルフレッドが『赤の庭』へ向かった後、私はエマに手を取られ宮の一室に急遽^{きんぐ}設けられた診察室へ入った。

師団の治療班が瘴気の影響などを診^みてくれたが、極微量^{ごくりょう}だった為体に障^{さわ}りは無いと言われ、治療らしい事もせず アルの寝室へと廊下を移動した。

アルの書斎の前と寝室の扉の前を、師団から派遣されたであろう騎士が2人つつ警護している。

エマは騎士に軽く会釈しながら

「アルフレッド様の寝室は蒼玉宮^{せいぎよくきやう}の中で 壁もドアも一番厚く、先ほど師団の方が防御結界を何重にも強化されましたから ご安心下さい」

と、私の不安を和らげるように微笑んだ。

部屋に入ると私は崩れるようにソファに沈み込んだ。
そんな私にエマは

「すっかり体が冷えてしまわれましたね。湯浴^{ゆあ}みをして 温まればお疲れも取れ、気分も きつと良くなりますよ」

と勧めてくれたけど、無防備な裸になれる気分では とてもじゃないけどなかった。

私は、ソファで丸くなり膝を抱えてマントに顔を埋めた。

アルが掛けてくれたマントからは、アルの匂いがして それに包まれていると何だか アルに守られている気がした。

マントの前をギュツと合わせて、小さくなる私に それならばとエマが暖めた飲み物を手渡してくれた。

温かいカップを持つと、自分の手が冷たく痺れるほどに マントを握り締めていた事に気が付く。

「あたたかい……」

小さくつぶやくと やっと少し息が出来た気がした。

カップを顔に寄せると とてもいい香りが立ち昇った。

一口含むと とろりと甘く濃厚な飲み物は 何かの果汁だろうか、酸味があつたが 強張った私の体を解してくれたようだ。

カップを空にして、ほうつと息を吐き出した私に、エマはそっと寄り添うと

「アルフレッド様が戻られるまで、お傍に居ります」

と私を安心させるように 優しく抱きしめてくれた。

それから暫くは 遠くに聞こえる外の音を、ぼんやりと聞いていた。 さっきの飲み物に お酒でも入っていたのだろうか？ エマと話していたのに だんだん体が温かくなって いつの間にか私はうつらうつらと眠りに落ちていたようだ。

エマに時間を確かめると、アルが『赤の庭』に向かって2刻程になる。

1刻が2時間だから、4時間。

私の感覚では 今、だいたい午前2時くらい。

アルが今だ戻らないことに 不安が募る。

更に、外からは風の音が聞こえたのだ。

寝室は元々 壁が厚く、防音もされているという寝室は 外界の音が伝りにくい。 アルに宮を案内されて入った時は 窓から明るい光が差し込み 綺麗な部屋だと思って見ていたけれど、今は窓自体が消えて壁になっていた。 そんな部屋にまで届く風の音は、天候の悪化を 暗に告げていた。

遅い。

第2師団の人達も順次転送されて 訓練場から戻ってきていると聞いた。 アルが駆けつけてくれた時より魔道騎士の数は揃っているはずなのに……

大人数でも手に負えない 強い魔獣だったんだろうか？

アルが心配……

もしも、大怪我をしたら どうしよう？

怪我じゃなくて、死んでしまったら？ 私は どうしたらいいんだろう？

こんなに心配になるなら、『行かないで』って止めればよかった？でも、アルは王子で騎士団の隊長……そして、危険を部下に押し付けて自分の保身を図る様な心の持ち主ではない。

アルが第2師団に配属された時、出身が平民であるとか貴族だとか関係なく 皆が『国を守り家族を守るのは自分達である』という誇りと決意を持っていることに驚かされた。そして王子である自分は 今まで何をしてきたのだろうと恥ずかしくなり 奮起した結果、今の自分があるのだ。師団の皆は大切な友であり仲間である。と、語ってくれた事があった。

そんなアルが仲間だけ危険にさらす訳がない。

「はああ」

私は何度目かの溜息をつく。

私はどうしてしまったのだろうか？

アルに会いたい。

アルに抱きしめられたい。 アルの腕の中は温かくて、安心できて 自分が此処にいていい場所に思える。

アルの事がこんなに心配なのは、アルが死んでしまうと元の世界

に帰れないから？

違う。

殺されると思った時、思い浮かべたのは元の世界の誰でもなく、アルだった。

私は、アルの事が好きになったんだ。
どうしよう？

私、アルが好きなんだ。

でも、此処での私は 何も持っていない只の小娘だ。 アルは王子で、私は小娘。

前は余計な肩書きが邪魔で仕方なかったけれど、何もない事でこんなに不安になるなんて知らなかった。

『戦神の声を伝える巫女^{いくさがみ}』
^{みこ}

この恐ろしい肩書きにさえ縋^{すが}ってしまいたくなる。

アルが私に優しいのは、自分が召喚した巫女だから？

アルに会いたい。

アルに会って、ちゃんと話したい。

アルの気持ちを知りたい。

私は、アルが戻ったら 今日こそ自分の気持ちを伝えようと心に決めた。

10話 魔獣5 ｝side花音（後書き）

大変お待たせ致しました。

この機会に1話から見直しをさせて頂きました。

その結果、かなりの箇所が少しずつ変わっています。

（細かい設定変更や、補足説明の加筆などです）

大まかな話の筋や設定は変わりありませんが 話の印象が少し違う
かもしれません。

未熟者です。

お許し下さい。

11話 魔獣6

花音^{かのん}がエマに刻限を聞いてから およそ半刻後、不意にエマが立ち上がり、花音の座るソファが揺れた。

物思いに耽^{ふけ}っていた花音は驚いたようにエマを見て、エマの視線を追った。

すると、その先にある寝室と書斎を繋^{つな}ドアが開いており 書斎からの明かりに照らされた長身のシルエツト^{たえず}が佇^{たたず}んでいた。

その影は無言で寝室に入り、今にも走り出しそうな勢いで ソファまで来ると、花音の前にフワリと跪^{ひざまづ}いた。

逆光で影になっていた顔が、吸い寄せられるように花音に近づく。

アルフレッドだった。

髪から、雫が滴っている。

よく見ると、アルフレッドの全身は激しい雨に打たれたのか 濡れていた。

アルフレッドは花音の手を取ると、手の甲に自分の想いを込める様に そっと口付けを落とし

「カノン……傍に居てやれなくて すまなかった」
と心より詫びた。

金の前髪から 雨水の雫が花音の手にかかる。

花音は空いている方の手でアルフレッドの目に掛かる前髪を横へ撫でつけると そのままアルフレッドの胸に倒れこんだ。

「アル。 アル。 無事でよかった」

花音は自分の夜着が濡れるのも気にせず アルフレッドの首にしがみついた。

「アルにもしもの事があつたら どうしようって……私 すごく、怖かった」

「ごめん」

アルフレッドは花音を強く抱きしめた。

「襲われて、死ぬのかと思った」

いつもの勝気な花音からは考えられない 儚げな声だった。

「僕も心臓が止まるかと思った。 でも、もう大丈夫だから……」
だから、安心して……と アルフレッドは花音の背を擦った。

花音の体温を感じてアルフレッドもまた やっと張り詰めていた
神経が緩むのを感じた。

自分の首筋に額を着けたまま じっとしている花音の頭に手を伸ばすと、滑らかで絹糸のような髪が いつもと同じに指に触れる。

花音の体温。

花音の匂い。

抱きしめたやわらかさも、声も、眼差しも。

ちよつと気が強くて、愛情に餓えている事に気が付いていなくて
傷つきやすい心も……

もう少して 永遠に失くしてしまうところだった。

アルフレッドは 震えて頭が真っ白になるほどの恐怖を感じたものの正体を理解した。

自分にとって、花音の存在がどれだけ大きなものであるのかを
彼は、今日初めて体感したのだ。

首に幽かに感じる花音の吐息。

その愛おしさに甘い痺れが彼の中に広がる。

花音はアルフレッドに 抱きしめられたままで

「アル。死ぬと思った時、私の頭の中に浮かんだ事……何だと思
う?」

くぐもった声で問いかけた。

「……何だろう……家に、帰りたかった? こんな恐ろしい国が嫌
いになってしまった?」

アルフレッドは ひどく辛そう答えた。

「ううん。違う」

花音は顔を上げると、今度はアルフレッドの目を見つめて言った。
「自分が もう死ぬと思った時に、思い浮かんだのは 家族や子供
の頃からの友達や、好きだった人の顔でもなく、あなただった。

アルの顔しか浮かばなかった。

アルにもう一度会いたかったの」

「本当に?」

アルフレッドは信じられない気持ちで 聞き返した。

「本当に。」

アルは来ないと分かっていたはずなのに、アルに助けて欲しくて
ずっと心の中で叫んだ。

助けてって……

だから アルの声が聞こえた時、夢を見ているのかと思った……
アルに抱きしめられて、このままずっとアルの腕の中に居たいと思
った」

花音の頬は 心なしかほんのりと色付き、潤んだ瞳と相まってア
ルフレッドの理性を激しく揺さぶった。

「ずっと……ずっと僕の腕の中に居たらいい」

彼は驚異的な自制心をもって己の衝動を押さえ込むと、花音に対する想いを素直に告げた。

「もう二度と怖い思いはさせないと誓うから……カノン。

僕が君を守る。

君のことが好きだ。

だから、僕の傍にいてほしい」

花音の視線の先には、アルフレッドの決意のこもった瞳が強く光っていた。

「でも……私　ただの女の子だよ？　巫女の役割だって果たせてないし、アルの役に立たないよ……」
アルフレッドの勢いに押されてか　花音の言葉は弱々しく口の中に消えた。

そんな花音に

「役に立つ立たないの問題じゃない」

アルフレッドがピシヤリと言った。

「カノンはそんなもので好きになったりするの？」

アルフレッドの澄んだ青い瞳に見つめられて　カノンは思わず目をそらした。

「そんなので好きにならない」

花音は　口を尖らせて　ぽそりと呟つぶやいた。

「僕もだ。

僕の欲しいもの、何か分かる？」

アルフレッドが　片眉をわずかに上げて微笑んだ。

「？」

花音の目が分らないと開かれる。

「僕の欲しいものは、家族。

普通の家庭が欲しい。愛する人に囲まれて暮らしたい。

好きな人を愛して愛されて、結婚して、子供が生まれて、家族になる……僕の憧れだ。

もうずっと諦めていたんだけどね」

そう言ったアルフレッドの目は 過去の何処か遠くを見ているように、花音の心を締め付けた。

「僕は王家に食い込む為の手段であり 贅沢をする為の財源としか見てもらえなかった。僕自身を認めてくれたのは王立魔道師養錬所^{アカデミ}で一緒だった数名と、第2師団の連中くらいだ。

だから、国民の為になればいいと 召喚者になったんだ。

もちろん、喚^よんだ巫女のことは大切にしようと思っていたよ……

ほら、こっちの事情に無理やり巻き込むことになる訳だし……

カノンを一見見たとたん、そんなこと頭から飛んでしまったけどね」

「正直に言うよ」

いつになく照れくさそうに、しかし真剣にアルフレッドは居住いを正した。

「一目惚れしたんだ。

召喚で喚^よび出されるのは召喚者の運命^{ひと}の女だっていう意味を分かってせられたよ。

正に心臓を鷺掴^{わしつか}みにされた感じかな？ カノンが綺麗で可愛らしくて目が離せなくなつた。

何より、僕を見つめる カノンの真っ直ぐな瞳に 魂まで奪われたよ。

こんなに人を欲したのは初めてだ。

カノンが欲しい。

カノンと一緒にいたい。

カノン。

愛している。

ゴメン。

元の世界に帰してあげられそうにない。

カノンと離れたくないんだ

カノンと家族になりたい……」

最後の方は、彼の本心を搾り出したかのように声がかすれていた。

「家族……」

花音はうわ言のように呟いた。

「そう。

カノン

」

アルフレッドは花音の両手を自分の手で包み込むと、花音の目を

見つめて僅かに躊躇した後

「僕と、結婚してほしい」

一息に告白した。

11話 魔獣6（後書き）

続きます

12話 魔獣7

「アル……そんな風に思ってくれてたのね……
うれしいよ とても」

花音の黒曜石の瞳に 雫が浮かび上がった。

「でも……
殺されそうになった時、私 親の顔も浮かばなかった。
私は きつとすぐ薄情な人間だよ。 アルの事しか浮かばない
なんて……」

花音は涙が落ちる前に顔を伏せようとしたが、アルフレッドの手
が下顎あごを捕らえると 彼に顔を向けたまま、涙を一筋零こぼした。
そんな彼女の涙に アルフレッドはくちづけると、彼の顔はこれ
以上はないほど満面の笑みを浮かべていた。

「カノン。 悪いけど、それ 無茶苦茶うれしいよ。
カノンの心が 僕で一杯になっているなんて……物凄く うれし
い」

そう言つて、頬にまた唇を落とした。

「ゴメンね、カノンは何も悪くない、薄情なんかじゃない。 全部
僕が悪いんだよ。

僕がカノンをこの国に無理やり連れてきて、家族から引き離した
んだ。

だから、みんな 僕の所為だ」
そう言いながらも、アルフレッドは嬉しそうに笑っている。

「私がアルを好きになってしまつて、家に帰りたくなかつたのも？」

すこし拗ねたように花音が問う。

「僕の所為」

今度は頭頂に くちづけた。

「私の心が、アルで一杯になつてしまつたのも？」

「僕の所為」

額に一つ。

「カノンが家に帰れないのも、僕の所為。」

巫女という役目を無理やり押し付けられたのも、僕の所為」

自分の所為だと言う度に、アルフレッドは花音のそこかしこにくちづけを落とす。そして、艶やかな笑みを浮かべて

「だから 僕の全部をカノンにあげる

心も、体も 命も 未来も……全部、カノンにあげる」

最後は額と額を合わせると、アルフレッドは まるで祈るように花音に言葉を捧げた。

「アル……」

「 だから、僕の傍にいて 君を放したくないんだ」

熱い吐息で呼びかけるアルフレッドに、花音はチロリと上目遣いで睨みをきかせると

「嘘つき」

はつきりと、しかし 照れを多分に含んだ声で花音が言った。

「全部は貰えない。アルは自分の役割を投げ出さないから……
今日だって」

「あああ、ゴメン。 そうだね。
困ったな。」

そういう所以外の全部……ではダメかな？」
降参という風にアルフレッドが笑い出した。

「……………仕方ないなあ」
花音がクスリと笑みを漏らす。

「込み……でいいよ。
逃げずに頑張るところ 尊敬しているから。
私には出来なかった事 だから……」

そのかわり、必ず戻ってきてくれるって 約束して。
私の隣に帰ってきて。
絶対 独りにしないで」

花音が真顔になった。

「約束するよ。
何があっても 必ずカノンの傍にいる。
僕の帰る場所は、カノンだけだよ」

アルフレッドも真剣に答えた。

「じゃあ、私の居場所も アルの傍だよ。
アル。」

私

帰らない。

もう、何処にも行かない。　アルの傍にいる」

彼を真つ直ぐに見る濁りの無い花音の瞳は、神秘的な輝きを帯びてアルフレッドの心に幼い頃から空いていた闇を温かいもので埋めた。

「うれしいよ。　カノン」

アルフレッドは　溢れ出す喜びに　生まれて初めて満たされた。思わず　花音を強く抱きしめてしまい、

「役に立たなくても、他の美人に目移りしても、返品は不可だからね。

帰れって言っても、帰ってあげないからね」

と、アルフレッドの腕の中で　花音が注文をつけても

「うん。　浮気はしないよ。　カノンだけを愛するよ」

甘い言葉だけがこぼれる。

「私は欲張りだから、アルの全部を欲しがってしまうよ?」

「欲しいだけ　あげる」

「我儘も言うよ?」

「好きなだけ　言って」

「死ぬまで、私だけを愛してくれる?」

「僕の命が尽きる瞬間まで カノンだけを愛する事を誓うよ」

二人だけの部屋に 静かで神聖な空気が流れた。

「じゃあ。

私を あげる。

アルフレッドに、私をあげる。

私はアルフレッドのもので、アルフレッドは私のものだよ」

互いに見詰め合う二人の間を隔てるものは もうなにも無かった。

「ああ 僕はカノンのもので、カノンは僕のもの な
んて甘美な言葉だろう」

アルフレッドは 喜びを噛み締めるようにカノンに唇を寄せた。

花音も柔らかな笑みを浮かべながら 自然にそれに答えた。

初めは啄つばむように、そして 徐々に熱情を帯びて……

お互いが お互いを見出した彼らに それ以上言葉は要らなかつた。

12話 魔獣7（後書き）

次回からはシードと雪羽の話に戻ります。

13話 魔獣8（前書き）

たいへんお待たせしました

13話 魔獣8

『せいぎよくきゆう蒼玉宮に 突如 魔獣が出現し、巫女姫が襲われた』

『3体中、1体をアルフレッド王子が仕留めるも、2体は逃走』

『現在、王城及び神殿の結界内に潜伏しているもよう』

この知らせが届くと、執務室は殺気立った。

執務長官ジョナス・ラズモントの号令の元、事実の把握と 現状の確認、王への報告と評議会の招集、王宮の警護及び魔獣の掃討の手配……等々 やらなければならぬ事は山のようにあった。

王城に魔獣が出現するなど、前例のない非常事態の上に所轄争いなわばりが早々に始まっていて、混乱を避ける意味で、国王直下の組織である執務室が采配を振るう事になったからだ。

そもそも巫女みこと依巫よりましも召喚が行われた時点で、魔道府全体の仕事量は増加し 必然的に執務室も慢性的な人手不足を抱えている。本来の業務以外の仕事に借り出される者が多いのだ。

普段のオーバーワークに加えての急務に、現在 王都にいる執務室職員は全員徹夜で対応に追われ 夜が明ける頃には皆 疲労の色がべつたりと顔に塗られていた。

「ロニー！ どうして、こんな事になってるんだっ！」

王宮のそこかしこに夜通し焚たかれた松明たいまつが 朝日に役割を譲ゆずる頃、シーワールドの叫び声が『赤の庭』に木霊した。

「通商会談に借り出されて半月もこき使われた拳句、やっと帰れたと思ったら 魔道府に転移出来ずに王都の外れに飛ばされ、今の今

まで足止めを食わされてたんだぞ！

なんとか話を通して戻ってみれば 座る暇も無く、お前に強引に連れ出されて……

いい加減に説明したらどうだっ！」

「あ 怒鳴らないでくれるかな 徹夜明けの頭に響くんだよお。

はいはい。 君の言い分は ごもつともです」

説明します」

昨夜、蒼玉宮に魔獣が出現、2体が逃走、王宮警護と第2師団で縄張り争いの末、本日正午までに警護が始末出来ない場合は第2師団が演習がてら狩る。

ラスモント長官からは「師団を動かすな、修繕費が掛かる。王宮警護の近衛なんぞ最初から数に入れるな、四の五の言わずに片付けろ」だそうです」

魔獣の討伐なんて、魔道師養錬所の卒業試験以来じゃない？ それをサクツと片付けろって？ 長官の方が魔物？ どんなけ人使い荒いの？

あゝと、ちょっと意識が飛んでたわん。

えっと、魔獣は瘴気を吐くのと、焼き殺さないといけないヤツ。 やっかいだよねえ」

と、いう訳で シーウエルド。 がんばってね」

そう言つて友人にウィンクするロニーはすっかり徹夜の所為で、精神が飛んでいるようだ。

しかし、魔獣が逃げた後の庭園で出現場所の警備に当たっている兵に聞こえない様配慮したつもりだろうか、ロニーの説明は かるうじて小声であった。

ロニーの緊張感のない話にシーウエルドは青筋を立てたが、気をとり直して現状の確認を取った。

「被害は？」

「蒼玉宮の一室が大破、負傷者数名、死者ゼロ。巫女姫様とアルフレッド王子は無傷」

「そうか」

一言ロニーに返し、歩き始めるシーウェルドにロニーは不思議そうな声を上げた。

「あれえ？ ユキ八ちゃんの事、聞かないの？ 会ってないんだろっ？」

シーウェルドの歩みが止まる。

「ユキ八に……何かあったのか？」

前を見つめたままシーウェルドが問うた。

「いや、何も……無いと思う。魔獣が逃げた直後に結界が張られているから、討伐関係者以外は建物から出られないし、ザンバルデアの所から、居住区に居ると思うけど……会いたくない？」

「ロニー、その可愛く傾げた首を折ってぐるっと1周回していいかな？」

再びこめかみに青筋をたてながら、シーウェルドがにつこり笑った。

「愚問……だったね」

ロニーはシーウェルドの沸点がいつになく下がっているのを感じ取ると素早くシーウェルドと距離を取った。そんなロニーを横目で見ながら、シーウェルドはまばらに伸びた無精髭に手をやりながらぼそりと漏らした。

「俺だつて すぐにでも顔が見たいさ……でもなあ、こんな格好で会えないだろ」

「あゝ確かによれちゃってるねえ。昨日は風呂入ってないだろうし、下手したら2・3日？ あはは！ そうだよねえ、ユキ八ちゃ

んに『シード、汗臭いですっ』なんて言われたくないよねえ」

「そこまで、酷くはない……が、そんなところだ」

シールドは懨然^{ふぜん}とした顔で続けた。

「ユキハさえ無事なら、後で時間など幾らでも取れる。ユキハが無事なら……今はそれでいい。仕事をさつさと終わらせて、ゆつくりと会いに行くさ。その為には、師団に引つ掻き回されたくない。長官の言うとおり仕事が増える。

それに戦闘なんて、俺も久しぶりだから……勘が鈍っていると
もかぎらんし、手間取っては拙い^{ます}。

時間は無駄にできない。

追うぞ」

シールドは自らを鼓舞^{こむ}するように言うと、魔獣の逃げた先に
駆け出した。

雪羽が目を覚ました時、同室のミリは すでに出かけた後だった。
「いつも 無理やり掛け布を剥がさなければ起きない朝寝坊なのに
……」

不思議に思いながらも、雪羽は身支度を整え朝食を摂りに食堂へ
向かうが、その朝はどうも居住棟全体がザワザワと浮き足だってい
る様に思える。

食堂にミリの姿を見つけると、雪羽は混み合う中をすり抜けて声
を掛けた。

「ミリ、何かあったの？ みんな いつもと、違うよ？」

「ユキハ…… 今、呼びに行こうと思っていたところだったのよ！」

「？」

「魔獣が出たのよ！ この、王城に！」

「まじゅー？」

「魔獣よ。 ま・じゅ・う。 すっごい凶悪なヤツでね、2匹もいるんだって！ キャー！ コワイ！」

雪羽が声を掛けるまでミリとお喋りをしていたミリと同年代の女官達も、笑いながら『コワイ』と声を揃える。

その様子は 怖がっているというより、楽しんでいるように雪羽には思えた。

「怖いものなのですか？ まじゅうは」

魔獣を見たことのない雪羽は 一体どういうものなのか見当もつかず 素直にミリに訊ねる。

「うーん。 どうかなあ。 私も本でしか見たことないし……あつ、そうそう。 建物に結界が張ってあるから、魔獣は入って来れないの。 昼までに近衛が退治するって話だから、運が良ければ窓から魔獣が見れるかも」

「はあ……？」

「それよりもよ！ 演習から戻ってきた騎士団が詰め所に入りきらなくて居住棟の広間で待機しているの！」

「はい？」

雪羽はそう言われてもピンとこない。

「有望株のチエックと、今年入団した子の発掘をいかに効率良く行うかを皆で検討しているのよ」

そう言ったミリは、とても楽しそうに笑った。 周りの娘達もキャーキャーはしゃいでいる。

非常に楽しそうである。

女官といえども、皆 うら若き乙女達なのだ『この非常事態に不謹慎だ』などと野暮な事を言う上役は どうやらないらしい。 騒がしい食堂で、上役が朝食を摂っている姿も見えるが、せいぜい苦

笑を浮かべて『程ほどになさいね』とたしなめる程度である。

「ユキハも一緒に行く？ 私達、広間の世話役を命じられたのよ」

「あたしは……おじいちゃんに聞いてからにします」

「そう？ 老師の了解が取れたら来なさいね。イイ男の見分け方を教えてあ・げ・る」

「……はあ」

この世界のイイ男が見分けられる事に大した利点があるとは思えなかったが、誘いを無下にすることもはばかられるので、とりあえず手早く朝食を済ませると、雪羽はザンバルデアの元へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0703/>

巫女と依巫

2011年5月25日01時04分発行